

---

# 魔法少女の世界に転生とかしてみる

八雲家の使用人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女の世界に転生とかがしてみる

### 【Nコード】

N0919Z

### 【作者名】

八雲家の使用人

### 【あらすじ】

魔砲少女な世界に転生してしまった主人公。少年時代からやり直しになり、思うようにいかない日々。取り合えず、頑張っ生きてようと思います。能力微妙だけど。／／／注意 この作品には、ハイレム・ご都合主義・主人公最強などの成分を含みます。そういうのが苦手な人はご退場ください。

転生とかしてみる(前書き)

はじめまして、八雲家の使用人です。

進む妄想が抑えられず、ついにはやっつけてしまいました。反省はしている、だが後悔は(r y

ストーリーが適當すぎる。設定も適當。ご都合主義エ

批判お断りです。批判するなら読まないで下さい。

それでもおっけーね！な人はどうぞ先にお進みください。あなたが勇者か。

## 転生とかしてみる

日常というのは何事にも変えがたい大切なもので、変わることに無いもの。

そう考えていたのはいつのことだっただろうか？

まだ小さい小学生だったか、それともヤンチャした中学生だったか、はたまたアホした高校生の頃だったか。

少なくとも、俺という存在にとって、普通というものはごくごく当たり前前で、変わる筈のない日常だったはずだ。

俺という人間は、ごくごくどこにでもいる高校生　とは少し言いがたい、オタクによくありがちな転生というものに憧れている男だった。

変わらない日々を過ごし、家に帰ってはゲームやアニメ三昧。学力は日々少しずつ低下していき、進路について日々悩む日常を送っていた。

なりたいものや、夢はなく、目指すものもない。そんな中で二次創作でよく見かける転生などといったものは魅力的で、憧れた。

人生をやり直したい。そう思っていたことは1度や2度ではなく、日々そう考えていた。

だけれど、そんなことは現実になるはずもなく、日々同じようなことを機械的に繰り返す日々。

そんな日常だったが、少なくとも、そんな日々には満足していた。

だけれど、そんな日常は脆くも崩れ去り、自分が死んだと自覚することも無く、俺はあっというまに命を落とした。

## 転生

どうやら、俺には転生をする権利が与えられたらしい。

もちろん、日々憧れていた夢のようなことを断るはずもなく、転生をした。

運のいいことに、能力を与えられて、アニメを何度も見直した「魔法少女」の世界に転生されるらしい。

この時、テンションが上がってあまり考えずに能力を口に出した俺を殴ってやりたい。能力には欠陥があった。

もらった能力はこれだ。

ff 召喚獣などを召喚できる「召喚の才能」とff 零式のセツナ卿並の召喚の才能、魔力を吸い取る「魔力吸収」。

あまり強大な力は渡せないとのことで、この能力を選んだのだが、充分チートな筈のこの能力がOKとのことだったので、コレにした。直前までしていたゲームがffだったので、たまたまこれしか思い浮かばなかったというのも理由だが。

さて、この能力のどの辺りが欠陥能力かというと、召喚とはすなわち魔法である。魔法ということは当然「魔力」がいるわけで。

ぶつちやけると、強大な召喚獣を召喚できるほどの魔力がなかったのだ。具体的に言うと、魔導師ランクC+相当。

当然、強力な召喚獣なんて呼べやしない。そのための「魔力吸収」だったのだが、こちらにも欠陥能力だった。

「魔力吸収」には条件がある。相手に触れること。それが大前提であり、そうしなければ吸収できやしない。

触れるためには近接格闘しなければならないし、そのためには強くないといけない。つまりは、どちらにしろ魔力が必要で、ろくに吸収できやしなかった。

じゃあ、雑魚相手に吸収を繰り返していればいいかと聞かれれば、それも駄目だった。

どういふことかというところ、魔力はあくまで吸収できるだけで、限界値　つまりはC+以上の魔力を蓄えることはできなかったということだ。現実是非常である。

悲劇はこれだけではなかった。

俺という転生者は、親というものが存在しなかった。

9歳ぐらいの縮んだ体に転生し、気がついたら高層ビルの立ち並ぶ、ミッドチルダと思わしきところにいた。

当然、お金なんてものがあるはずもなく、サービスと思わしきミッド語を理解できたのは良かったが、文字を書くことをできなかった。

路地裏を彷徨っていると、大人の管理局員と思わしき人たちが現れ、助かった　なんて最初は思ったりしたが、地獄の始まりの間違いだった。

思い出して欲しい。管理局の上層部が何をしていたかを。

連れて行かれて先ずやらされたのはスキャンである。早い話が、

魔導師適正があるか、片っ端から調べられたのだ。何人もの子供がスキャンされ、適正ありと適正なしに仕分けされる。

適正なしはどこかに連れて行かれ、適正ありにはデバイスが支給された。

「今から、貴様らには仕事をしてもらう。よく働いた者には衣・食・住を保障してやるが、役にたたん奴らは研究所行きだ。死なない程度に頑張ることだな。」

デバイスを手にした俺達に、言われた言葉はこれだけだった。

その場できちんと理解できていたのは恐らく、外見とは違う精神を持つ俺だけだっただろう。

安物のストレージデバイスを手にした俺達は、バリアジャケットと簡単な魔力弾、それとバリアの仕方だけを教えてもらい、すぐさま仕事に放り込まれた。

目にしたのはまさしく殺し合い。

非殺傷設定なんてものはないかのごとく、魔法が飛び交い、周りの子供、少年、大人が傷つき、倒れていく。敵は質量兵器を使ってきたり、遺法魔導師だったり、とにかく非殺傷なんて生温いことは

言ってられなかった。

殺らなきゃ、殺られる。そんな世界。

後々考えたのだが、俺は運がよかったのだらう。C+という魔力、レアスキル有りとのことで周りより多少魔法を学習されたストレージのデバイス、「魔力吸収」という魔力を長持ちさせるレアスキルに召喚魔法。召喚魔法に関しては、さすがはセツナ卿と言っべきか、簡単な召喚魔法なら使えることができた。

コレだけあって、生き残るのが精一杯。他人を蹴落とし、のし上がり、ようやくできた僅かな余裕も全て戦闘訓練に使わなければ生き残ることすらままならない日々。

原作介入なんて考えれる余裕なんてあるはずもなく、そこにある知識から少しでも強くなるつと足掻かなければいけない。

転生なんてしなければよかった。

そう思うようになるまで、時間はかからなかった。

## 転生とかしてみる(後書き)

取り合えず、一区切り。

もう、内容が適當すぎるwwwさすがのりとテンションとその場の  
思いつきで構成されてるだけあるwww

なんかシリアスっぽいこと描いてあるけど、実際そんな小説になら  
ないかも。

誤字などあれば、報告してください。誤字に定評がある俺ですから。

どうしてこうなったw

謎の機械とか戦ってみる(前書き)

2話目を投下。

別にそんなにストックとか作ってるわけじゃないけど。

超展開になるかも。

謎の機械とか戦ってみる

「慣れる」

人間とは恐ろしい生き物である。

他の生き物とは違い、高い学習能力を持ち、自我を確立させて思考することができる。

2年。

この世界に来てから、それだけの年月が経った。相変わらず、俺達のような存在の日常は変わらないもので、生きるか死ぬかの世界を彷徨っていた。

魔力は魔導師ランクBランク相当になっていた。さすがは成長期というべきか。酷使しすぎたせいというべきか。

地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 三等陸士。魔導師ランクは陸戦魔導師Cランク。

それが俺の今の肩書きであり、2年の成果でもある。

「対違法魔導師部隊」

その名の通り、違法魔導師を取り締まる部隊であり、俺の所属する

糞部隊である。

発足したのは結構最近のことで、そんなに長い間あるわけではないが、どこぞの権力者がもっと上にのし上がりたいがために出来た部隊である。

無茶いつて作ったため、規模も小さく、予算なんて唯でさえ資金不足な陸に、こんな部隊まで回す金などある筈もなく、雀の涙ほど。

そのため、人材を雇えるはずも無く、それでも上に行きたかった上司がやったのは、路頭を迷う子供を使うこと。

魔導師適正を調べて、適性あれば儲け物。なければ研究所に売り飛ばすという方法で金にするという違法手段にでた部隊であり、けれど、世間はそんなことは知らない。対違法魔導師部隊が犯罪を犯してどうするんだか。

対違法魔導師部隊といっても、活躍しているわけでもないの、仕事はえり好みせず表では派遣任務とかで他の部隊に行ったり、人材不足のところを手伝ったりしており、世間的な認識は「便利屋部隊」。

もちろん、労働基準法？なにそれおいしいの？と、地球の自分が言いたくなるくらいの重労働で違法魔導師の依頼があれば、それもきちんとなしている。

陸戦C、魔力はB相当の俺は、完璧な戦力扱いで、違法魔導師の取

り締めたりや、ランクにあわない任務など、もっぱら年中戦闘のしっぱなしで、何度も倒れた経験があるが、治療が終わり次第即戦場行きと、死線をさまよってばかりだが。

俺のやってきたことをそのまま俺の功績にしたのならば、もっと上にいけた筈。のだが、そこは上司が見事に掻っ攫っていったお、いまだに三等陸士。恐らく、このままあがることはないだろう。

新暦67年 冬

11歳になった俺は、今日も今日とて死線をさまよう。

今回の任務は、とある世界での足止め任務。

数が相当いる正体不明の機械（ガジェットと思わしき敵）との戦闘が俺達の任務のだが、陸戦である俺が最高戦力というまさしく自滅しにきたような任務であり、本格的に使い捨てるつもりなのだろう。

上にとって、俺達価値のないクズのような魔導師はポイ捨てるゴミと同程度なのだろう。

バンバンと激しい音がなり、あちこちで戦闘が始まる。

「オラッ！」

『ブリッツラッシュ』

俺は軽い掛け声とともに、手に持つ剣型アームデバイスを振る。

その特定動作に反応してデバイス無機質な機会音声をだし、腕の振りなどを高速化させる魔法であるブリッツアクションを発動させる。

ガキントと、剣がガジェットと衝突し一瞬抵抗するも、前世よりも遥かに高くなった身体能力でこり押しし、剣を振りきる。

その場に立ち止まっていると、他から攻撃されるのですぐさまその場を離れると、倒したガジェットが爆発し、焼け跡を地面に残す。

「やっぱり、ガジェットか」

付近にガジェットが居なくなったので、アンチ・マギリング・フィールドAMFの効果がなくなり、魔力の消費効率の良くなった身体強化を途切れ途切れに発動させ、次の敵の居場所へ向かう。

すれ違い様に、近くに居たガジェット？型を、ブリッツラッシュで加速した攻撃で破壊していく。

え？AMF内では魔法の発動は出来ないんじゃないかって？

それにはきちんと理由がある。それは、魔力をできるだけ圧縮させ

て魔法を行使しているからだ。

つまり、魔力が完全にかき消される前に、魔法を発動してしまう。そうすれば、例えば「ブリッツラッシュ」なんかは、加速した後は魔法をかき消されようとスピードを維持するだけでいいので、火力はあがる。

投げたボールは、その後力を加えてやらなくても真っ直ぐ飛んでいく。それと同じだ。

移動を続け、目の前に現れたのは？型が5機。

これはちよつときついな。しょうがない、魔法を使うか。

「揺らめく焰、猛追！」

『ファイアボール』

詠唱文を使い、魔法を起動させ発動する。足元にはミッド式でもベール力式でもない召喚魔法特有の魔方陣が展開され、魔法が出現した。眼前に現れたのは5つの炎球。真っ直ぐ飛ぶように加速した炎球はガジェットに直撃に、かき消されることなく破壊する。

これは俺が生き残るために編み出した魔法の一つだ。

俺の召喚魔法は、なにもff召喚獣だけに適用されるわけではない。

それを応用し、他世界から精霊を召喚、使役し、魔法を発現させる。

この時発現した魔法は、精霊の力を借りた自然現象。なのでAMFは効かないのだ。詠唱は特に決まっておらず、自分のイメージにあった文にするとより強い力が顕現する。

え？詠唱文がどこかで効いたことあるって？気にしないで、気にしない！

「はあ、やっぱりガジェット相手はやりづらいか。魔力のない機械だから魔力吸収ができないし。あんまり調子に乗っていると魔力が尽きるな。」

剣の構えを一度解き辺りを見渡すが、辺りには何も無い。

どうやら、ここいらはあらかじめ片付いたみたいだな。まあ、この辺はあんまりいなかったし、仲間が心配だ。できるだけすぐ戻った方がいいだろう。

俺はそう判断して踵を返し、仲間の下に向かっていくが、そこで足を止めることになった。

《全員撤退しろ、繰り返す。全員早急に撤退しろ。》

突如飛んできた念話に足を止め、思わず本部があるであろうところを睨みつける。

《戦闘不能者はいつも通りこちらで全員回収する。正体不明の機械は残っているだろうが、気にせず早急に撤退しろ。管理局本局期待のE様のご登場だ。》

本局期待のE様      ああ、主人公の高町なのはか。まあ、こちらとしては助かったがな。

回収。いつもの生命力を使った転移魔法か。

俺の所属する対違法魔導師部隊には、転移の力をもったペンダントが支給されている。それはなぜか。

簡単な話、部下を捨て駒にして違法行為をしていることをバラしたくない上司の作った、使用者の生命力を吸収し発動させる転移魔法だ。転移先は本部で、死ぬ直前になると根こそぎ魔力を奪い取り、強制的に発動させる魔法だ。死体を回収し、隠蔽するために。

上司はその所は才能あったみたいで、大量生産はできないが、人数の少ない俺達に分くらいは作れるらしい。忌々しいことに、死体からペンダントを回収し再利用。これで抜け穴の分も困らないってやつだ。

本当に、嫌な部隊だ。これだから嫌いなんだ、管理局は。

謎の機械とか戦ってみる（後書き）

どうしてこうなったw

私アニメしか見てません。間違った知識等あれば、ご指摘ください。  
無理やり修正します。

疑問点などあれば、どうぞ感想まで。

12/6 魔法を修正。誤字修正。

ブリッツアクション ブリッツラッシュ

原作介入とかしてみる（前書き）

3 話目投下。

今日はこれが最後です。

## 原作介入とかしてみる

走る。

撤退命令が出たので、所々効率的に魔力で身体強化をしながら高速移動し、雪の積もっている大地を駆け抜ける。

本部までの距離が近くなってきたのだが　少々離れすぎたか。

「？」

違和感を感じ、空を見上げる。

エリアサーチを使いたい所だが、あまり魔力を使ってもられない。もったいないからだ。

さて、どうしようか。と悩んでいると、本部から念話が届いてきた。

《何をやっている！！結界なんぞに捕まりおって！》

ああ、そうか。この違和感は結界か。

だとすると、周りに被害を出さないようにするためかな。白い悪魔様が魔砲を撃つと、しゃねにならない被害になるしな

内の部隊にも是非ともほしいところだ。そんな結界張れる結界魔導師が、内にいるわけないしな。

《ちっ！コレだけ頑固な結界だと、破壊しないで転移は無理だ。仕方ない、貴様は援護でもして活躍してこい。幸い、便利屋部隊呼ばわりの俺達の部隊なら、いても問題ないだろう。》

《 了解しました。》

俺は走るスピードを落とすし、耳をすませて戦闘しているであろう方向を見極める。

まったく、面倒なことに巻き込まれたもんだぜ。

所変わって戦闘場所。

そんなに離れていなかったようで、走り出してすぐに到着した。まあ、結界の範囲内なんだし、そんなに離れているわけがないのだが。

ドガンッ！ドガッドガンッ！

「 派手にやってるな。 なんだあの馬鹿魔力は？」

到着したと同時に目に入ったのは、極太桃色閃光ビーム。アホほど魔力を撒き散らし、ガジェットのアMFを問答無用で突破して、シューティングゲームの雑魚キャラを打ち落とすかのごとく破壊していく白いバリアジャケットのツインテール少女。その近くには、ガジェットを打ち砕くように破壊するチビっ子もいる。

いや、チビっ子は失礼か。

「無駄に空中の魔素濃度が濃い。これなら、空中にも立てそう  
だ。」

脳内で術式を組み立て、レアスキルを応用し、魔素を足元に集めて固める。

魔力で軽く身体を強化し、ジャンプした後、そのまま空中に立ち、さらにもう一段ジャンプ。それを繰り返し少女達の下へ跳んだ。

「助太刀、しましうか？」

突然話かけられたにも関わらず、ヴィータと思わしき少女はビクリとしなかった。流石は百戦錬磨の騎士。恐らく気配で気づいていたのだろう。

「お前、どこのどいつだ。」

こちらを振り向かず、鉄球を呼び出し、手持ちの武器をフルスイング。打ち出された鉄球はガジェットを打ち抜き、撃墜する。

見事なコントロールだな。

「地上部隊の対違法魔導師部隊所属レンヤ・カワカミ 二等陸士です。」

「便利屋部隊か。何で便利屋部隊の三等陸士がこんなところにいるんだ？」

「任務の途中に結界に巻き込まれて、戦闘しているようなので加勢に。」

ようやくこちらを向いたヴィータ（仮）はジーツとこちらを見たあと、再び前を向いた。

「嘘はついてないみたいだな。あたしは武装隊の特務捜査官補佐のヴィータだ。武装隊の演習で来ていたんだが、帰還の途中で襲撃された。」

なるほど。俺達の部隊は、高町達に襲撃しようとしていたガジェットを見つけて攻撃。倒しきる前に高町達がやってきて、ガジェットはそっちを襲撃。あの糞上司は、それを高町達が倒しにやってきたと勘違いしたわけか。

「それで、お前。魔導師ランクは何だ？飛行してるってことは、それなりだと思うが。」

「陸戦Cです。」

「はあ！？おま、そんなんでここにきたのか！？どうやって飛んでる！？」

「魔力を足場にしてます。早い話がレアスキルですね。」

「すっこんでろ！奴らAMFを使ってくるみたいだ。陸戦Cなんかで敵うと思ってるのか！？後はあたしらがやつとくから！」

これだからエリートは。

ランク、ランク。ランクと実力は関係ないだろうが。

そりゃ、普通は関係あるかもしれないが、あくまで普通ならだ。俺の場合は力の功績も正等評価されてないし、力が特殊だ。多分総合B+ぐらいはあると思う。

相性もあるし、ガジェット？型程度に遅れをとるつもりはない。

「そうはいいますけど」

「いいからさつさと」

軽く右手を横向きに突き出し、魔法を発動の用意をする。

レアスキルを発動。術式にねじ込み、魔力結合阻害を力技で突破し、圧縮する。

空気中の無駄に濃い魔素を吸収し、右手に集め、術式に魔力をながし、魔法陣に魔力を留める。消費した魔力はさらに吸収で補給に流し込む。コレを繰り返すことで、大技が可能になる。編み出した応用の一つだ。ただし、今回みたいに無駄に空気中に魔素がないと使えないけどな。

因みに、スターライトを参考に思いつきました。

充分魔力が溜まったところで、2メートルくらいの魔法陣が右手に顕現する。

「ひっこん で？」

ヴィータが啞然としてこちらを見ている。

使えない雑魚かと思いきや、いきなり大技っぽい魔法を行使しようとするれば、まあそうなるわな。普通。

「創世の火を胸に抱く灼熱の王

」

詠唱文は、本来存在しない。精霊の力を借りた魔法、仮に「精霊魔法」としよう。精霊魔法と同じで、イメージが大事なのだ。決まった文はいらぬ。より正確にイメージすることにより、消費魔力は変わる。

「灰塵に化せ！出て来い。『イフリート』」

『コール サモン イフリート』

魔法陣が眩い光を放ち、顕現されたのは炎。

灼熱の炎は形を変え、変化し、炎の魔人へと姿を変える。

「殺れ、イフリート。『地獄の火炎』だ。」

顕現したイフリートは俺から魔力を奪っていき、炎を収束させ、解き放った。

広範囲にばら撒かれた火炎は、機械を焼き尽くし、破壊する。

「」

「（やっべ、思ったより魔力を持っていかれるな。これで魔力C級の召喚獣かよ 通常の俺なら5分も持たないぞ。）」

唾然としているヴィータを見ながらそんなことを考えていた俺だが、思ったより魔力を持っていかれて結構焦っていたりする。

この状態でもう一体の方の召喚獣を維持できるかどうか

「それで、俺が何をすれば？」

「あ、ああ。このままある程度破壊を頼む。」

「了解！」

ヴィータの返事を聞いた俺は、イフリートを単身で突っ込ませた。

あんな魔力を喰らう技なんか、何度も使えるかっての。

その後の俺は、イフリートを維持した状態でちまちまと攻撃し、辺りのガジェットを破壊した。

相変わらず桃色閃光は飛びかっていたので、いつ巻き込まれるかひやひやしたが。 射程長すぎなんだよ！味方巻き込む気か！！

「おい、そっち終わったか？」

戦闘終了したので、顕現させていたイフリートを還していると、後ろから声を掛けられた。

考えるまでもない。ヴィータだ。

「こっちは終了です。武装隊の皆さんも無事みたいですし、一見到着ですかね？」

「そうか、助かった。礼を言う。AMFがあったからな。あたらだけじゃ時間が掛かっただろうし。」

「あ、ヴィータちゃん！大丈夫だった？心配したの！」

俺がヴィータのお礼に返事を返そうとすると、ヴィータの後ろから奴がやってきた。

白い悪魔である。

「それは、こっちのセリフだぞ、なのは！毎回無茶しやがって。大体、AMFを砲撃で無理やり突破するなんて何を考えてるんだ。」

「にやははは、出来そうだったから」

「そういう問題じゃねー！この際言っ「あー？」　なんだ？  
いまあたしは、なのはと話してるんだ。」

「いや、そうじゃなくて。そちらさんはどなたですか？」

もちろん、俺が言っているのは高町のことである。

一応知ってるが、不審がられないようにな。

「ん？ああ、そうかお前は知らなかったな。こいつは

」

「高町なのはっていうの。よろしくね、えっと      「レンヤで  
す。レンヤ・カワカミ。」レンヤくん！」

なんだか知らないけど、名前を嬉しそうに呼ばれた。訳分からん。

それと、ヴィータ。俺が知ってるはずないじゃないか。普通  
は。紹介くらいするのが普通だと思っただが。別段知りたい訳でも  
ないけど。

さて、この時点で俺はすっかり忘れていた。この時起こる出  
来事を。だから反応が遅れてしまったのかもしれない。

高町の後ろから迫る、ステルス機能と騎士服を易々と貫く攻撃力  
を有するガジエツト？型の存在に。

「      ツ！高町ツ！後ろだ！」

「え？」

高町とヴィータが俺の声に反応して俺の方から顔を逸らし後ろを向くと、近くまで迫っている蜘蛛に似た多脚ガジェット。脚を振りかぶり、今にも突き刺しそうだ。

「  
ッ!？」

そう、この時点なら、高町のアホみたいに硬いバリアが間に合うはずだった。そう、はずだった。

急に加速し振り向きながら魔力を練り上げるその動作。それが、負担だらけでポロポロだったリンカーコアを刺激し、高町に硬直を与えた。

「なのは!？」

「くそっ!」

そのとき、俺はやっと思い出した。高町なのは撃墜事件を。

何で思い出さなかったのか、数分前の自分を殴り飛ばしてやりた  
い。

エリートは嫌いだ。優秀だし、自分に出来ないようなことを平然とやってのけるし、こちらの気持ちを理解してくれないし。

だけれど、自分には見捨てるという選択ができなかった。

何か抵抗したわけでもなく俺はあっさり死に、転生先では自分が無力なばかりに周りで死んでいくやつがいる。

ズルしてもらった能力を使って、一度死んだ身で周りを見捨てて生きていく。そんな自分の罪滅ぼしの自己満足かもしれない。だけど、目の前で助けられる分のことくらい、やってもいいだろ？

いつもは無理だけど、今は空气中に魔素がいっぱいあるから。

3回の動作、ソレに反応して、まだ解除していなかったデバイスが反応する。

『アクセルフィン ブリッツアクション ソニックムーブ』

速度強化系の魔法の三重掛け。普段なら一気に減る魔力で気絶だとかするけど、そのうち二つは魔素で肩代わりしている。

視界が変わる。あまりの速さに、強化している視力が追いついていない。そんな中で高町だけ抱えるとか器用なことではできなくて。

出来たのは、何故か頭に直撃コースの脚から盾になって腹をぶっ刺されることだった。

激痛が腹を襲い、血が大量に腹から噴き出して、意識を失いかける。

刺さった脚を、振り払うように振り回され、脚から取れた俺は地面に落ちていく。

無様だなあ。俺。

原作介入とかしてみる（後書き）

相変わらず超展開。

ちよつとしたら設定もだそうかと。

これって読む人いるのか？

12 / 4 詠唱修正

入院とかしてみる（前書き）

思ったより読まれていて少し啞然。

だが、フリーダムにやっていくつもり。誤った表現とかあれば言うてください。

作者、現代文赤点スレスレです（笑

他の教科もだけどw

入院とかしてみる

突然やってきたやり直しの機会。

馬鹿やって大した力はもらえなかったし、つらいこともたくさんあつたけど、それでも後悔はしていない。

原作介入とやらを反射的にやってみただけど、代わりに自分は瀕死の重傷。

もう絶対やらねえ。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「知らない天井だ。」

目が覚めると、真っ白な天井の部屋に横たわっていた。

取り合えず、テンプレ的な台詞を言ってみた俺だが、状況を把握できず、混乱してしまふ。

結構な量の機材に囲まれていて、心音を表しているであろう機会音が、無音の病室を満たしていく。

「ここは病院　なのか？」

おかしい。

具体的に何がおかしいかというと、ちゃんとした機材が揃っていることである。

万年金欠の俺の部隊に、こんなところに長期入院させるような余裕はないはずだ。それに、死に掛けていた俺が回収されていないのもおかしい。

「あら？起きたかしら？」

「ッ！？」

俺しかいないはずの病室から声が出たので、思わずビクリと跳ね起き、そちらを振り向く。

そこには女性がいた。　いや、俺はこの人を知っている。何度か写真を見せながら上司が何か言っていたのを覚えている。

「あんまり激しく動いちゃだめよ？絶対安静なんだから。」

「リンディ提督。」

リンディ・ハラオウン。

それが彼女の名前で、原作にも登場していた主要人物だった一人だ。

高町なのは会話誘導で管理局の戦力とした張本人。

それだと、彼女がここにいる理由が分からない。彼女は海の手筈だ。一介の三等陸士の病室に来て何を考えている？

「ふふふ。そんなに警戒しないで頂戴。現状説明を任されただけよ。」

「そうですか。」

怪しい。余計に怪しい。本当に何考えてやがる。

「現場の收拾は、あの場にいた武装隊が抑えたわ。謎の機械 仮名称ガジェット・ドローンは破壊、重症の貴方となのはさんに応急処置を施してこの病院に運び込んだのよ。」

なるほど。回収されてないかと思ったら、そういうことか。

俺が怪我していたのは腹であり、それらの治療や処置を施すために、首にかけていたペンダントを外したんだろう。そうなれば俺を回収することはできない。」

「貴方が撃墜された後、すぐになのはさんも撃墜されたから、皆慌てて。ちよつと事態の收拾に時間がかかったのよ。」

「そうですね。」

「あまり驚かないのね？」

「何がですか？」

「なのはさんが撃墜されたこと。まるで知<sup>り</sup>ていたみたいだから。」

「正直言いますと、予想通りってところですかね。」

「予想通り？」

俺の言葉に、リンディ提督の目が細まった。

いや、予想通りってのは原作云々は関係なしに予想通りだね。俺が血を噴き出しながら落ちていくのを顔面蒼白になって見ていたし。あんなんじゃ、とても防御なんて行動がとれる筈がない。

その点、ヴィータは流石はヴォルケンリッターといったところか。俺の血飛沫に見ても動揺していただけみたいだし、あの場を收拾したのも彼女だろう。

「はい。自分が血を嘔き出しながら落ちていくのを見て、顔面真っ青にしてましたし。」

「それもそうね。ごめんなさい、変なこと聞いちゃって。あんな部隊に所属していたみたいだったから。」

「いえ、自分も言い方を気をつけるべきでした。      ん？」

あんな部隊？

俺は、周囲の時間が停止したように感じた。

俺のいた部隊は、あんな呼ばわりされて疑われるような部隊だっただろうか？

実態はそうだったが、世間的には違う。ということとはつまり

「あなたの部隊、調べさせてもらったわ。あんなペンダントを持っているみたいだったから。」

「      そうですか。」

バレているということに他ならない。

まあ、部隊自体は別にどうでもいいんだけどさ。

「それで、自分の処遇は？」

問題なのは、自分のことである。

強制的にやらせられていたとはいえ、不法侵入や器物破損なんてざらにあっただし、そんなに多い頻度ではなかったが 人殺しもした。

これだけやっついて、無実に近いのはありえないだろう。

「 地上本部直営の犯罪者更生部隊に異動。そこで5年の無料奉仕。あと魔導師ランクの破棄及び階級は訓練生と同じ扱いだそうよ。」

「よりによって自殺部隊ですか。」

自殺部隊、そう呼ばれている部隊で、局で犯罪を起こした犯罪者の勤める部隊であり、他の犯罪者を取り締まる部隊でもある。

そもそも、犯罪者更生部隊とは何なのか。

まず、管理局が絶対正義の名の下にあるということ为前提として

聞いて欲しい。実態はともかくとして。

さて、まずは正義の味方が犯罪者をどう扱うかを考えてはもらえないだろうか。特撮ヒーロー物でもいいし、王道バトルものでもいい。正義の味方が活躍して、戦って、悪を倒した後その悪はどうなるか。

物語の内容にもよるが、捕まえたりして悪を殺さなかった場合を考えてもらいたい。例えば俺の居る世界「魔法少女」の世界では、Strikersの時の悪であるスカさんは監獄にぶち込まれた。だけれどナンバーズの一部除いたメンバーは更生施設に入れられている。

そう、つまり正義は悪をも見捨てないのだ。

では、である。俺達のような人殺し犯罪者　とくに重罪死刑級の奴らはどうなるか。

答えは更生と称して危険な仕事をやらせるのである。そして仕事の中で死んでくれれば殉職扱い、仕事をこなせばありがたい程度に考える。そうした考えの下にできたのが犯罪者更生部隊である。

ようするに死にいくのと変わらないのだ。破棄される前の魔導師ランクを基準とし、その2つか3つぐらい上のレベルの仕事をやらされるらしい。

だけれど、おかしい。どう考えても、俺のやったことレベルでは犯罪者更生部隊に5年も入れられる筈がないのだ。強制的に

やらされていた、まだ比較的の子供であること。これらのことを考慮すると、重罪にはなっても、犯罪者更生部隊に入れられるほどではない。

そもそも、あそこは狂人レベルの殺人快楽者が入れられるようなところである。

「ごめんなさい！」

俺の思っていた疑問が顔に表れていたのだろうか。リンディ提督は俺に対して頭を下げてきた。

「 どうして、貴女が謝るんですか？」

「 本来なら、貴方はそこまで重罪にはならない筈だったのよ。」

それはそうだろう。俺くらいのやつであそこの部隊に入れられたら、死体処理班がいくつあっても足りない。

「 貴方、なのはさんを庇って怪我をしたでしょ？それが問題だったのよ。」

「 どういうことですか？」

「 なのはさんは撃墜されたって言ったでしょ？あの子、あれでも将来は有望視されてるの。」

そついうことか。

これで納得がいったぜ。要するに、上のやつらは俺なんかはどうなるうとも、高町の経歴に泥がつくほうがいやなんだな。

「要するに、俺は捨て駒にされたってことですね？」

「ごめんなさい。あなたを庇いきれなかったわ。」

「別に、貴方は庇ってくれた。その事実さえあれば、嬉しいです。」

「せめて、何か映像でも残っていればよかったのだけれど。」

「目撃者が1人だけじゃ信じてくれなかったでしょ？」

さて、現状の説明をしようか。

高町なのは及び俺はガジェット？型により撃墜された。二人は重症、恐らく原作通り高町は飛べなくなっているだろう。たくさん無茶やってきて唯でさえリンカーコアがボロボロだったんだ。今回の事件がトリガーだったんだろうな。

世間的な認識は、エース様が変な一般局員と共に撃墜されたってところか。ここで重要なのは、どちらが庇ったのかがわからないことだ。

本来、高町の経歴には、馬鹿やって一度飛べなくなり、他人を巻き込み自滅した。と載る筈である。      が、上が将来の輝かしいエース様の経歴にそんなものが載るのを許すはずも無く、事実を隠蔽する。

高町が自滅したのではなく、一緒に落ちた局員が自滅して高町はそれを庇ったんだと。リンカーコアの件は、高町が馬鹿やっていたのではなく、襲撃された敵の攻撃のせいにしてしまえばいいんだと。

その上、俺自身は犯罪やっていた部隊の所属だ。丁度よかったんだろう。

決め手は映像が全く残っていなかったのだ。      それに関しては俺が原因である。

「俺自身は、そんなに強くないんですよ。魔力も低いし、特定条件下のみでしか実力を発揮できない。だけれど、周りはそんなことを知らない。」

「だから映像を消したのね。」

「いくら目撃者がいても、よっぽど親しくないと信じられないような内容ですしね。」

「でも、どうやって?」

「      いろいろですよ。出ておいでファイー。」

俺の言葉とともに、俺のデバイスがおいであると思わしきところ

から、明るい光の玉が飛び出して、一直線に俺に向かって飛んでくる。

飛んできた光の玉は、元気よく俺の周りをビュンビュンと飛び回り、やがて俺の目の前に落ち着いた。

リンディ提督を見ると、啞然としている。

「電子精霊のフィーです。」

「その子を使ったの？」

俺の言葉に、宙に浮いている光の玉を、不思議そうに見つめるリンディ提督。

電子精霊とは何か。

俺が電子精霊の存在を知ったのは、無限書庫に、映像などの隠蔽をできる存在がないか探しに行った時である。

彼らは精霊という存在でありながら、電脳世界　ようするに電子機器などに宿り、機械系やネットワークの情報操作を出来る存在である。精霊という存在なので、魔力を与えてやればそれなりに働いてくれるし、光の玉のように実体化もできる。

機械系の映像消去は言うまでも無く、デバイスの映像記録すら書き換えてくれるのだ。使用魔力も低く、ロウリスク・ハイリターン。俺にはありがたい存在である

俺から説明を聞いたリンディさんは、ますます不思議そうにフィーを見つめる。あ、フィーが俺の後ろに隠れた。

「用件はそれだけですか？」

「ええ。伝えることは伝えたわ。」

そう言って出て行こうと立ち上がったリンディ提督だったが、出て行きずらそうに立ち止まった。

「どうしたんですか？」

「あなたは、死ぬのが怖くないの？」

「そうですね、怖くないと思ったら嘘になりますね。」

「でも」「だけど！」「！」

「べつじょつも」「ないんですよ。」

「」

「一人にしてください。」

リンディ提督は、俺が拳を握っているのに気づいたのだろう。何も言わずに出て行ってくれた。

それを確認にた俺は、握っていた拳をベツトに叩きつけた。柔らかい布団の感触がして、ベツトが軋んだ音をだす。

「うっ　　うっっ」

悔しかった。何で自分ばかりこんな目にあわなくちゃいけないんだと。

善意で助けたのに、それがこの様だ。管理局の上層部はとことん俺が嫌いらしい。

いや、高町達は悪くないんだ。悪いのは自分のことしか考えない上層部で、何も知らない彼女たちに当たったところで八つ当たりでしかない。

説明したら、罪悪感を感じて、罵ったら自分が悪かったと謝ってくれるだろう。だけれど、そんなことしても意味はない。

だからこそ、悔しかった。

入院とかしてみる（後書き）

相変わらずの超展開。

今回はなのはさん視点で書いてみるつもり。

フラグの立て方が雑すぎるWWW流石俺WWW

## 少女視点、フラグとか立ててみる（前書き）

どうも、本日2話目の投稿です

現実逃避をしていたら、進む妄想が抑えられなかった。気がついたら1話分書きあがっている　だど！？

毎回2・3000字を目安に書いてるのに、気付いたら4000字越してる。何故だ。

なのは視点で相変わらず超展開です。

主人公が適当にフラグを立てます。

そんな簡単にフラグが立つたら、俺はとっくの昔にリア充だわ！！  
！！ってのがあるので、そういうのが駄目なら見ない方がいいです。  
それでもokな貴方は同志だ。

少女視点、フラグとか立ててみる

目の前で落ちていく同い年ぐらいの男の子。

私はどうやら庇われたみたいで、血の気が引いた。

彼はどうしているだろうか？

立ち止まりたいこともあるけれど、それでもやっぱり進むしかない。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「空はもう、飛べないだろう。」

目の前で自分を庇って落ちていく彼を見て、呆然としていた私も落とされて、目が覚めた病院で言われた一言だった。

聞いたときは、頭が真っ白になって。とても信じることなんて出来なくて。

だけれどやっぱり現実で。

1週間。

私が病院に入院して、それだけの日にちが過ぎていた。

私の入院をリンディさんから聞いた様子のお父さん達やフェイトちゃん達も駆けつけてきて、心配してくれて、皆で泣いて。

彼はどうなったか。それだけが気がかりで、私が聞くとフェイトちゃんが怒ったように話してくれた。

彼が撃墜されたのは私のせいではなく彼が自滅したからで、私はそれを庇ったこと。

彼がいたのは犯罪をしている部隊で、彼は犯罪者更生の部隊に行くところ。

自分で言うのもなんだけど、あれだけ怒ったのは、久しぶりだったと思う。

最初は恐らく事情を知らなくて、一緒に呆然としていたヴィータちゃんも一緒になって叫んで。

それは違う。彼は何も悪くない。悪いのは無茶した自分だ。

フエイトちゃん達は信じてくれたけど、周りの人たちは全然信じ  
てくれなかった。映像が残ってなかったのがいけなかったのかな？

最初の3日は立ち直れずブーツとしていたけれど、ここ最近はり  
ハビリを頑張ってます。

もう一度、空を飛びたい。

「ッ！」

少し足に力を入れて、左右の棒に手を突き立ち上がってみるけど、  
次の瞬間には激痛が走り、倒れてしまった。

隣に控えていた看護師さんが私を支えてくれて、地面に倒れるこ  
とはなかったけれど。

「うーん やっぱりこれ以上は 。高町さん、少し休憩しまし  
よう。」

「え、まだできます！」

「いいから、ほら。お医者さんの言うことは聞いておくの！」

支えられていた体を車椅子に強制的に戻されてしまって、リハビ  
リ施設から遠ざけられてしまった。

むう、体が不自由なのは不便なの。はやてちゃんも、こんな気持

ちだったのかな？

看護師さんに、どこか行きたい場所はないかと聞かれたので、私はリハビリ施設と答えたのだけれど、却下されてしまった。しかたがないので、風に当たりたかったから屋上に運んでもらった。

屋上に着くと、看護師さんはちょっとお仕事があるから、ここでじっとしてるのよ？と言った後、出て行ってしまった。チャンスなの。

車椅子を端に寄せて、フェンスに手をかけ立ち上がる。手の力を緩めないようにつかまりながら、一步を踏み出し歩き出す。

「何してんだ？」

「にゃ！？」

突然後ろから声をかけられて、思わず力を緩めてバランスを崩してしまい、前のめりの倒れてしまう。

「おっと。」

が、後ろからお腹に手を回され、支えられた。

誰だろう、と顔を上げてみると、そこには私を庇った彼がいた。

血の気が引いていくのを感じる。今もつとも会いたくない人物にあっってしまった。

「俺の言えることじゃないが、怪我人は大人しくしてる。　　ちよつと失礼。」

「え？きやあつ！」

言いたいことを言い終えた彼は、私を支えたままの腕をそのままにして、新たに腕を私の足に回して一気に私を持ち上げた。

重たくないだろうか？

「え、ちよ　　ふえ？」

「はい、文句はあとで受け付けます。」

所謂お姫様抱っこ状態になった私は、彼に運ばれ車椅子に強制的に戻される。途中、引いたばかりの血の気が今度は上って顔が真っ赤になってじたばたと暴れてみたが、どうしようもなかった。

完璧に子供扱いされてるの。

車椅子に私を戻した彼は、車椅子に手を掛けて、フェンスと私を引き離れた。あう、貴重なりハビリ時間がつ。

「それで、こんなところで何してたんだ？まあ、理由は大体検討がつくけど。」

「む、それはちょっと失礼なの。なのは、そんなに分かりやすくないもん。」

「リハビリ止められた　ちょっと休憩　看護師さんがどこかに行くよしチャンス！　だろ？」

「あう」

言い返せない自分が憎いの。

「そういうレンヤ君は何やってるの？」

「注射って、痛いよね。」

「それって私よりだめだよね！？」

それにしてもレンヤ君、注射が怖いなんて。ちょっと意外なの。大人っぽいし、何でも出来そうな感じがするし。

レンヤ君は私の車椅子をベンチの隣まで運ぶと手を離し、ベンチに座って隣に腰掛けた。

「それで、大丈夫だったか？高町さん」

「なのは」

「え？」

「なのはって呼んで。」

「大丈夫だったか？なのは」

「うん！」

名前で呼んでもらえた。ちよっぴり嬉しい。

「まあ、それは置いといてだ。何をそんなに必死にリハビリしてたんだ？」

「」

「空飛べなくなたって、誰も責めやしないぞ？」

「それは」

いきなり核心を突いた会話に、私は動揺してしまう。

確かに私は必死に　いや、焦ってリハビリをしてしまったているんだと思う。飛べなくなたって、誰も責めない。確かにそうだ、人間はもともと飛べるような生き物じゃない。飛べなくても、なにも言われない。

「　怖いのか？」

「ッ!？」

「怖いんだな。魔法が使えなくなって、今ある関係がなくなってしまっことが。」

「ちが　　「本当か?」「」

「それは本心か?断言できるか?そんなことないって。」

「　　」

彼の言葉が　いや、彼の言葉だからこそ、私の折れそうな心を容赦なく責め立てていく。

元々、私が魔法を知ったのは偶然だった。とある事件で落っこちてきたユ一ノ君に協力して、偶然魔法を使えるようになっただけの少女。

それまでは、なんの取り柄もなくて、ごくごくどこにでもいる、一人ぼっちの少女。

そんな一人ぼっちの私に、今の交友関係をくれたのは魔法だった。フェイトちゃんもはやてちゃんもヴィータちゃんも　今いる沢山の友達に、魔法があったからといっても過言ではない。

そんな私から魔法がなくなると、どうなるだろうか?それはちがうと今ここで断言できるだろうか?

怖い。

今の関係が崩れてしまうことが。

嫌だ。

昔の一人ぼっちにもどってしまっものが。

「さて、少し俺のことを話そうか。」

「？」

そう言っつて、彼は真剣でどこか寂しい目をして、話始めた。

「俺が犯罪をしている部隊にいたことは？」

「フエイトちゃん 友達から少し。」

「そっか、俺は元々孤児だった。」

そして、聞いた。彼のことを。

レンヤ君のいた部隊は、上司が偉くなりたいがためにできた部隊で、人材はお金がないので孤児を連れてきていたらしい。犯罪なんて普通、生き残ればそれでよし。人殺しの経験もあるそうだが、無理やりやらされた。それでレンヤ君は犯罪者扱いだったのか。

だけれど、そんな部隊でも友達ってものはできるみたいで、レンヤ君にも何人か居たそうだ。

「それじゃあ、その友達はどうしてるの？」

「死んだよ。」

「え？」

「犯罪者の質量兵器に当たって皆死んだ。」

「ごめんなさい」

「別にいい。」

レンヤ君が言うには、自分は仲間の中でだったら恵まれていた方だったそうだ。運よく生き残って、それでも新しい子供が増えて、また死んでいく。その繰り返し。

いつも隊のなかで一人。少し、ひとりぼっちだったの私に似ている。

「ちょっと、分かる気がする。怖かったんだろ？魔法が使えなくなるのが。」

「うん。」

「嫌だったんだろ？一人に戻るのが。」

「うん、うん！」

「辛かったんだろ？皆がいなくなってしまうかもしれないことが」

「うん。」

まるで私の全てを知っているような気がして。私も彼が辛いのは理解できて。

彼の一言一言が、私の今にも泣いてしまいそうな涙腺を刺激していく。

そんな時、彼は私を抱きしめた。

暖かい。

「え？ええ？？」

「今は泣いとけ。我慢は良くないぞ。」

動揺している私を置いて、彼は話していく。限界だった。

「ふえ、ふええええん！！」

彼は、泣いている私の頭を撫で続けてくれた。

「泣き止んだか？」

「うん、もう大丈夫なの。」

「そっか。」

私が泣き止んだのを確認すると、彼は撫でていた手を止めて、私から離れていく。

ちよっぴり残念かも。

「悩んだ時は友達を頼れ。きっと力になってくれる。」

「うん。フェイトちゃんにもいろいろ言ってみるの。」

「ま、いい友達そうだし、大丈夫だよ。」

「カワカミくん!!どこにいますかー?!」

彼と話していると、遠くから彼を呼ぶ看護師の声が聞こえてくる。

そんな声に彼は慌てて立ち上がり、ここを離れようとする。

「やっべ！看護師がくる！？」

「頑張つて逃げてね。」

「くそっ、なのはは人事だからって余裕そうにしゃがつて！」

立ち上がった彼は屋上と下の階に繋がる扉に向けて走り出した。

「レンヤ君！」

「ん？」

扉を開けた彼を私は叫んで呼び止める。言っておきたいことがあるから。

「なのはと友達になつてくれる？」

突然の言葉にしばし瞬きを繰り返した彼だったが、やがてにっこり笑つてこう言った。

「もう友達だろ？名前で呼び合つてるしな！それと」

「魔法なんてなくても、俺達はずっと友達だからな！」

その言葉が、私の中に響いた。多分これから一生忘れないと思う。

あーあ。今の私、顔が赤いだろうなあ。

「ごめん、お待たせ。そろそろ病室に戻るわよ。それともリハビリする？」

今までどこかに行っていた看護師さんが戻ってきて、私に問いかける。

「いえ、大丈夫です。」

「あれ？なのはちゃんあんなにリハビリ必死だったじゃない。いいの？」

「はい。」

私の心境の変化に、看護師さんは戸惑い気味。今までは、一分一秒早く魔法が使えるようになりたかったけど、今は大丈夫。無茶はしない。

魔法が使いたくないわけじゃない、ただ

「魔法なんてなくても、友達はいますから。」

そう思えるようになっただけ。

無茶しても、友達が心配するだけだから。

「あー！？レンヤ君に謝ってない！！？」

「急にどうしたの！？」

私が彼に謝るのを忘れていて、思い出して一騒ぎするのは別のお話。

## 少女視点、フラグとか立ててみる（後書き）

本日分の奴はコレで打ち止めです。

迸る妄想が抑えられなかったら、もう一話投下しちゃうかも。でも、期待しないでください。

主人公は、時と場所によって似非敬語を使い分けます。基本的に誰にでもフランクです。

フラグ（笑）そんなに簡単に立たないから（笑）

誤字してき等お願いします。リクエストあれば、一応言ってください。検討はしてみます。ヒロインについても、後々アンケートなんかやってみようかと。

やってみたかったんだよね、アンケート。

長文失礼しました。

次元犯罪者とか逮捕してみる(前書き)

どうも、どうも。本日3回目の投下です。

迸る妄想を抑えることが出来ませんでしたWW

だが、自重しない。それが俺だから(キリッ

最後キャラ崩壊があるかも。

誤字に気をつけて読んでねっ

## 次元犯罪者とか逮捕してみる

撃墜事件から5年が経った。

犯罪者更生部隊の任務で何度か死にかけたりしたけれど、何とかやっています。

そんなこんなで、そろそろ異動の時期。大丈夫だろうか？

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「エリアサーチを頼む。」

『範囲はどうしますか？』

「半径500mだ。」

俺の指示を聞き、俺のストレージデバイスがエリアサーチを行う。最低限のやり取りが可能なAIが入っているので、厳密にはストレージではないが、ストレージと大して変わらない。

今回の任務は管理外世界に逃げ込んだ次元犯罪者を追撃することだ。

現在俺の所属している部隊　犯罪者更生部隊の任務は主に次元犯罪者の逮捕。年中そればかりやっている。目には目をもってやつだ。

俺の部隊に回されるような任務は、どれも優秀なエリート　つまり現実を知らない生温い奴らに任せられないような酷い犯罪者を処分するものばかりだ。今回の犯罪者は人体実験を行っていた奴で、本拠地だった研究所には脳みそ輪切りにされた子供とか、臓器を引きずりだされて電極に繋がれたまま生かされている男とかがいた酷い奴で、投降の意思などまったくくないみたいだ。

今回のような犯罪者のケースでは珍しく、本人もそこそこ強いという嫌がらせのような奴。

「右斜め前方457mに魔力反応あります。」

「了解。」

んー　ここからじゃ確認できないな。廃ビルが邪魔だ。上に上がるか。

あ、言ってなかったけど、この管理外世界、昔は人が住んでいたみたいで、廃ビルとかが残っている。

魔力で足場を作り、廃ビルの屋上まで駆け上がり、魔法の用意をする。

「長距離射撃で仕留めるか。セットアップ。」

『セットアップ。』

一瞬俺の魔力光である蒼色に光り、服装が変化する。デザインは黒が主な色の服。別段色に括ってはいなかったが、夜の活動が多かったので、黒になった。因みに今は昼間である。

スコープを覗き、狙いを定め、対象を確認する。どうやら、逃げ切ったと思っているようで、廃ビルの中で警戒もせず、のんきに休憩している。

「魔力圧縮開始、魔法陣展開及び魔力吸収発動。」

ライフルとなったデバイスの銃口と足元から魔法陣が展開し、光りを放ちだす。因みに今回はミッド式の魔法だ。

周りに存在する微かな魔素を根こそぎ吸収し、溜めの動作に入る。

「カートリッジフルロード。」

『ロード カートリッジ。フルロード。』

6つのカートリッジが一気に排出され、今から使う魔法に魔力を上乗せする。

「一撃必中」

『ソニックシューター』

俺の声に反応して、デバイスが魔法を完成させる。反動に備え、肩の力を抜き、受け流す用意をしてトリガーを引いた。

放ったのは、圧縮に圧縮された小さな魔弾。されど、威力が小さいのではない。そもそも俺が求めるような大威力は、既存の砲撃魔法を使うと、魔力消費が多すぎる。

だから、改良した。ソニックムーブなどの加速移動術式を変え、加速のみの術式を取り出し、射撃の魔法に応用する。速度は威力に繋がって、威力アップになるという訳だ。まあ、加速の魔法は、もともと多様していたから、そんなに苦労しなかったけど。

「こちらカワカミ。ターゲットの撃破を確認した。回収を頼む。」

《了解。》

取り合えず通信を繋げて、撃破を報告する。え？ターゲット？眉間を打ちましたけど何か？ 思ったより障壁硬くなかったしな。カトリッジを無駄にってしまった。それに、溜めの時間も無駄にしたな。

「お前、相変わらずしぶとく生き残ってるな。」

「出合って第一声がそれですか。」

俺が帰還して、取り合えず上司に報告しに行くと、出会い頭に文句を言われた。

ここは、犯罪者更生部隊の本部というか本拠地というか　まあそんな感じのところだ。

いくら犯罪者で構成されているとはいえ、そこそこの設備が揃っている。この隊員は大抵犯罪者なので、無料奉仕が当たり前どころだけれど、衣・食・住は俺がいたところよりマシだった。満足した食事がありつけるしな。

「大体、お前がいるせいで無駄に費用を使っているんだぞ。何とかしろ。」

「知りませんよ。文句をいうなら、俺をここに送りつけた上層部に言うてください。」

「それができたら苦労しねえ」

俺の言葉に、上司は疲れたように机に突っ伏した。ざまあ。

ん？なんで俺がいると無駄に費用を使うのかって？

ここ犯罪者更生部隊が自殺部隊だってことは話したよな？んで、任務に行くの大抵数回で死ぬ訳だ。自分の能力値以上に任務をやっているしな。

だから、食事とかそういうものがそこそこ高価な物が与えられるんだ。どうせ1週間くらいでいなくなる人材だしな。

だが俺は生きている。もともと、自分の能力値以上の力を出せるし、成長期だったこともあり、魔力値は上昇している。当時はBランクだったが、今はA+だ。それでも低いけど。

他の生き残った要因は、当時が陸戦だったこともあるな。受ける任務はAA辺りだし。

「お前が来てもうそろそろ5年になるのか。意外と早いもんだねえ。」

「そんなことより報告です。」

「相変わらず堅い奴だな。」

「いえ、貴方が馬鹿なだけかと。」

「俺、お前の上司だからな!？」

そろそろ、俺がこの部隊に来てから5年である。要するに、この部隊からおおさらばしてわけさ。

因みに、俺の馬鹿上司。あれでも有能な人材で、なんでこんなところにいるのか分からないくらいだ。まあ、何かやらかしたか、有能な人材を使わないと、犯罪者なんて纏められないかのどつちかだな。

「今回の違法魔導師ですが、研究施設は破壊、本人は逃げたんで追撃後いつも通り回収してもらいました。」

「 毎回思うんだけど、お前どうやってんの? 」

この部隊、基本的に仕事をしているところの映像を撮らないことになってる。

撮れないことはないんだが、戦闘中の映像を撮って元犯罪者の反感をかわないようにするのが目的だ。昔、映像を撮られてかなり怒ったやつがいたみたいで、いろいろと反逆されないように対策をとっているのに、それを突破しそうになるまで暴れたらしい。それ以降、映像は撮っていない。

お陰で、レアスキルについて隠すのが大分簡単になった。俺の戦闘情報は、前の部隊にいた頃のだけだろう。召喚師ってのは分かるだろうが、魔力吸収については一切分からないだろうな。秘密に飛ばしてくるサーチャーとかファイヤーに誤魔化してもらってるし。

「馬鹿には理解できない方法です。」

「絶対俺を馬鹿にしているだろ！」

「馬鹿にだなんて　ふっ」

「鼻で笑った!？」

「いやー、この上司いじるの面白いんだよね。一タリアクションが  
大げさだし。」

「それで、お前。陸と海、次はどっちに行くつもりなんだ？」

「間違いなく陸ですね。海には馬鹿ばっかですし。」

「いいのか？海でやっていける戦闘力があるなら、そっちのほうが  
昇進も早いし、給料も高いぞ？」

「それでも、馬鹿には付き合ってもらえませんね。引き抜かれたら仕  
事くらい真面目にしますけど。」

「やっぱり堅いぞ、お前。」

「思考がガツチガチの貴方に言われたくありません。馬鹿的な意味  
で。」

「くっ　　！まあいい、続きだ。」

「実際、海は馬鹿ばかりである。いや、真面目なやつがないわけ  
ではないが。」

ロストロギアを見つけては、管理しなければだの、それは危険だだの何かしらの理由を付けて強奪していく。封印するときも、失敗したり暴走したりしたら撤収して放置。落ち着いてから回収しにいこうらしい。もうどっちが悪かわからないね。

その点、陸はちょっと危険な時もあるけど、馬鹿は少ない。大きな力をもっていないからか、自分がどの程度できて、どこからが無謀になるか、自分の実力を把握し身の程わきまえている。管理局本局からはいろいろ言われてるけど、少なくとも、海の連中よりも有能だ。

「陸に行くなら、陸上警備隊に異動だと上から指示がきている」

「陸上警備隊ですか　どうせ、ミッドの端っこでしょ？」

「よく分かったな。」

「よっぽどお上は自分が嫌いみたいですな。昇進させたくないんでしょう。」

「お前、何やらかしたんだ？」

「ちょっと、管理局お気に入りのエース様を傷物にしてみましただけですよ。」

「お前ってときどき馬鹿やらかすよな。」

「貴方に言われるのは癪ですが、否定しません。」

「ぶっ」

何だそのドヤ顔は。やめろ、殴り倒したくなる。

そもそも、俺だって好きで傷物にしてしまったわけじゃねえ。そういうことになってしまったただけだ。

まあ、馬鹿やらかしたのは否定しないけど。

「それで、異動はいつすれば？」

「明日だ。」

「すみません、聞き取れなかったんですが。糞虫。」

「だから、明日だって言ってるだろ。あと、糞虫って。絶対聞こえてただろ!？」

「ああ、すみません。思っていたことがつい。わざとです。」

「誤魔化せてないからな!！」

「そう思われなくなかったら、何で今頃教えたんですか。」

「そ、それは」

異動の通達は、数週間前には来る筈である。しかも、今回はまだ海と陸のどちらかすら決めてなかったのだ。それなのに明日とかおかしすぎる。

こいつ、何か隠してる？

「からだ」

「？。聞こえませんでした。もう一度言ってください。」

「通知に涎を垂らして読めなくなっていたからだ！悪いか！」

「一度死んでこい」

「ぐぼふぁッ」

悪は滅びた。

というか、あり得ないだろ。部下の異動通知に居眠りして涎を垂らすとか。なに考えてんだ？

どうせ本来なら陸にしか異動出来なかったんだろうな。俺が海と答えたらどうするつもりだったんだ？まあ、天地がひっくり返ってもあり得ないけど。

それを言ったら、俺はそう言うと思ってたとか言って調子にのるか

ら言わない。

「それじゃあ、失礼しました。糞上司。精々頑張ってください。こっちは誰かさんのせいで準備がありますんで。」

俺は返事も聞かずに、机で悶えている変態を放置して自室へ向かう。

はあ　今夜は徹夜かなあ。あ、あとで時間とか聞いとかないと。  
またアイツに会わないといけないのか。鬱だ。

くある日のなのはさんく

「デイバインバーンバスターー！！！！」

「グワアアアアツツ!?!」

私のバインドからのデイバインバスターを受けて次元犯罪者が撃墜される。

さて、いつものことをやりますか。

「次元犯罪者さーん」

「くそっ！こんな小娘につ！ 何だよ、笑いにきたのかよ」

「ちょーっと違うね。犯罪者更生部隊のカワカミって人知ってる？」

「カワカミだあ？ ああ、だいぶ前に同じ仕事してた奴で、捕まったのにそんな奴がいたな」

よし、今回は当たりだ。たまにいるんだよね、レンヤ君のこと知っている次元犯罪者が。

「教えて。」

「はあ？てめえ何言ってるんだ？んなこと教えるわけ？？」「チャキへ？」

「その人のこと教えてくれる？」

「よし、分かった。話すから、ちょっと待つんだ。だから、その収束砲をゆっくり下ろそうか」

「デイベイーンバスターー！ー！ー！ー！」

「えー！？そこ撃つところ！？ちょ、おま、みぎやああああー！？」

「はやて、はやて」

「ん？ああ、フェイトちゃんか。どないしたんや？」

「なのはが次元犯罪者を捕まえた後、笑顔で帰ってくるんだけど。」

「」

「最近鼻歌まで歌ってて。捕まえられた犯罪者は『砲撃怖い、収束砲怖い。悪魔だ。』って繰り返し喚いているんだって。私、何かした方がいいのかな？」

「そつとしておくんや、フェイトちゃん。人にはそれぞれ性癖ってもんがあるんや。友達なら受け入れるべきや。」

「そつなの？」

「聞こえてるからね！？はやてちゃん！……！」

そんな日常。

次元犯罪者とか逮捕してみる（後書き）

またつまらぬものを書いてしまった。アーツ！

なんかゴメン。

という訳で、6話でした。

何か、この小説、思ったより凄いことになってますねW気がついたら日間9位というWW

誰だこんな小説読んでる暇人はWW嬉しいですけどWW貴方が同志かWW

というわけで、いつも通り誤字指摘お願いしますW

陸士警備隊とかしてみる(前書き)

本日分の小説投下です。

いや〜予約機能を使って投稿してみました。

何か先に仕事終わらせたみたいで、俺できる奴感に満足。

## 陸士警備隊とかしてる

陸士警備隊に異動になった俺。

上司は苦手な奴になったし、こき使われるし、ロリコン多いし。

ほんっとう、上手くやっていけるかなあ。

でも、きちんと仕事はこなして見せる。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「なのはさんが一番に決まってるんだろ!?あの幼さ残る可愛さが理解できないのか!!!」

「はっ!フェイトさんに決まってる!あの凛とした美しさが分かんねえのか!!!?」

「んだとゴラァ!!!」

「殺んのかゴラァ!!!?」

どうも、陸上警備隊に異動になったレンヤです。

最近は、なのはファンの不良グループとフェイトさんファンの不良グループの争いがよく勃発しています。いい歳になって16歳の少女で騒ぎやがって。      ロリコンか貴様ら。

陸上警備隊に来て一週間経ちますが、仕事は不良の鎮火ばかり。どうやら細菌の      ゴホン。失礼。最近の不良はハイスペックのようで、魔法を使ってくるので、魔導師があまり多くない陸では困っているとか。

だから、魔導師の      それもソコソコ実力のある俺は、戦力として重宝されています。お陰で、他の担当地区まで行ったりと、四六時中働いてばかり      残業代くらいよこせ!!

「はいはい、そこの君達。注目〜!」

「ああん?」

「何だ、この餓鬼?」

おー、怖い怖い(笑)

モヒカンいるよ、モヒカン（笑）絶滅してなかったんだ。

「陸上警備隊所属のレンヤ・カワカミ 三等陸士だ。通報を受けてやって来た。大人しくお縄につきやがれ。」

「ブワツハツハツ！！！」

「何だ？面白いことでもあったか？」

急に笑い出しやがって。まあ、大体予想はつくけど。モヒカンの癖に生意気な。

「こんな餓鬼が陸上警備隊！管理局の人材不足も深刻なんだな！」

「はいはい、ロリコン乙。いいから大人しく捕まっとけ。痛い目にあいたくなかったらな。」

「なんだと！？」

俺のやつすい挑発に怒ってそれぞれの武器を俺に向ける。何種類かの魔力光が混ざり合ったようか光が発生し、不良たちの服装が、痛々しい文字が書かれた服装に変わる。

俺様最強って（笑）サイキョー！の間違いだろ（笑）

「てめえの敗因はたった一つ。お前は俺を怒らせた。」

「うおー！兄貴カッ！いい！！」

「っ！てめえ、俺の台詞取るんじゃない！！」

不良の言葉と共に、魔力がデバイスに収束していく。ミッド式の魔法を使ってるみたいだ。

つてか収束率シヨボい（笑）これは酷い。

「カタストロフブレイカー！！」

不良のデバイスからめっちゃ細いレーザーが放たれた。

これでブレイカーとか名前負けにも程がある。名前が厨二すぎる。誰だよ、なのはのスターライトでも真似したつもりか。

「ほい」

バチッ！

「なっ！？」

取りあえず、魔力を纏った手で弾いておいた。痛くも痒くもないな。

「セットアップ」

『セットアップ』

今度は俺の服装がいつもの黒いバリアジャケットに変わる。こうしないと、デバイスの処理能力が限界まで引き出せないしね。

「杜撰だな。外側に対して気を回していないから簡単に割り込まれるんだよ」

それ、なんて禁書目録？

「んだと!?!」

「術式の構成が甘い。収束率が低い。そんな魔法に割り込んで打ち消すくらい簡単だ。」

実際、そんなに簡単なことじゃないけどね。ある程度実力があるとできないし。

「舐めやがってっ!」

「森羅万象の翁 汝の審判を仰ぐ???」

「!?!」

俺の眼前に召喚魔法の魔法陣が出現し、蒼色に光を放ち始める。

こいつは魔力は大体Cぐらいの消費だからな。A+になった今、多少の戦闘には単独で召喚できるようになった。

「現れる『ラムウ』」

『コール サモン ラムウ』

出てきたのは老人の魔導師。これでもFFの召喚獣である。杖を持ち、バチバチと電気を飛ばしている。

「  
」

ん？どうしたんだ？肩なんか震わせて？

「  
アツハハハハハッ」

ですよー。召喚したと思ったら、出てきたのお爺ちゃんですもんねー。普通そうなるわ。

「何かと思ったらジジイかよー！ プ、プハハッハ死ぬー！」

「おたちゅけは、お爺ちゃんできゅかー？」

「  
」

決めた。手加減してやろうと思ったけど、我慢の限界だわ。 非  
殺傷設定だからイイヨネ？

「おい、お前ら。」

俺の感情に呼応するかのように、ラムウは杖を持っている手を掲げた。

次の瞬間??????

ズガアアアンツツツ!!!!!!

真っ白い閃光が、視界いっぱいに広がった。

あれ？ラムウさん怒ってらっしやる？魔力が余分に持ってい  
れたけど、気のせいだよね？だよね？

落雷の着弾地点の道路は焦げて抉り取られている。よかったー結果  
張っておいて。危うく俺の力がバレるところだったぜ。

「」  
「」

あまりの光景に、空いた口が塞がらない不良達。

正気に返った不良達は一齐に口を開き始めた。

「待つてくれ、俺たちが悪かった。争いはもうしない、だからそれだけはっ！」

「管理局員 いや、兄貴！管理局は市民を守るもにだろ！？だよな！！もちろん、俺もそうだ！俺は一生兄貴に着いて行きます！！」

「俺も！」「俺もだ！！」「俺だって！」

「」「あーにーき！あーにーき！」「」

「なるほど。お前達の言いたい事はよく分かった。」

「」「じゃ、じゃあっ！！！！」「」

ふっ、希望に満ちた顔をしているな。

駄菓子菓子！！お前達不良の運命は、何をしたってすでに決まっていたのだよ！

「だが断る！」

「」「なっ！？」「」

不良達に動揺が走り、希望に満ちた顔が絶望に変わった。

ふっ、ごまあ。

「お前達は私情の為に回りの住民に迷惑をかけた！それなのに、ごめんなさいと言ったら、はいそうですか。で済むと思ってんのか！  
？ああ！？」

「「「そ、それは」「」「」

「自分の為に動いてんじゃねえぞ！！」

「「「」「」「」

「そして何より」「

「「「？？」」「」

「俺の貴重な睡眠時間を奪ってんじゃねえぞ！！」

「「「あんたもメツチャ私情で動いてるだろ！！！！！！」「」「」

んだよ。こちとら残業に続く残業で疲れてるんだよ！！寝るときぐらいそつとしてくれよ！！

やっと眠りについたら、真夜中に呼び出しだぞ！理不尽過ぎるわ！  
つっ！わけで、不良には鬱憤晴らしの的になってもらいまーす。八  
つ当たりとも言っ。

「とうわけで、的になってくれ。拒否権ないけどね。」

俺の意思を汲み取って、ラムウが魔力を溜め始める。いっちょやるか。

「蹴散らせ、『裁きの雷』」

再び、視界を白に染め上げた。

「いやー、すまないね。こんな真夜中に出勤してもらって。」

「そう思うなら残業代くらいください」

「無理な相談だね」

「ですよね〜。」

場所は変わってミッドの端にある陸上警備隊の支部。ミッドは意外と広いので、支部が街中に幾つか存在している。ここは中央からもっとも遠いところだ。

犯罪者なんてめったに出ないし、昇進は先ずないと思っただろう。

支部長は、眼鏡を掛けたイケメンフェイスの優男である。結婚しているらしい。美人な嫁さんと娘が家で待ってるらしい。モテるらしい。

イケメン爆発しろ。

「報告ですが、通報現場では魔導師の不良同士で言い争って、今にも戦闘が始まりそうでした。」

「むふむふ、それで？」

「接触したら魔法を使ってきたので、反撃し捕縛。近くにいた警備隊に引き渡してこちらにきました」

「そうかい　ご苦労様。お茶でも飲むかい？」

「いえ、結構です。男と飲む趣味はありません。何より寝たいです。誰かさんのせいで、ろくに寝てませんからね！」

「やれやれ　。随分と嫌われてしまったものだ。　ところで、誰と寝るんだい？」

「嫌味か！？嫌味だな！！嫌味ですね！！イケメン爆発しろ！！」

「ふっ」

「うわーんっ！！！！覚えてろよー！！！！」

そう言って俺は、部屋から走り去った。

けして逃げたんじゃない。絶対に。違っつたら、違っ。戦略的撤退なんだ。

言っつて悲しくなってきた。

「またある日のなのはさん」

「なあ、はやて。なのはの奴、何であんなに機嫌がいいんだ？」

「あ、ヴィータ。何や、居たんや？」

「主、私も居ます。」

「シグナムも！気付かんかったわ」

「そんなこといいから、なのはの奴何であんなに機嫌がいいんだ？」

「ヴィータ、この世には、知らんぼうがええことも沢山あるんや。気にしちやあかんで」

「はやてが言うんなら知らない方がいいんだな！」

「おう、そうや」

「 実のところどうなんですか？主。」

「あんな、実はなのはちゃんに隠された性へk「聞こえてるよ!？」はやてちゃん!」「げ!？」

もう、はやてちゃんはちよつと目を話した際にコレ何だから。一度キチンとお話したほうがいいのかな？

そりゃー確かに、犯人が吹き飛ぶのは爽快だけど それとこれは違うからね!？」

「流石の私も、それ以上は怒っちゃうよ!」

「まあまあ、なのはちゃん。冗談やないか。友達ならそれくらい寛容にならへんと、モテへんで?」

「また、そうやって誤魔化して!はやてちゃんがそうするなら、コッチにだって考えがあるから!」

「何や?言うてみいや」

「自分だけファンクラブがなかったのを気にしていたことを言いふらしてやるー!」

「ちょ、なのはちゃん!？」

そう言ったら後、私は走り去った。後ろから、

「主　いいことがありますよ」

「はやて　意外と気にしてたんだな。」

「ちょ、誤解や二人とも！！そんなこと思ってたんから、その生暖かい視線をやめい！！」

「主　」「はやて　」

「う、うわーんっ！！！！！！」

とか聞こえてきたけど、関係ないっしたら関係ないっ！

そんな日常（笑）

陸士警備隊とかしてみる（後書き）

どうでしたか？主人公はシリアスなときはシリアスに頑張りますけど、それ以外では普通にはっちゃけてます（笑）

はやてファンクラブ 勿論、ありますよ？ただ彼女が気づいていないだけです。

さて、いつも通り誤字の指摘などお願いします。修正入るのは遅れそうですけどね。

少女視点、不良とか撃退してみる（前書き）

ふっ、なのは視点と思うか。

駄菓子菓子！今回は違う！俺って何がしたかったのか分からない。  
そんなお話。

キャラ崩壊とかあるから駄目な人は見ないほうがいいのかも。

それではどうぞw

## 少女視点、不良とか撃退してみる

空港での火災があつて、私なのはさんに救出されてから約1年の月日がたった。

このままじゃ駄目だつて思って、カッコいいなのはさんに憧れて、私は陸士訓練校に入学した。

私の戦い方は特殊だから、自分でデバイスを組んで、それで出会った新たな友達。

これから頑張つていこうと思います。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

「ねえ、ティア。ティア！」

「何よ、五月蠅いわねえ。もう少し大人しくできないわけ？ あ  
と、ティアって何よ？」

「えへへ、あだ名！ティアナだからティア！」

「あだ名って 略す程長い名前じゃないでしょ？あたしの名前は」

「駄目 かな？」

「 分かった、分かったわ好きにしてください。だからそんな顔しないの。」

「 えへへ、ありがとう！タイヤ！」

「まったく 調子狂うわねえ」

私と陸士訓練校で知り合った、タイヤは休みの日である今日を利用して、ミッドチルダ中央に来ています。

何でかって言うと、え〜と確かデバイスの銃に使うパーツを取り替えたいんだって。私には、そういう小難しいことはよく分からないんだけど、撃ち手の人によって癖とかがあるから、それに合わせてパーツを調整するって言ってた。

私は、お姉ちゃんに教わりながらやったから、軽いメンテナンス程度しか分からないんだけどね〜。

「ちょっと、スバル！？どっちに行ってるの！デバイスのパーツを売ってるのはそっちじゃなくて、こっちよ！」

「ゴメン、ゴメン。道忘れちゃった！」

「まったく、何やってんのよ。そのデバイス、どうやって組み立てたわけ？パーツくらい買いに行っただでしょうに」

「私の使っているデバイスのパーツは、全部家にあつたの使つてたから。足りないものは、お父さんが買って来てくれたし！」

「あんたの親って、意外に過保護よね。厳しそうな顔に似合わない。」

確かに、私のお父さんはちょっと　いや、かなり過保護かもだけど。でもでも、いい人何だよ！

ティアナの言う通り、ちょっと厳しいけどね。

「で、デバイスのパーツ売っている店って、どっちだっけ？」

「次の角を左よ。そのまま真っ直ぐに進んだら、看板が見えてくるわ。」

「よし、じゃあ急いで行こう！」

「ちよ、待なさいよ！そんなに走らなくてもお店は逃げないわよ！」

ティアアが後ろで叫んでいた気がするけど、大丈夫でしょ！一々嫌がる素振りとか、文句とか言ってくるけど、ちゃんと付き合ってくれるもん！

そう言うのが、ティアの良いところなんだと思う。えっと確かそう言うのを　　つんでれっていうんだっけ？

「到着ー！」

多分、ここで良いんだと思う。外に、デバイスを組む時に見たことあるパーツがあったから。

「ちょっと　　す、スバル。　　あんた走るの　　は、速すぎよ。」

ちょっとしたら、ティアもこのお店にやって来た。やっぱりここで合っていたみたいだ。

ティアは凄いゼエゼエって息切れしてるけど、大丈夫かな？

「ティア、大丈夫？」

「だ、誰のせいよ　　誰の。」

「う、ゴメン。」

「べ、別にいいわよ。それにあんた　　謝ってばかりね。」

うう　　仕方ないじゃない。1年くらい前まで、人見知りする性格だったんだし。その時の癖っていうか、名残りっていうか　　反射的に謝っちゃうんだもん。

「それよりティア、見て回らないの？」

「ちょっと休憩よ。休憩。あんたは見て回ってれば？」

「うん、ゴメンね、ティア。」

「また謝ってる。」

「あう」

私はその場に居るのが恥ずかしくなって、早足で立ち去った。

私は特に何か欲しいデバイスのパーツがあるわけじゃないけど、見て回ることにした。

えっと、ローラー、ローラー　それくらいしか分からないんだけどねっ

「うわあ〜」

ローラー売り場を見つけると、そこには思っていた以上にローラーの数があつた。

あ、ローラーって言っても、色々種類があるんだ　確かに、よく考えればそうだよな。何もローラーの使用用途はローラーシューズだけじゃないもんね。

えっと　どれがいいのかな？

「あ」

そんな私の目に止まったのが一つのローラーだった。

「摩擦軽減、高魔力伝導率、ブレーキのし易さ　これいいかも。  
えつと値段はつと　げ」

た、高い　学生にこの値段は高すぎるよう。なんでこんなにデバ  
イスのパーツの値段は高いんだろう？

これだけあれば、アイスが幾つ買えることやら　とほほ。

「スバルー？あたしの買い物は終わったけど、何かいいものでも  
どうしたの？」

私が絶望に打ちひしがれていると、ティアナがやって来て、私に声  
をかけて来た。うう、これには訳があるんだよう。

取り合えず意思表示をする為に、無言でさっきのローラーを指差す。

「何々　うっわ高いわねえ　流石使用率の低いローラー。」

「大人の社会って厳しいんだね　」

「ま、買えないものはしょうがないわ。ほらスバル、さつさと帰ん  
ないと、日が暮れるわよ？」

「あーうー　。あたしのローラー　」

「はいはい、お店の邪魔しないの。」

そう言われて、私はティアに引つ張られて出て行くのでした。欲しかったなあっ

「ねえ、ティア。」

「何よ？馬鹿スバル。」

私は帰り道を通りながら、隣にいるティアに話しかけた。

「ティアはさ 将来成りたいものとかってある？」

「どうしたの？急にそんなこと言いだして。」

「聞いてみたかっただけっ」

「あっそう。」

ティアはそう言って一旦立ち止まっていた足を動かして歩き始めた。

私も置いていかれないように着いて行く。

「私は　そうねえ。執務官に成りたいわね。」

「うわっ！あの勉強ばっかりの、頭いいやつ!?!」

「何よ？何か文句でもあるの?」

「ううん。ティアらしいなあって。」

ティアは何か頭をよく使う仕事につきそうだしねっ！　私には、  
到底無理な職業だけど。

性格的に合わないというか　頭より体というか　考えるより先  
に手が出ちゃう！みたいなの？

執務官かあ　ティアらしいなあ。

「そーゆーあなたはどつなのよ。」

「へ？私!?!」

「そう。」

「私は　やっぱり、なのはさんみたいなカッコいい魔導師になり  
たい！その後は　よくわかんないや」

なのはさんみたいな魔導師になって、その後私はどうするんだろう  
なあ。陸士隊かもしれないし、教導隊に入ってみるのもいいかもし  
れかい。何だったら?????

「ちょっとスバル！前！前！」

「え？」

どんっ、と何かにぶつかるとような感触がして、目の前を見ると、いかにも不良って感じの男の人達がいた。

「痛ってえなあ、おい。何してくれちゃってんの？」

「ご、ゴメンなさいっ！！前見てなくて、すみません！」

「ああ？ゴメンですんだら警備隊いらないの。分かる？」

「すみませんっ！」

あう、だったらどうしたらいいの！？

「おい、よく見るよ。コイツ、小っちゃいが、よく見たらソコソコ可愛くねえか？」

「確かに　おい、嬢ちゃん。ちょっと付き合えよ」

「え？」

「いいから早くっっっっっ！」

「きゃあっ!!」

男の人に乱暴に腕を引っ張られる。でも、着いて行くと何されるか分からないから私は抵抗した。

そうしてると、横からティアが割り込んで来た。

「ちょっと、よしなさいよ。嫌がってるでしょ!」

「ああん?んだオメエ?コイツの連れか?」

「そうよ、嫌だって言うてんだから、さっさとどっかに行きなさいっ!」

「てめっ、調子にのりやがって!丁度いい、人数合わせだ。お前もこいつ」

そう言つて、不良がティアに手を伸ばし、掴もつとしたその時???

「エクスカッリバー エクスカッリバー」

「」  
「」

何か2人の間を変なナマモノが通り過ぎて行った。気まずい沈黙が

流れる。

白く長い顔をしていて、死んだ魚のような目をしている。シルクハットをかぶっていて、手に持つステッキを不良に向けてこう言った。

「私に接近を許すとは　　ヴァカめ!!!」

「「「（う、ウゼエ　　!!!）「「「」

多分、ここにいる全員が同じことを思ったと思う。

「おい何だよて??」私の伝説は十二世紀から始まった。「は?」

「聞きたいかね?私の伝説を。」

「んなモンし?」ヴァカめ!!!君に選択する権利はない!私の伝説は十二世紀から始まったのだ!!!」　　ウゼエ。」

謎のイラつく生物は不良の目の前までくると、持っているステッキを目の前に押しつけ、ふりふり左右に振り始めた。

「だあっ!!!邪魔だ!目の前でんなもん振り回すな!!!ちよ、何で激しく振りやがる!!!やめ「ヴァカめ!!!」ウゼエエエっ!!!?」

ちよっと不良に同情するかも。助けないけど。

あまりのウザさに殴りかかった不良だが、ナマモノに避けられてしまった。避けたナマモノは、今度は何やら紙を突き出して来た。何なのかな？

「私の職人になるにあたって、守ってもらいたいことが1000項目ある！！そのレポートに纏めておいた。よく目を通しておくように。」

「は？」

うわぁ本当だ。裏までビッシリ書いてある

「452時間目の私の5時間に及ぶ『朗読会』には是非とも参加願いたい。」

「誰がするか！！あっコラ待て！！ってへブ！？」

ナマモノは去り際に不良の頭に紙を押しつけ、唐突にその場から消えた。

頭から紙をとったを読んでプルプルと肩を震わせた不良は、「あの野郎殺す！！！」とって仲間と共にどっかに行った。

「助かったの？」

「ええ、そう見たいね 癩だけど。ってうわぁ！？」

さて、帰ろうか、という時に、再び唐突にあのナマモノが現れた。

「む、ムカつくナマモノ!!」

「ムカつくナマモノとは酷いな。助けてやったのに。まあ意図してやったけど。」

「へ?」

次の瞬間、ナマモノは消えて、代わりに男の人が現れた。

「陸士警備隊のレンヤ・カワカミだ。大丈夫だったか?」

「えっと、さっきのは?」

「ん?幻術に決まってるだろ?」

「「えええええ!?!」」

私達の声は、ミッドの空によく響いていた。

まさか人だったなんて

「す、すみません!わざわざ助けていただいたのに失礼なこと言うて!!--」

「いや、別にいいけどな。俺が好きでやったことだし。何より

そう見えるようにやってたし。」

「け、けどっ」

「はい、この話は終了ー！んで、お前さん達名前は？」

「あ、はい。スバル・ナカジマです！陸士訓練校に在学中です！」

「ティアナ・ランスターです。同じく陸士訓練校に在学中です。助けていただきありがとうございます。」

ちよー！？ティア何か棘のある言い方だなあ。せつかく助けてもらったのに。まあ、あれはムカついたかもだけど。

「ランスターにナカジマだな　そっか、君達が　ん？」

カワカミさんは何か私達に関することを言いかけて、急に黙って空を見だした。

「　了解しました。つと、すまねえな。仕事が入った。さっきの奴らが暴れてるみたいだわ。半分俺のせいだし、行ってくるわ。」  
半分っていうか、全部だと思っけど。私達助けるためにやってくれたことだし、とやかく言えないんだけどね。

「じゃあーなー！ー！」

そういい残して、不良が追っかけていった方に、カワカミさんは走っていた。

「　なんか、嵐みたいな人だったね。ティア。」

「　そうね。」

あれ？ティアはなんだかご機嫌斜め？

今度会ったら、カワカミさんにはきちんとお礼をしないとね！

くオマケく

「　ねえ、ティア」

「　何よ、急に。」

「　不良に押し付けてた紙って、何て書いてあったのかな？」

「　はい、これ。」

「　え！？持ってきてたの！？」

「まあね、気になるじゃない。」

「それもそうだね　えっと　」

『ヴァカめ！…このロリコンどもがッ！…！』

## 少女視点、不良とか撃退してみる（後書き）

8話終了です。

まさかのスバルとティアナのファーストコンタクト。ナマモノもといエクスカリバーにより印象付けることに成功。フラグは立てるか分からん。

ティアナさんが最後に不機嫌だったのは、いつもの持病（私って才能ない凡人病）が発症したからです。今回は幻術ですね。

そもそも、幻術で完全に姿を変えるのは高等技術って設定です。厩気楼的なシルエットならまだしも、完全に姿を変えるには恐ろしいほどの魔力コントロールが必要なんです。変身魔法ならまだしも。

あ、因みに主人公は、魔力吸収のお陰で魔力コントロールめっちゃ上手いです。

なんかこの小説、総合評価が凄いことになってますね？学校から帰ってきて画面を見ると1位の文字。見間違えかと思いましたが嬉しかったですけど。

まあ、テンションがゲージ振り切ったんで、打ち止めだったはずがもう一話書いてしまった。その結果がこれである。

誤字指摘等お願いします。

## 番外 過去話とかしてみる（前書き）

どうも、更新遅れました。すいません。

さて、今回は番外編というか、過去の話ですね。大して意味はありません。

本編の原作はで辿り着くのは少し時間がかかりそう。でも大丈夫、万が一はキンクリするから（オイ

## 番外 過去話とかしてみる

病院から退院してから1年が経った。

慣れない仕事にようやく慣れてきて、魔力も上がりA-にまでなった。

それでも受ける任務はAAだから全然足りないけどね。

死なないように頑張ろうと思います。

魔法少女リリカルなのはStrikerS始まります。

バンツバンツ!!

銃声が鳴り響き、高速で銃弾が飛んでくる。受けるわけにもいかないので、慌ててバリアを展開し弾き飛ばす。逸らされた銃弾は狭い通路の壁にあたって、壁を削り取る。

「ふ、ふはははははつ。愉快、愉快!!ほらほら、次行くぞ!!!」

ピンツと何かを抜く音がして、次元犯罪者がおもいつきり振りかぶ

る。

その動作を見た俺は次に来るであろう攻撃を、経験と知識で割り出し、迎撃するためにデバイスに指示を出す。

「モード チェンジ ガンモード!!」

『ガンモード』

無機質な機械音声とともに、先ほどまで手に持っていた剣が異空間に収納され、今度は二丁拳銃が現れる。全てに標準をあわせる時間はない! だったら、魔力弾は一個だけ高速製作して、一番手前を爆破し他を誘爆させるまでだ!

何度か手榴弾と思わしき武器を投げつけて来たのをしっかりと目で捉え、手榴弾に手動で標準をあわせる。こうした方が、誘導性がない分魔力弾製作速度が早くなるしな。

「バレット シュートツ!!」

放たれた魔力弾は一直線に先頭の手榴弾に命中し、次々と爆発を起す。

ドガンツドガドガドガンツツ!!!

狭い通路で爆破したので、くるであろう爆発の衝撃に備えて、バリアを全力で展開する。

全身を衝撃が襲い、激痛が走るが気にしている暇はない。そのくらいで敵が倒れてくれたらそもそも敵はそんな攻撃をしてこない。

衝撃に身を任せ、逆らわずに飛ばされると、もちろん廊下の距離には限界があるわけで、背中から壁に叩きつけられた。

「かはっ  
」

肺から空気が押し出され、体が一瞬硬直する。

すぐに体勢を立て直して、辺りに目を配り、次元犯罪者の姿を探す。この戦場で敵から目を離すのは愚の骨頂。一流三流以前の問題だ。

ゾクリ

「  
ッ!」

戦場での勘を頼りにその場に伏せる。次の瞬間、先ほどまで俺の胴体があつた位置に砲撃が通過した。

背後の壁が粉碎され、人が余裕で通れるほどのでかい穴が作られた。

「ッ! モード チェンジ! ブースト!」

『ブーストモード』

俺のデバイスは変わっている。ストレージであり、アームドであり、ブーストであり、インテリジェントでもある。それらを足して、割ってしまえば、丁度俺のデバイスのような状態になる。

近接に対応し、遠距離を制し、補助にすら特化できる。聞こえはいかかも知れないが、使い勝手は悪い。インテリジェントといってもそれほどAIは強くないので演算補助はそれほど高くないし、補助の強化もそれほど高くない。何より、声に出して一々変更しないといけないので、連撃喰らえば終わりだ。

だが、一人で任務やっている俺には丁度いいし、なにより俺と相性が良かった。名前ないけどな。

良く言えば万能。悪く言えば所詮器用貧乏。それが俺のデバイスだ。急速に接近する気配を感じ取って、バリアを全力で補助掛けて張ろうかと思っただが、間に合わなかった。

「遅せえよッ！」

「グハッ!？」

腹を思いっきり殴り飛ばされ、背後に空いていた穴に押し出された。

「そらっ!もういつちよ!?!」

「　　ッ！！？」

空中に浮いている、まだ地面につかない状態で腹をもう一度殴られて、下に叩き落とされる。何やら広めの空間のようで、滞空時間が長かったのでクッションの魔法を使うことができた。

こいつ、いったいどれだけ魔力があるんだ？確かに俺は魔力はA-だが、奴はAAの筈だ。こっちは節約していて、向こうはバンバン使っているのに、一向に魔力が尽きる予兆をみせない。

こっちの魔力は切れかけだったのによ。

「　　不思議そうだな？何で俺の魔力が尽きないか気になるか？」

「！！」

「くっくっく、そうだろうな。お前は魔力を節約しているみたいだったから、魔力切れを狙ってたんだろうよ。お前、すげえよ。A程度の魔力を俺と戦闘して20分ももっているんだ。だが、俺相手にそれは失策だったな。他の奴なら勝てただろうに。」

「　　どういうことだ。」

「俺が戦力増幅にあたって集めていたロストロギア『トレック』。こいつは超々高密度圧縮魔力結晶なんだ。俺はそれにちよいと細工して魔力を供給している。残念だったな。」

奴が持っていたのは赤い水晶のような結晶だった。なるほど、原作のジュエルシードに似たやつか。

「だが、コレの運用方法はそれだけじゃあない。そっちの装置を見な。」

奴に言われて隣を見ると、そこには奴が持っているのよりも一回りほど大きな結晶が機械の中央に存在していた。      なんの装置だ？

「制御装置だよ。コイツのなあ!!」

ギヤオオオオオオ!!!!

ドガンッ!!

咆哮と共に、奥の壁を粉碎して現れたのは、どこまでも真っ黒な、竜だった。見た目は西洋竜だ。

グルルルルと唸りながらこちらを見つめてくるその眼は、どこことなく苦しそうで、こちらに助けを求めているように見えた。

「くっくっく!!リンカーコアを持つ魔法生物は、その竜と同じような連動する首輪を掛けて、膨大な魔力を叩きつけてやれば、類義的に召喚魔法と同じようなことができるんだぜ?知ってたか?」

「」

「召喚魔法をちよいと応用してやれば最強の龍種ですらこのザマだ  
！！これで忌々しい腐った管理局に一泡吹かせてやれるぜ！！」

「 言いたいことはそれだけか。」

「 ああん？」

「 言いたいことはそれだけかつつてんだよ！！！！！！」

「 は？」

生物を召喚することとは、その生物に協力を仰ぐことである。

意思を捻じ曲げず、相手を尊重し、協力してもらう。何しろ見知らぬ土地にいきなり召喚し、戦わせるのだ。場合によっては死ぬこともあるし、短い一生の時間を使ってももらうこともあるし、子供を一人置いてこさせるかもしれない。

召喚獣の意思を捻じ曲げてまで、使役することは、召喚師のもっともやってはいけないことのひとつだ。

俺も、この世界にやってきて、実際に召喚をして、生き物と触れ合っ  
つてそう思った。だからこそ、召喚獣たちは力を貸してくれるし、  
戦ってくれる。

俺は目の前の光景を許すことなどできなかつた。

魔力を叩きつけ、無理やり使役することは、やっているだけでリン  
カーコアを刺激し、寿命を削る。魔法を使うとさらに命を削り、激

痛どころではないのだ。

幸い、この場にカードは揃っている。自分にも負担は掛かるが、背に腹は変えられない。そのままでも死ぬしな。

「く、クハハツハツハッハッ！何を言い出すかと思っただら、お前に何が出来る！！魔法も満足に使えないお前に！！！！殺せ！！！」

奴の命令で溜めの動作に入った龍種。俺はその場から離れるついでに、水晶に近づいた。すぐ背後で爆風が発生し、吹き飛ばされるが、水晶には辿り着き、ソレを掴みながら立ち上がる。

「あ？んなもん掴んでどうすんだ？言っとくが、破壊しようなんて思っても無駄だからな。そいつは対策ずみだ。」

「はっ！ちげえよ。こうするんだよ！魔力吸収発動！」

俺の水晶を掴んでいる右手から、魔力の渦が発生する。右手を介して膨大な魔力が流れ込んできて、容量オーバーになった分の魔力は体内に留められる。

全部吸収したかったが、コレで充分だし、これ以上は俺の体がもたない。

「何かと思っただら俺の真似事か？だが残念、そのロストロギアの蓄積魔力はオーバーSSS。封印しても危ない代物だぜ？」

「誰が全部吸い出すと言った。」

「ああん？」

「見せてやるよ、紛い物の召喚魔法と本物の召喚魔法の力の差って奴を！！」  
オーバーリミット『限界突破』！！」

オーバーリミット  
限界突破。

それが俺の魔力限界値を上げるスキルだ。魔力最大値になっても余分に魔力を吸い続け、体内にとどめ、それらを一気にリンカーンコアに変換することで、一時的に魔力値を格段に引き上げるドーピングだ。カートリッジを自分にした感じ。もちろん負担は比べ物にならないがな。

引き上げられた俺の魔力値は大体オーバーSはあるだろう。優秀な魔導師になら負けてしまうかもしれないが、戦うのは俺ではない。通常、自分以上の能力値を持つ個体に協力を仰ぎ、助けてもらう。それが召喚師の戦い方だ。

「夜闇の翼の竜よ 怒れしば我と共に 胸中に眠る星の火を！」

俺の詠唱と、魔力の流れを危惧したのか、慌てて止めに入ろうとするが、もう既に眼前には魔法陣が形成されている。手遅れだ。

「頼むぞ、出て来い！『バハムート』！！！！」

『コール サモン バハムート』

Sランク級の魔力を丸々使って顕現したソレは、大きく翼を広げ、現れた。黒に近い銀というべきか、灰色というべきか、神々しいまでの光りと魔力を纏ってその場に佇む。

フラリと立ちくらみがしたが、今ここで倒れてしまいうわけにはいかない。

「手伝ってくれるか？」

『主がソレを望むのなら、我はそれに答えるまでよ。そのために我はここに来た。それに、世界は違えど、同属をあのままにしておくのは気が引ける。』

「そっか。ありがとう。」

『気にするな。主は我の召喚師。胸を張って、命令していればよい。それに、最低限の召喚獣に対する礼儀をしているようだ。現代には珍しい。』

「やるぞ。」

俺は、あまりの光景にか、バハムートが直接頭に語りかけてきたことに、なんの疑問も思わなかった。むしろ、あれくらい神聖に見えると、それが当然だと思ったのかもしれない。魔力もあるし、念話ができるもおかしくないか。

「は、は、ははは。なんだよソレ。冗談だろ？」

「これが紛い物と本物の違いだ。理解できたらとっととその竜解放しろ。」

「んでだよ。」

「ああん？」

「何だよ！何でそんなに力があるのに管理局を潰そうと思わねえんだよ！！あそこが、どんなところか分かってんのか！？あそこは知ってるよ。」

「え？」

「そんなこと、とっくの昔に知っている。」

「だったら」でも！」「ッ！」

「そんなやつらばかりじゃない。無茶してまで、自分を傷つけてまで、皆を救おうとしているやつらもいる。少なくとも、俺はそんな奴を知っている。」

「」

ッ！やつべえ、そろそろ限界が近いか。早く決めないと。

「一辺やり直してきな。バハムート、やれ。『メガフレア』」

ゴオオオツオオオツッ！！

バハムートの体内からアホみたいな量の魔力が練りだされ、口に収束されていく。空気が振るえ、大地が揺れ、魔素は根こそぎ収束される。

世界は一瞬にして、白い光りと破壊の嵐に巻き込まれた。

報告書。

04分隊隊員 レンヤ・カワカミが入院したので、代わりに書類で報告する。

先日、魔導師ランクAA相当の次元犯罪者レイル・クロークを捕縛に成功。相当な魔力ダメージを負っているようで、記憶に一部欠陥が見られる。

彼の研究所は、彼がロストロギア『トレック』を使用して使役していた竜の暴走により破壊、後自爆システムが起動したようで、大した証拠も取れずに崩壊。大量の魔力放出が観測されたが、竜の暴走とロストロギアによる可能性が高いと専門家が進言。

『トレック』は嚴重封印後、さらに封印が施された施設に収納。現場にて魔素が根こそぎなくなっていたが、竜の収束砲プレスとレイルによる偽装工作と思われる。

その線で、引き続き調査する予定だ。

「  
」

報告書を読み終えた、犯罪者更生部隊の部隊長をアルフレッド・カーティスは眉を中央に寄せて顔を顰めた。

おかしいのである。

そもそも、A＋ごときが龍種から逃げ切れるはずないし、レイルとかいう犯罪者も魔力ダメージをそんなに負わないはずだ。

違和感を感じる。これを書いた奴はなににも思わなかったのか？

「  
まあ、考えても仕方がないか。」

そもそも、彼は問題部隊の部隊長。仕事は山ほど残っているし、こんなことに時間は割けないのだ。

それに、部下が無事なのはいいことだし、任務が消化されるなら、こちらとしてもありがたい。必要以上に事情に踏み込まない。それがこの部隊を運営していくのに必要なやり方だ。

## 番外 過去話とかしてみる（後書き）

さて終了です。相変わらず、ランキング上位なのが不思議でしかたがない。

投稿しだして4日目だぞこの小説。

主人公は魔力ドーピングを覚えていた（笑）因みに反動で吐血とかします。多様は出来ません。でも軽い強化程度なら大丈夫。主人公はコレ使って今まで生き残ってきました。

誤字指摘などあれば、どうぞやっちゃってください。

次はアンケートです。

アンケートとかしてみる(前書き)

第一回チキチキ大アンケート!!!

嘘です(笑)

## アンケートとかしてみる

アンケートをとります。

先ずその？。ヒロインをどうするかについて。

色々フラグ立てるつもりですが、ヒロインの人数をどうするか。あとキャラとかヴィヴィオとかどうするか。幼女ですよ、幼女。あと、作者的にはギンガを猛プッシュ。

？もう、フラグ乱立してしまえ。超ハーレムルート。

？もう一回アンケートをとって、上位何人かにフラグ投下。ハーレムルート。5枠くらいを目安に。

？人数三人ぐらいのハーレムルート。あ、因みになのはとフェイトは作者の鼻屑により確定しております。コレが権力の力か！！アンケで1位と2位ぐらいの人物にフラグ投下ですね。最大3枠。

次。

？キャラとヴィヴィオも守備範囲。今日からあなたもペドだルート。

？幼女は愛であるものであって、手をだすなんてあってはいけない！  
！我は女神の聖騎士ロリコン也ルート。

コレで？が多かったら、彼女達はヒロイン候補にすらなりません。だが愛でる。

あと、もう一つアンケートです。召喚獣の姿について。

この召喚獣は、このシリーズがいい！！というのがありましたら、言ってください。検討していきます。

そして本命の質問。バハムートの姿について。

番外編モドキでは黒光りするなにか 違った。黒っぽい色とか  
適当に描写していますが、何か希望ありませんか？修正します。あ  
と、今後出す時もそちらを採用で。

アンケートの期限は、ある程度票が溜まったら、こちらで締め切り  
を知らせますので、どんどん送ってください。

やってみたかったんですよ、アンケート（笑）

アンケートとかしてみる(後書き)

じゃんじゃん、票を送ってください。

期待してるお。

一日出向とかしてみる(前書き)

どうも、おひさしぶりですw w

聞いてくださいよ、皆さん。

テストが終わった！

うっひょーw俺のテンション限界突破w w

そのまま勢いで一話投稿。誤字が多いかもw

今回はついにあの方がっ

## 一日出向とかしてみる

ある日の休日、偶然見かけた原作キャラを不良から救ってしまった。

別に大丈夫だったんだろうが 見てられなかった。

いつからこんなにお人よしになったんだか。

今日は朝から上司に呼び出しだし、本当大丈夫か？

まあ、できるだけのことはやってみよう。

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 始まります。

「君には今日、陸上警備隊第108部隊に出向してもらおう。と言っても、今日だけだけだね。」

「えと、意味分らないんですけど。」

「だから、君には今日、陸上警備隊第108」いや、それは分かり

ましたから。」なんだい？何か質問かい？」

「いきなり意味分かりませんって。」

「だから、陸上警備隊第「ダアーツ」！違うわドアホ！何で俺が陸士108部隊に行かなきゃいけないのか聞いてるんです！！！」  
「何だ、そんな事かい。早く言ってくれば教えられたのに。」

こ、殺したい 絶対ワザとやってるだろ。口元ニヤけてるし。

はっ！すまない、レンヤ・カワカミ三等陸士だ。

朝っぱらから上司い呼び出され、着いた途端の第一声だ。まったく意味分からん。ここにきてそんなに月日は経ってない現状で、俺が何かやらかした訳でもない。

他に心当たりがあるとすれば、スバルだが、あいにく彼女は俺の部隊名すら聞いていない有様で、その線はないだろう。

「いや、なに、ちょこまかと動き回る犯人が現れたそうさ。探知能力が優秀らしくてね。500m程度の距離では気づかれて逃げられるらしいのだよ。」

「それで、それがどうしたんですか？」

「犯人から隠れる程の能力を持った局員がないんだ。」

「長距離射撃をすればいいのでは？」

「500m以上の距離を誘導性持たせられる人は陸にはそういないよ。」

あ、そうか。俺って当たり前のように誘導性なしで超々長距離射撃をやっていたから、普通の人は誘導弾を使うの忘れてた。

誘導弾って、魔力をそれなりに使うからな。デバイスの処理能力が低い俺のデバイスでやると、アホみたいに魔力が減っていくしなあ。

「はあ、それで、何で俺何ですか？」

「聞いたところによると、君の幻術魔法は相当優秀だそうじゃないか。」

「まあ、人並み以上には得意ですね。」

「要請内容は、空戦適性があり幻術魔法の使える奴。だそうだ。」

「はあ、分かりました。行ってくればいいんでしょう？行ってくれば！」

ちっ！こんな事になるなら、お菓子誰かに取られないように幻術使うとか、背後に幻術で接近して驚かすとかしなければ良かったぜ。

え？子供っぽいことすんな？精神は大人だろうが？いやいや、体はまだ子供だからいいんだよ。

因みに、少し前に陸には魔導師が少ないと言ったが、厳密には違う。

空戦適性のある魔導師が少ないのだ。皆海に引き抜かれていくし。

「それでは、レンヤ・カワカミ三等陸士。これより、陸上警備隊第108部隊に行つてまいります！」

「はいはい、いつてらっしゃい。地図はデバイスにデータ送つておくから。行つておいで。」

「了解しました。」

「頑張つてねえー」

何か納得いかなえ。仕事はやるけどさあ。

陸上警備隊第108部隊か。あんまり原作に関わりたくないんだけどねえ。まあそうも言つてられないか。

陸上警備隊第108部隊。

ミッドの西部を拠点に活動している部隊で、原作にも出てきた部隊の一つである。ナカジマさん一家のいるところ。

送られてきたデータにある地図を頼りに、バスを乗り換えひたすら西へ。因みに俺の居る部隊があるのは南の隅っこである。担当範囲は小さい。陸上警備隊の縄張り意識は強いのだが、空戦のできる魔導師は少ないのでそうは言つてられないようで、俺は普通に担当範

圏外にも引つ張り出される。

そんなんだから、原作ではやてに「ミッド地上の管理局は対応が遅い」とか言われるんだ。まあ、本局の海の連中が引っこ抜いていくのがいけないんだけど。

俺のいたのは南の地区なので、北よりの西に位置している陸士108部隊隊舎は遠いだろうとさっさと早めに出てきたお陰か、昼前には余裕でつきそうだ。時間を考えると、帰るのは夜になるだろうなあ。

だんだん緑が増えてきて、山も近くなってきたところで、目的地となる隊舎が見えてきた。

「　　ここか。」

ようやく着いた隊舎の前。ここの隊舎はそこそこ大きいようで、原作の六課ほど異常な新築ではないが、結構綺麗なところだ。

急なことだったので、あまり詳しい時間指定などはなかったが、俺が出向しに来たことは連絡がいつているだろう。

「　　すみません、待ちましたか？」

ポーンと隊舎の入り口でつつ立っていると、突然後ろから声を掛けられた。おそらく迎えなのだろう。

「いえ、まだ来たばかりですので。」

「そうですか　それは良かったです。」

声を掛けられた方を向くと、声で予想がついていたが、女性が立っていた。青くて長い髪に、リボンを着けており、まだ幼さ残る顔立ちの、将来確実に美人になるであろう少女がいた。

あれ？どこかで見たことあるような？

「本日限りの出向に来ました、レンヤ・カワカミ<sub>3</sub>等陸士です。本日はよろしくお願いします。」

「あ、こちらギンガ・ナカジマです。こちらこそ、よろしくお願いします。　　つて<sub>3</sub>等陸士ですか!？」

「ええ、そうですけど？」

ああ、どこかで見たことあるかと思ったら、スバルに顔立ちが似てるからか。

この人がギンガさんか。顔覚えておこう。

「　　何か不思議でしたか？」

「あ、いえ、別にそういう訳では　　」

「遠慮なく言ってください」

「えっと、空戦ができる人と聞いていたので、もっと上の階級に人が来るかと」

まあ、分からんでもない。

管理局においては、魔導師というだけで出世が早くなる。空戦適正ありだとなおさらだ。しかし、俺の階級は3等陸士。まさか自分より階級が下の人物だとは思わなかったのだろう。

実際、敬語でばかり話している。

「まあ、階級なんて所詮飾りですからね。特に魔導師の場合は。自分の方が階級も低いみたいですし、敬語はいりませんよ?」

「い、いえ、年上を呼び捨て何て　そんな???」

「いいですって言ってますよね?」

「」

「」

「　　はあ、分かったわ。その代わりに、私のことはギンガって呼んでよね。私だけ敬語をやめるのは不公平よ?」

「え?いや、あなたは上官でして、その?????」

「上官の言つことが聞けないの？命令です。」

「」

「」

「随分と強引だな。そんなに慕われたくないのか？」

「それは貴方も同じでしょ？」

「どっちも似たもの同士って訳だ。俺のことはレンヤでいい。」

「ええ、そうみたいね。年上だし、呼び捨てしづらいからレンヤさ  
んでいいかしら？」

「好きにしろ。」

敬語をやめさせようとしたら、俺も敬語をやめることになってしま  
った。別にいいんだが、敗北した感が嫌になる。

まあ、お互い似たもの同士な感じがするので、向こうも場所を考え  
て敬語をやめるだろうから、大丈夫だろう。

その後入り口前で二・三言会話し、俺達は隊舎の中に入って行った。

目的地は部隊長室である。

少々長い廊下を黙々と歩いて行く。

沈黙が嫌になったので、部隊長室につくまでの道のりで、俺は疑問になっていたことを聞くことにした。

「それで、何で陸では少ない空戦適性のある奴を呼んだんだ？地上本部の海の奴らに応援要請をすればいいじゃないか。」

俺の疑問点はコレに尽きる。出向が決定していた時から思っていたのだが、態々陸で空戦適性がある奴を探す必要がないのだ。

今回のように、敵に空戦適性がある奴が陸の縄張りに出た場合、武装隊なり航空隊なりに申請して、隊員を一人送ってもらうのが普通である。

500m以上の探知能力、飛行可能な魔導師、更に逃げ足まで早いとなると、陸のメンバーだけでは、かなりの人数を出撃させないと捕まえないからだ。

だけれど、陸に応援要請がくるということは、何かしらの理由があるということ。

「えっと、本当にくだらない理由なのよ。」

「なんだ？」

歩きながら答えていたギンガの足が一瞬止まった。そんなにくだらないのか？

「犯人がただの下着泥棒だからよ。」

「は？」

俺の思考が一瞬で硬直した。

は？ちよつと待て、何か壮大な理由でもあるかと思つたら　え？  
下着泥棒？

「どうも海の人達は、下着泥棒ごときに戦力を割きたくないみたい  
なの。あまり危険性も少ないから、自分達でどうにかしろって」

「マジか？」

「ええ、残念ながら。」

ちよーくだらねえ。やる気が一瞬で失せたわ！

まあ、そんなくだらないことで呼びつけられた張本人は半殺し確定だけど。

「ここが部隊長室よ。ちよっと待ってて頂戴。」

「うーい。」

「いきなり随分フランクになったわね。」

「それが俺。」

ギンガは俺の返事を聞くと、はぁっと溜息を吐いて、その後顔を引き締めて扉をノックした。

「失礼します。ギンガ・ナカジマです。応援に来た人を連れて来ました。」

「入れ。」

「失礼します。」

低い声が中から返ってくる、ギンガは中に入って行った。

特になにか飾ってあるような部屋ではない殺風景な部屋に、ギンガに続くように中に入ると、後ろで扉が閉まる。

ギンガは部隊長の横につき、俺は部隊長の前に立った。

「応援に駆けつけました、レンヤ・カワカミ<sub>3</sub>等陸士です。」

「まあ、そう堅くなるな。取り敢えず座れ。」

「はっ！失礼します！」

「堅い奴だなあ」

軽く敬礼して、指示されたソファ<sub>1</sub>に座る。

え？お前誰だよって？失礼な。真面目にやるときは真面目きやる奴なの。公私は分けるタイプなんだよ。

「今回ことはどれ位知ってる？」

「大体のことは、ナカジマ陸士からお聞きしております。」

「そうか、なら話は早い。早速行ってくれ と言いたいところだが。」

「？」

「犯人がいつ現れるか分からん。周期的にそろそろだと思っただが、いつかは分からない。暫く待機してもらってもいいか？」

ああ、そういうことか。確かに、そんなこと分かる訳ないわな。仕方ないか。

「了解しました。えっと　？」

「ああ、自己紹介がまだだったな。ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐だ。108部隊の部隊長でもある。」

「ナカジマ三佐ですね。了解しました。　ナカジマ？」

「ああ、ギンガは俺の娘だ。呼び方被るだろ？ゲンヤでいいぞ。」

「娘さんでしたか。ってことは、スバルも？　あと、ナカジマ三佐とナカジマ陸士で呼び分けるので結構です。」

「お？なんだ？スバルのことも知ってるのか？　堅いこと言うなよ。」

「はい、以前不良に絡まれていたのを、助けたことがあったので。それと、これは譲れません。」

「そう言えばあの子、そんなこと言ってたわね。」

「そうだったのか？　うちの娘が世話になったな。感謝する。」

「いえ、自分は職務を全うしただけですので。」

俺がそう言つと、ゲンヤさんは苦笑いをして、それでもありがとよ。と言つて来た。

自分としては、職務半分、巫山戯半分だったんで、礼を言われると、なんだか罪悪感がある。えくすかりばー（笑）

「それで、お前さんはこれからどうするつもりだ？」

「そうですね、ここいらの地理の把握でもしておこうかと。」

ゲンヤさんに問われた俺はそう答えた。

地理の把握は結構重要なことである。犯人の逃げる先に先回りできたり、目的の特定に役立つたり。

必ずしておかなければならないことではないが、できるならばやっておきたいところだ。

「あの、いいでしょうか？」

「どうした、ギンガ。言ってみろ。」

俺とゲンヤさんが話していると、敬語状態のギンガが割り込んできた。

「はい、特にすることがないのであれば、私とカワカミ陸士で模擬戦をしたいんですけど。」

「そうか、確かにそうだな。実力の把握はしておいた方がいい

いか。」

ええ、ギンガと模擬戦かよ。できればやりたくねー。

魔力吸収も使えないし、派手な召喚もできないしなあー。そんな状態で戦闘機人と模擬戦とか疲れるだろ。負けるつもりはないけど。

「さて、話は聞いてたな？できればやって欲しいんだが。こちらとしても、空戦と幻術が使える奴としか知らないんでな。実力とできることを把握しておきたい。」

「了解しました。」

「ふふふ、そんなに嫌そうな顔しなくてもいいでしょう？模擬戦くらいで。」

「鬱だ。」

断りたいところだが、ちゃんとした理由もあるし、やるしかないか。

忌々しい権力め!!!

一日出向とかしてみる（後書き）

どうでしたか？

まあ、言われるまでも無く、今回の俺のテストと同じ赤点なのは分かってますけど（笑）

駄目だテンションを抑えきれねえ

ギンガの口調が良く分からないんですけど、どうしましょうか？こっちのほうがいいよ、とかあったら言ってください。

今回は 模擬戦ですかね？戦闘描写がうまく書けるかどうか

アンケートは、終了です。

これから集計に入りますwまっててくださいねw

再 アンケートとかしてみる(前書き)

第二回!チキチキ大アンケート!!

## 再 アンケートとかしてみる

さて、再びやってまいりましたアンケート。

あ、その前に結果発表をしますね？

第一の回答 あなたならヒロインの人数をどうしますか？

? テラハーレムオリ主。爆発しろ。 30票

? よりどりみどりの選べる7色！ 7票（少なっ！

? 意外にモテるオリ主。 30票（え

? 〓？

俺にどうしろと？

第二の回答 あなたはこの黄金に輝くロリコンですか？それともこの銀のペドさんですか？

? 幼女、ゲットだぜっ 35票

? 我らが神の守護者だ！ 32票

?>?

ルート分岐 ペドの可能性ができました。

という訳で、再びアンケートです。

ヒロインアンケート。

問1とりあえず、人気投票みたいな感じで、ヒロインの順位を競います。

なのは、フェイト（確定）以外でモブでもなんでもいいので、こいつこそがヒロインだっ！ってキャラに票を入れてください。一人一票です。複数回答は、最初に出た名前に投票という形で。ロリに入るかは貴方次第だ。

問2???ダブっちゃったんで、再集計。

?、?!!?で回答してください。?の場合はヒロインに投票された票数で変動。なのフェイ入れて3~5人。

問3主人公にフリードみたいな召喚獣をつけようと思います。ただし、通常時は弱体化。

バハムートとかカーンバルク辺りですかね?癒しを考えて。

問4少女視点フラグとか（ryについて。

いや、いまさらなのですが、さすがにあれは適當すぎたかもとか  
思ってますね。若干シリアスに方向修正して書き直そうかと思った  
んですが、そこるところどうですかね？適當でもいいでしょうか？  
作者が言っちゃいけない言葉だともうんですがw

の、以上になります。

長々しくてすいません（笑）それでは、続きを執筆してきますねw

期限は、そうですね、27日までにしたと思います。その日の投  
稿があった時点で終了ですね。

再 アンケートとかしてみる(後書き)

回答お待ちしております！

模擬戦とかしてみる(前書き)

はい、今日もこんにちは。作者です。

1話仕上がったんで、さっそく投稿。

適当なストックが後3話ぐらいあるんで、3日は更新続くかと。

超適当超展開ですけど(笑)

それではどうぞ。

模擬戦とかしてみる

急に決まった一日出向。

その犯人が下着泥棒とか　うらやま　ゴホン。

地理を把握しようと思ったたら模擬戦をすることに。

召喚魔法と魔力吸収の縛りプレイ

大丈夫か？俺。

魔法少女リリカルなのはstriker's 始まります。

場所は隊舎の近くにある訓練場。

その場所には既に何人かの人居たが、ゲンヤさんが追いやってくれた。

「セットアップ」

『stand by ready? set up』

無機質な機械音がし、俺の服装が一瞬で変わる。

俺の意思を反映して、デバイスのモードはアームド。つまりは剣の形態になる。カートリッジの残りを軽く確認して、目の前で待っているギンガに向き直る。

「準備はいい？」

そう話してきた彼女の格好はナックルにローラーシューズ。バリアジヤケットも既に着ており、準備は万端だ。

「いつでもどうぞ。」

「それじゃあ、始めるわよ。」

彼女はそう言ってゲンヤさんの方をチラリと見た。

その意図を感じとったゲンヤさんは、コクンと一回頭を頷かせて、手を挙げた。

「3 2 1 模擬戦、開始！」

ゲンヤさんの手が、台図と同時に振り下ろされた。

キュウイイイイイン

開始と同時にギンガの足のローラーが猛スピードで回転しだし、かなりのスピードで、俺に近づいて来た。

「はあっ！！」

軽く気合の入った声と共に、繰り出されるギンガの拳。

当たればかなりの有効打になるだろうが、それは当たればの話。ギンガは実践経験が少ないみたいだ。

対する俺は、避けようとしめない。彼女も疑問に思ったみたいだが、迷わず振り抜かれた。

ユラリ

軽く揺らいで段々と消えていく俺。

もちろん、幻術だ。

実践において、今のギンガのような行動は、命取りになる。相手が何をできるか、してくるか分からない時はなおさらだ。

俺はマルチタスクをフル活動させ、デバイスで幻術を維持させ、透明な姿のままギンガに斬り掛かりに向かう。

「ッ！！」

まさか幻影とは思わなかったのか、結構同様したようで、バックステップで後ろに下がろうとしたのか、ギンガが足に力を入れたのを確認し、それに合わせて攻撃した。

攻撃の瞬間に集中力が途切れ、魔法が解けて今にも斬りそうな俺が姿を現す。

「おらぁ！！」

「くッ！」

不安定に力を入れていた体勢のせいでもな回避ができなかったようで、ギンガは回避でなく防御を取る。

ガキンッ！！

激しい火花を撒き散らし、俺の剣とギンガのバリアが互いに押し合う。

押し合いに勝ったのは俺だった。

魔力によるブーストこそしていなかったが、ギンガがいくらなんでも戦闘機人とはいえ、不安定な体勢で受け止められなかったのだ。

空中に身を放り出されるギンガ。

が、彼女とて弱い訳ではない。空中の不安定な状態で何とか体勢を整え始める。

だが、そうはいかんざき。

「目覚めよ、無慈悲で名も無き茨の女王！アイヴィーラッシュ！」

『i v y r u s h』

見慣れた召喚魔法陣がすぐその足下に現れ、大地の精霊の力をを借りて、茨のツタがギンガを絡めとろうと顕現する。

召喚系の拘束魔法の厄介なところは、バインドと違い、魔力を流し込んでもバインドブレイクできないところである。破るには力技が必要だが、この魔法のツタは魔力で強化されている上、精霊の力を受けている。そう簡単には破れない。

俺のような魔力の低い奴が、堅い拘束をしたいときに非常に便利だ。

あ、因みに召喚しているから、床とか地面とかはどうにもなっていないよ？

「ウイングロード!!」

『Wing road』

ギンガは先天性の魔法、ウイングロードを発動させると、その上に降り立ち、足場を得たことにより、不安定な体勢を元に戻し、ローラーを回転させその場を離脱した。

「(ちっ!逃がしたか!!)」

心の中で悪態を吐いたのも束の間。ギンガの発動させたウイングロードが曲線を描いてこちらに向かってくる。

「(ウイングロードには物理攻撃判定があつたはず。回避すべきか。)」

軽く真上にジャンプをして、ギンガの進路先であろう場所に降り立ち、腰をズッシリと構えて衝撃を受け流す準備をする。

俺の行動に多少驚いていた彼女も、すぐに冷静さを取り戻して、片足の靴を進路に垂直にし、ブレーキを掛けながら勢いを力に変えて攻撃する体勢になる。

「はあっ!!--」

「でりやあああっ!!」

ガキンッ！ガキガキンッ！！

一撃、二撃、三撃。左から右、右から左、再び左から右。

高速に互いの攻撃がぶつかり合い、火花を散らす。トドメとばかりに繰り出した足技もぶつかり合って、互いに一步退き、次の技を繰り出す体勢に入る。

「カートリッジロード!!」

『Load Cartridge』

互いのデバイスが意思を汲み取り、カートリッジが2個使用され、空になった物が2個排出される。

溢れ出した魔力を完全制御下に置き、全ての魔力に自分の魔力を上乗せし、剣に収束させる。

技の名前なんてない。ただただ魔力を武器に収束しただけの技。魔法と呼べるようなものではないが、シンプルだけに、効果は大きい。

「ナツクル バンカアアアッ!!」

『Knuckle Bunker』

対してギンガは魔法を行使してきた。左ナツクルが魔力でコーティングされ、結構な速度で繰り出される。

互いの技がぶつかり合って、再び火花が飛び散り、衝撃が体を貫く。暫く押し合いをした後、俺から勝負にでた。

「魔力開放！！」

『release』

圧縮された魔力を指向性を持たせて一気に開放する。

剣から暴力的な衝撃波が生み出されてギンガを襲った。

「ッ！！」

『Protection』

間一髪。ギンガは衝撃波を防御して、ダメージこそ受けなかったが、衝撃で遠くに吹き飛ばされる。

俺の足下のウイングロードが消え、代わりに魔力で足場を形成しその場に留まる。対するギンガはウイングロードを展開して体勢を整えた。

「（遠距離攻撃はあちらが有利　見たところ近接戦闘のできる召喚師。ウイングロードで近づいて、高速戦闘で倒すしかないわね。だったら???）」

「（そろそろ勝負に出てくるか　体力勝負ではこちらが不利。短期決戦でバインドから一撃必殺に繋げるか。よし???）」

「（???次で決める!!!）」

どうやらギンガも次で決めるつもりのようで、あまり防御をとらない体勢になった。

キュウイイイイイ

再びローラーの音が鳴りだし、こちらに向けて一直線にウイングロードが伸びてくる。

こちららも魔力でブーストし、ギンガに近づいていく。

ガキンツ！とすれ違い様に一撃繰り出し、再びリターンしてすれ違いに一撃。

「オラああああ!!！」

「はああああッ!！」

剣と拳と足技の応酬。再びぶつかった時は、すれ違わず、ひたすら

攻撃を繰り出す。

躲し見切りぶつかり合う。機械同士の金属がぶつかり合う音が響いて、火花が散る。

長く続くと思つた均衡だったが、すぐに崩れ始めた。

考えれば当たり前である。相手は手足4本。こちらは剣と足の3本だ。よほど技能が離れてないと、競り合えるはずがない。

「（ だったら！ ）」

一旦少し距離を取り、大きく息を吸って詠唱を始める。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物???」

「!」

俺の詠唱を聞いたギンガは、俺の魔法発動を止めるために、詠唱を中断させようと猛スピードで接近し、張り付いて攻撃をし始める。

だが、俺の詠唱は止まらない。マルチタスクを利用すれば、別の行動をしながら詠唱をすることくらい簡単なことだ。

だが、その分攻撃を見切れなくなっていくので、徐々に攻撃で押し切られていく。

「言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖！」

「はあああつ！」

俺の言葉が止まったので、詠唱が終わったのを悟ったのだろう。気合のこもった一撃が、俺に向かって繰り出された。

まだだ　　まだスキは小さい！

ガキンツ！！

俺はあえてギンガの攻撃を受け止め、わざと体勢を大きく崩してスキを作る。

もちろん、ギンガはそこを見逃すわけもなく、決めようとしているのか、大きく腕を振りかぶった。

ここだ！！

『Sonic Move』

俺の特定動作に反応して、デバイスが移動加速の魔法を発動させる。

次の瞬間、加速する世界の中で、一瞬でギンガの後ろに回り込んだ。

「え？」

空振りになるギンガの攻撃。

思いつき振り抜いた体勢だったので、大きなスキができた。

「錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

『Alchemic Chain』

足下から魔法陣が展開され、鎖が召喚される。無機物操作魔法によって操作された鎖は、あっという間にギンガを捕縛した。

アルケミックチェーンは、原作知識を頼りに覚えた魔法の一つである。何気に使い勝手がいい。

「ライフルモード」

『Mode change rifle』

俺はは更に指示をデバイスに飛ばし、モードを変えて準備する。

剣が異空間に収納され、ライフルが手元に現れる。砲撃魔法を発動する時は、いつも大抵ライフルを使っている。

「収束せよ、大気の魔力。」

特定キーワードの発言により、デバイスが魔法陣を展開させる。今まで使っていた魔法の撒き散らした魔素が根こそぎ収束されて、砲撃がチャージされていく。

ギンガは暴れて鎖から抜け出そうとしているが、至近距離の発動で効力が高まっている上、綺麗に捕まったので、そう簡単には脱出できない。　　なんかエロいな。

「カートリッジ　フルロード!!」

『Load cartridge full load』

ガチヨン、ガチヨンと残りのカートリッジが一気に使用される。その数4個。

カートリッジの使用により、収束されていた魔力が更に高まった。これで防御されたとかシャレにならないからな。念には念を入れて。

「か、カートリッジロード!!」

慌ててギンガがカートリッジを使用し、防御の体勢に入った。

この勝負、俺の勝ちだ。

「ぶち抜け、必殺！」

「トライシールドッ!!」

『Tri Shield』

今のキーワードが収束終了の合図。あとは魔法を発動させるだけだ。

ギンガの防御ごと貫いてやる！

「シャイニングバスターーツ!!」

『Shining buster』

ギンガの防御をぶち抜いて、俺の砲撃が決まった。

いや、この魔法は砲撃魔法バスターというより収束砲撃フレイカーだけどね。

「これで今回の件は終了だ。すまなかったな、わざわざ。」

「いえ、仕事でしたので。お疲れ様でした。」

「ああ、お疲れさん」

時刻は夕方。模擬戦が終わった後、俺はすぐに犯人の搜索を開始した。犯人は案外簡単に見つかって、こちらが近づくと逃げ出したので、空戦が可能なギンガと挟み撃ちにしてボコボコにしてやった。ざまあ。

模擬戦は　　結論言つと、あのまま俺の砲撃を受けたギンガは撃墜。俺の勝ちだ。

まあやり過ぎだとゲンヤさんに正座させられてこっぴどく怒られたけど。ギンガはすまなさそうに、その様子を見いていた。助けて欲しかった。

お互いに熱くなりすぎて魔力を消費しすぎたと焦ったものだったが、犯人の防御が紙だったので、普通に余裕だった。

「それでは、失礼しました。また仕事をする機会があれば、よろしくお願いします。」

「おう、そんなときゃあ、よろしく頼む」

最後にもう一度敬礼して、部隊長室から出て、来たときに通った道を歩いていく。

よく考えたら下着泥棒の顔、結構イケメンだったな。もう一発殴っておくべきだったか？

そんな物騒なことを考えながら廊下を通っていく。

「レンヤさーん！」

「ん？」

しばらく廊下を歩いていて、結構な距離を歩いたな〜と感じたくらいで出口が見えた。

その時後ろの方から声が聞こえてきたので、そちらを向くと、声の主であるギンガが走ってきた。

俺の目の前までくると、結構な距離走ってきたのか、軽く息切れしている。このまま話させるのもかわいそうなので、少しまってあげることにした。

「い、ごめんなさい。いきなり呼び止めちゃって。」

「ああ、いや、問題ないけど、どうかしたか？」

「あ、ちょっとまって、ほらここ、ネクタイ緩んでるから。」

「うげ！？わ、悪いな。」

ぐっ、公式の場を抜けたからネクタイを緩めたんだけど、ギンガに見つかってしまった。目ざとく見つけたギンガはキュッとネクタイを締めさせ、さらに俺の服装をチェック。ベルトやシャツを指摘

し、さつさと正していく。

あ、でもシャツは自分で入れました。女にシャツ入れられるとか屈辱以外の何者でもないだろ。

「もうー、ちゃんとしてよね？」

「以後気を付けます。」

ギンガに見つからないようにな。

「で、やり遂げた感を出してるけど、まさかコレが用事？」

「ち、違うわよ！連絡先を貰いにきたのよ！」

「」

連絡先　　ね。

「？。どうかしたの？」

「いや、なんでも。」

「それで、返事は？」

「オツケーだ。」

俺がそう言っただけで端末を取り出すと、彼女も嬉しそうに端末を取り出して、データを表示した。

俺もそれに倣うようにして、データを呼び起こす。

端末同士を軽く接触させ、その間にデータの送受信を行う。全てが一瞬で終わり、ギンガと書かれたデータが表示された。

「はあ」

軽くため息を吐き、データをデバイスとリンクさせる。こうすることで、連絡が来たときにデバイスがアラームみたいに知らせしてくれる。めっちゃ便利だ。

「はあ」

ギンガの文字を見て、再びため息を吐く。いや、別にギンガと連絡先を交換するのがいやなわけじゃあ無いんだ。俺のやっていることを考えると、連絡先を交換するのは気が引ける。デバイスのデータをいつ引き抜かれるか分からないからだ。

そうなってしまえば、ギンガは格好の標的だ。だから、出来れば断ったときがあったんだが。

「あんな顔されたら、断れるかっての。」

男性に自分から申し出るのは初めてなのかしらないが、断られたらどうしようという感じの、あの不安そうな顔。断ったら泣いてしま  
いそうで、断るとか無理無理。

「どづしたの？」

「いや、なんでもない。」

「そつ？」

「ああ。」

うわっ！？ギンガがいるの忘れてた。聞こえては  
ないみたいだな。よかった。

ギンガは心配そうにこちらをジーっと見たあと、またね、と言って  
隊舎の奥に入ってしまった。

しばらくジツと立っていたが、仕事があるし帰らないといけないの  
で再び歩きます。

帰って今回の出向の報告に、書類の整理、デバイスのメンテも軽く  
しておきたいし やることは沢山ある。

「はあ」

やること沢山で鬱になり、またため息を吐いた。

今日は随分ため息が多い日だ。

模擬戦とかしてみる（後書き）

終了です。

今日はまた投稿するか分かりません。

慌てて仕上げたもので、誤字があるかも。

今回デバイスを英語表記にしてみました。こっちの方がいいですかね？

まあ、会話するようになったら、会話部分を日本語にしますけど。

その他ご意見あれば、感想もしくはメールボックスによるしくお願  
いします。

書類処理とかしてみる(前書き)

どうも。本日も投稿です。

今回シリアスモードがありますが、キニスンナ(笑)

皆さんのいつもの華麗なスルースキルでスルーしてやってくださいw

それではどうぞ。

## 書類処理とかしてみる

夢を見た。

まだ幼かった頃の、最悪な現実を。

自分が、今と比べて無力な奴だった頃の夢を。

もし、あの時ちゃんとした力を考えてもらっていたら、こんなことにはならなかっただろうか？

考えても、仕方が無いか。

魔法少女リリカルなのはstrickers始まります。

「おいつ！待てやめろ！」

「うつせーんだよ！俺はてめえらとは違うんだ！」

「お前！作戦無視で仲間を危険に晒す気か！？」

「はんっ！俺ならできるに決まってる！俺はてめえらより優秀だか

らな！」

「おい、待て！???クソツ!!!残りの奴らはフォローに回れ!!!い  
いか???」

夢を見ていた。

一昔前、糞つたれな部隊にいた頃の、糞つたれな夢。

辺りで警報が瞬間に鳴り始め、次々と退路が塞がれていく。

「おら、おら!!! はっ!大したことねえ!奴らばかりだな!  
今回も主犯格は俺が頂くぜ!雑魚は雑魚らしく、底辺に居座って、  
俺の役に立つんだな!」

「やめろ!そつち行つたら???」

新たにトラップが発動し、自立稼働と思われる兵器が動き出す。

あっという間だった。他に居た仲間が一人、又一人と死んでいく。

必死で逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて???!

辺りは既に真っ赤な血の海。

また??? まただ。

自分以外、誰も守ることができなかった。

ピピピピッピピピピッピッピッ！

いつも通りの朝。目覚ましの音と共に、俺は目を覚ました。

「 最悪だ。」

ぐしゃぐしゃになった髪の毛を、更に手で掻き回し、立ち上がる。

真っ直ぐに洗面所に向かって顔を洗い流し、まだ抜けきっていない眠気を飛ばした。

目覚めは最悪。 嫌な夢を見た。

「 あー！ やめやめ！ 辛気臭いのは無しだ！」

今日も一日頑張るか！

「おはようございます!」

「おはよ〜」

目覚めは最悪な気分だったが、かといって仕事を疎かにするわけにはいかない。ただでさえ陸は給料が少ない上、階級も低いんだ。減給とかされたらやってられないね。

「おはようございます!」

「おっす!おはよう!」

俺の部隊は総人数が少ない。まあ、端っこだからな。

かといって、食堂などがなくと聞かれば、それは違う。そもそもそういう最低限の施設がなければ、部隊として成り立たない。

「おはようございます!」

「お、今日もよろしくね〜」

俺の階級は一番下なので、当然そういう施設から最も遠い所が俺の部屋である。

ということだ。食堂に行く道のりで、どうしても大量の上官に会ってしまふ。

「おはようございます!」

「おお!お前さんか。今日もいつものよろしく頼むわ!」

「了解です。」

???で、食堂行くのに大量の挨拶と敬礼を繰り返さなければならなくなる。嫌がらせか。

ん?いつものって何だって? それはもう少ししたら分かると思う。

「!」馳走様でした!」

うん、相変わらず、ここの食堂は美味いというか、普通すぎるがそこがいいというか。高級めの食事は確かに美味しいが、普段食べ続ける味ならこのくらいがちょうどいいと思う。

さっさとトレーと食器を片付けて、自分の仕事スペースに向かう。

因みに今日は一日中事務仕事。溜まっていた分を一気に消化する予定だ。

食堂から、事務スペースへの距離は意外に近い。

まあ、だからといって、それが近すぎるというわけでもなく、何度か上官に遭遇し、仕事を押し付けられる。俺が上官に逆らえないのをいいことに、いい気になりおって!!! いつか又ツ殺す!!!

「失礼します。」

そう言っつていつも通り中に入っていくと、何人かが既に事務仕事を始めていた。

「お？来たのか？ さっさと始めた方がいいぞ。お前の机、相変わらず大変なことになってるな。」

「悲しいことに、もう慣れました。」

「不憫だな。お前。」

入っつてすぐ話しかけてきたのは、ソコソコ仲のいい上官（あれ？俺からみたら、殆ど上官じゃね？）だ。

そんな上官??以後先輩とす??は、真つ直ぐと俺の机を指差して苦笑いをする。ってか、不憫に思うなら手伝ってほしい。

「それじゃあ、仕事に取り掛かりますんで、用事がある人がいらっしやったら、いつも通りお願いします。」

「おう、任せとけ!」

先輩はニツコリ笑うと、自分の書類に取り掛かり始めた。

俺はも自分の机へ目を向け、現実逃避したくなっただが、席についてディスプレイを起動させる。

「さて、始めますか。」

机の上にあつたのは大量の書類だ。そう、それも山になってるほどの。俺の机が他の人より大きいやつになっているのは、書類を置くスペースを確保するためである。

手近にあつた書類を一枚手繰り寄せ、片手にペンを持ち、もう片手で起動させたディスプレイを操作するキーボードを使う。

「フィー。書類を提出日順に仕分けして、片付けれそうなものから片っ端にやっつけてくれ。」

小さい召喚魔法陣が現れると、そこからフィーが飛び出してきて、俺の意思と命令を確認した後、ディスプレイに入り込んでいった。

途端、ディスプレイの中のデータがあつという間に並べ替えられ、  
下の方の物から消えていく。

俺もマルチタスクを全力使用して、片手で書類にサインしたり、報告書をどんどん終わらせ、もう片手で俺が確認しないとイケない分のデータをキーボードで処理していく。

「あ、こっちの書類もいい？」

「そっちの山に置いておいてください！」

「おーい、そっちにデータ送るから、ついでに報告も上げといてくれ！」

「了解しました！」

「こっちの書類なんだけどさー 聞ってる？」

「すみません！後ちょっと待ってください！」

恐ろしい速度で書類とデータを一気に処理していつていると、次々と上官がやってきて、俺に仕事を押し付けていく。

お前ら ちよつとは真面目に仕事やねよ

まあ低い階級の俺は逆らえないけどさ

「ちょっとー！？こっちもお願ひ！」

「仕事してください！」

「ふー　これで最後か。お疲れフィー、戻っていいぞ。」

ディスプレイから出てきたフィーは、チカチカと点滅して、送還用の魔法陣で帰っていった。

それを目の端で追いながら、最後の書類を手にとる。

内容は、俺たちの担当区画で起こった市街地戦闘の被害報告書だ。

どうやら違法魔導師が逃げ込んだみたいで、その事件を担当していた本局の連中の魔導師との戦闘の余波の報告書のようだ。

「　　結界が張られる前に戦闘。指示の無視。犯人は捕まえたようだが　　酷いな。」

局員の魔導師ランクはAAA。次元航海艦に1人はいるエリート魔導師だな。

現地の局員との連携は駄目駄目。それどころか独断専行による戦闘行為。敵相手に高々に名乗り上げたって

たまたま相手が格下AAだったから良かったものの。格上だったらどうするつもりだったんだよ。資料によれば犯罪者は殺傷設定。そんなことしたら仲間を巻き込んで全滅だな。

「ちっ！ 嫌なことを思い出す。」

俺はエリートが嫌いだ。

だが、全員が嫌いってわけじゃあない。この類の奴。自分の力量を正確に把握できてない奴だとか、仲間を巻き込んで危険に晒す奴とか、現実を理解できていない奴とかだ。

ひとえにエリートと言っても、いろんな奴がいる。勿論、ちゃんとした奴がいるのも知っている。

だが、本局の魔導師だとか、エース級の奴らとかは、どうしてもそういう目で見てしまう。実際そういう奴らの方が多いのだ。本局の奴らの洗脳じみた教育のせいだ。

原作にいたティータのように、本当に他人のことを思って局員をしている奴らは少数派だったりする。

「エリートか。」

糞部隊にいた頃の強かった奴らは、皆自分のことをエリートだとか言っていた。

実力はあつたが、勝手に自滅したり、味方を巻き込んだりする酷い奴らだったさ。

あの部隊は、功績を立てると、かなりの待遇になる。自称エリートは、その待遇を一度経験すると、下に落ちてきた時に自分の待遇の雑さに、不満になるらしい。

でも、ソコソコしか実力はない。結果仲間を犠牲にして功績立てたり、功績が欲しいが為に独断専行、ついていけない仲間は馬鹿が起動させたトラップや警報で死んでいく訳だ。

そんなことを経験したせいだろう。エリートを嫌いになったのは。昔は羨ましい程度だった。

「ああ！やめだ、やめ！」

俺は考えることを一旦放棄した。朝の夢のせいで、どうしても思考がそちらよりになってしまう。

「そんなことより、仕事仕事。」

止めていた手を再び動かし、最後の書類を仕上げるのだった。

「部隊長、今日の仕事は終わりました。」

「相変わらず恐ろしいスピードだね。あれかい？君は実は口ボツトだったとか。」

「違いますよ。それと、こっちの案件の報告と、使用する費用の申請をしたいんですが。」

書類を手早く済ませた俺は、部隊長室に来ていた。

勿論報告に、である。誰が好き好んでこんなところに来るかっての。

「うん。これ位だったら問題ないよ。費用は多少海から奪えそ  
うだしね。」

「お願いですから、あまりやり過ぎないでくださいよ?。」

「分かってる、分かってる。」

まあ、被害を出したのは海の連中だし、多少はボツタくれるだろうが。連中は、無駄に金持ってるから、多少誤魔化しても気づかんだろ。

あ、そうだ。もう一つ要件があったんだ。

「部隊長、もう一つ要件があるんですが。」

「ん？何だい？」

「一週間程、有休が欲しいんですが。」

「君は僕に死ぬと言っているのかい？」

「いえ、そろそろまとまな休日を取らないといけないんで。」

俺が抜けるということは、書類を自分で処理するということである。それは、自分で絶対やらないといけない分以外俺に回していた連中にとって、地獄の作業である。

部隊長の書類の仕事も、本来はもつとあるのだが、俺が結構簡略化しているから殆ど目を通すだけで済んでいるのであって、他の奴らはそんなことしない。つまり、部隊長は大量の書類を処理しなければならぬのだ！

ふっ！ざまあ！書類に溺れて溺死しろ！

「いや、人事の人達が五月蠅くてですね。ついこの間は襲撃を受けましたよ。危つく気絶させられるところでしたよ。」

「そのままやられてしまえばよかったものの。」

「あれ？部隊長なにか言いました？いいんですか？俺が仕事手を抜いても。」

「イヤ、ナンデモナイヨ。」

俺の言葉にカタコトに返事をする部隊長。

いつもいじめられている俺の、唯一反逆できるところである。

「それじゃあ、お願いします。」

「仕方ないね。申請しておこう。」

「ありがとうございます！失礼しました！」

軽く敬礼して、俺は部屋を出ていった。

さて、一仕事するか。

## 書類処理とかしてみる（後書き）

終了です。

今日は学校で補修があったんで、投稿が遅れました。忌々しいやつめ。

シリアスはスルーしてやってください。あれに特に意味はありません。主人公がいかにしてエリート人種が嫌いになったか。ってやつです。

話は変わりますが、皆さんリリカルなのは新作ゲームやりましたか？作者は既にプレイ済み（笑）

もうね、ザフィーラの赤水着がツボだった。自分魔法戦記はある程度しか知らないんで、トーマが出てきて困った。でもリリイは良い。ヴィヴィオとアインハルトもいい。ただしクロノ。てめえの水着姿は駄目だ。いらん。開放された時困った。

アマタが若干ティアナと被っているような気もしなくもない。戦闘がただけ。ティアナは熱血じゃない。

FFは現在プレイ中。男主人公のヒロインどうなの？

研究所に潜入とかしてみる（前書き）

今日です。

自分でも分からないけど気が付いたらこうなっていた。

多分似非シリアルはこれで終わり。次は六課フラグを立てようと思う。

研究所に潜入とかしてみる

いつもやっている書類作業。

そこから見つけたのは痕跡。

まあ、数打てば当たる作戦だったけどね。

さっそく行ってみよう！

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 始まります。

じゃり

俺の足元で、僅かに音がなる。

体を廃ビルの影に隠し、チラリと奥を覗く。

「 当たりか。」

視線の先には、完全に戦闘装備をしている人物が2人。視線をあち

こちらに変えているので、恐らく見張りだろう。

不自然な魔力痕跡があったので追いかけてみたが　やっぱり当たりか。

サーチは　してないみたいだな。それなら魔法を使っても大丈夫か。

「シューターセット。カウント50。」

「Set Shooter・Count 50」

空中待機させているのは誘導弾。隠蔽と合わせて魔力を多めに消費するが　仕方ない。

「オプティックハイド」

『Optic Hide』

俺は自身の姿を消して、近づいていく。だけど、あまり近づかない。一定距離内に入ると、デバイスが感知するからだ。

じゃあ、そういう時どうすればいいのか。簡単だ、デバイスの処理を別のことに使わせる。その為のシューターだ。

50カウントが切れる。

次の瞬間、シューターが飛び出して来た。数は10個。放たれた誘導弾は、5個ずつに別れてそれぞれの目標に向かっていく。

が、当然敵さんはそんなに簡単には潰れない。やはりというか、常時展開型のシールドを張っていたようで、当然のようにシールドで防御する。

それを警戒してソニックムーブに仕上がったんだが　　そこまで強い強度じゃないな。心配して損したか。

「な、なんだ！？敵襲か！？」

「おい！連絡を??」「させねえよ」なっ!??」

透明なまま近づいて、目の前で姿を現し、首を絞めるようにして2人の口を塞いだ。

シールドは薄かったので、大した抵抗もなく、魔力吸収で抜けた。頑固な奴だと拮抗するからな。

見張りの役割は飽くまで敵襲があったら報告することだから、全魔力を使っても守りに徹しているやつとかいるし。そうだったら、エース級の奴らよりシールドだけなら硬いしな。

「き、貴様　　ッ！　　いったい　どこから!?!」

「答える義理はねえよ。」

魔力吸収を全力で発動し、急激な魔力現象で見張りの2人は気絶した。余分な魔力は排出つと。

こいつらはバインドを掛けてその辺に放置。

「さあ〜て、侵入しますか。」

再び不可視化し、目の前の入り口と思われるところに入っていくのだった。

「違法研究所　と見て間違いなさそうだな。」

中に入ると、そこは研究所だった。まあ、その辺は想定範囲内なので、適当に何部屋か回って、資料を強奪させてもらったが、分かったのは違法研究所ということだ。

まあ、まだまだ部屋はあるみたいだし、焦ってもしかたないか。

そう思いながらサーチャーを走らせ、ゆっくりと歩いていく。

さて、そろそろ俺が何をしているか説明しよう。

俺がやっているのは、まあ、見ての通り違法研究所の破壊行為だ。まだ壊してないけど。

意外かもしれないが、大きな研究所の情報は、大きな部署ではなく、俺たちみたいな小さい部署の方が、情報が流れて来やすい。

と、言っても、どこどこに研究所がある。とかではなくて、本当に些細な、悲鳴のようなものが聞こえたとか、黒尽くめの不審者を見たとか、明らかに悪戯なような情報だったり、直接的なものではない。

そういうは勘違いの通報も含めるとかなりの数があるので、本当に誰かが被害に合っている場合のみ確認しに行くのだ。放っておいても、特に何も言われない。

だけど、そんな沢山ある中に、本命が混じっている時がある。実際に現場に行ってみると、かなり薄い魔力痕跡があったりとか。

恐らく、俺みたいに周囲の魔力に敏感になるようなスキルを持っているやつとか、精密検査をしないと分からないだろう。

まあ、そんなことで、俺はそういうことがあった通報現場まで一応足を運ぶわけだが、それで今回は当たりを引いたってわけだ。

つと敵か。

「おい、今回攫ってきた奴の親族の記憶消去は済んだのか？」

「ああ、その辺ぬかり無しだ。上層部の奴らが手を回している。」

「しっかし、管理局様々だな。俺たちも好き勝手できるし、奴らも腐ってるな。」

「ふん。そんなことでもよかるう。俺たちはやりたいことやれるんだしな。」

「まつ！そつか！んでよ???」「動くな。」!？」

我慢の限界だった。ゆっくりやるつもりだったが、そうはいかねえ見たいだな。

俺は目の前を通ってきた白衣の奴ら2人のうち1人を気絶させ、もう1人の方を後ろから拘束し、首筋にナイフを突きつける。因みに本物である。さっき拝借した。

「侵入者!??て、てめえどこから???」「騒ぐな!ああ、このナイフだが、非殺傷なんて思わないほうがいい。本物だ。」ひ、ひい!？」

喚きそうになった研究者を、突きつけたナイフで首筋を少し傷つけると、面白いほど怯え始めた。

この手の研究者は、自分の身の危険が迫ると、洗いざらい全て吐いてくれる。狂気に侵されているやつは別だけど。

「質問に答えてもらおうか。」

「」

「攫った奴はどこにいる？」

「」

「答える！！」

「ひい！？つ、突き当たりを曲がった左の部屋だ！！」

「そうか。」

聞きたい情報を聞き終わると、こいつも同様に気絶させ、バインドで縛っておく。あとデバイスも没収つと。

「さて、急ぐか。」

『Sonic move』

俺は高速の世界に入り、その場から消えた。魔力はさっきの奴らからも回収したから大丈夫だろ。

特に障害に会うこともなく移動した俺は、部屋の前に立っていた。

会話が聞こえて来るが、内容は聞き取ることができない。サーチャーを軽く走らせたが、妨害が酷く正確な人数は測定出来ず、大人数いることしか分からなかった。

「突入してすぐ制圧は 無理そうか。かといって広範囲攻撃だと証拠がなくなる となると状態異常系か。だったら????モードチェンジ ブースト」

『Mode change Boost』

セットアップしていたデバイスが、ブーストモードに切り替わる。あ、因みにさつきはアームドだ。

軽く構え、頭を落ち着かせ、詠唱に入る。

「風、光の波動の静寂に消える時 我が力とならん！シヴァー!!」

『call summon shiva』

流石にこれだけ魔力を使うと隠蔽しきれない。恐らく、すぐその

魔力反応に気がついたのだろう。

ドタドタと複数の足音と、慌てふためく声が聞こえてくる。

そんなことがあっている中、眼前に召喚魔法陣が出現し、シヴァが出てきた。

氷の女王。見た目を聞かれ、例えるならばその一言に尽きる。身に纏うもの、自身、全てが氷でできている女性だ。その出現により、周囲の温度がどんどん下がっていく。

「何事だ！！？」

そんなとき、目の前の扉が開いた。プシューッと開いた扉の向こう側から、驚愕の表情をした研究者が現れる。

「行け、シヴァ」

俺の合図と共に、氷の女王は目に間の研究者には目もくれず、吹き飛ばしながら研究室の中央に一直線に進み、たどり着くと、そこに佇んだ。

「スリプガだ！！」

そこで更に指示を飛ばす。俺の意思を汲み取ったシヴァは、光混じるエフェクトと共に、辺りの研究者を根こそぎ眠りに導いた。

今回、シヴァを呼び出したのは、攻撃の為ではない。ダイヤモンドダスト辺りを使えば目的を達成できただろうが、それでは機械まで凍ってしまう。

役目を終えたシヴァは、光を放ちながら、元の場所に帰って行った。

「ここは 何の研究室だ？」

死屍累々の状態の研究者を片っ端からバインドで拘束していきながら、視線を走らせる。

「 女の子 か？」

奥に居たのは女の子だった。手術台のようなところに括り付けられて、眠るようにしてそこに居た。

近づいて確認すると、意識を失っているらしい。身体を軽く確認してみたが、衝撃を与えたような痕跡はない。

「注射の跡がある 麻酔か。」

取り合えずきつくないように拘束を外し、床に横たわらせる。

それが終わると、研究室のコンピュータを起動し、データを盗み取る。

「今回の実験内容は 人体構造の把握と拒絶反応を調べること？  
おいしい、生きたまま臓物取り出すつもりだったのか！？生きたま  
まの遺伝子操作による拒絶反応の回避 人造魔導師か！！」

俺は更にコンピュータのデータを探り、奥まで入っていく。

キーボードのキーを激しく叩き、情報の誤りがないか確認しながら  
進めていく。

「関連者と、他の研究所 連絡をとっていたところは？」

俺はこの研究所と繋がっているところを探すため、メインデータに  
アクセスする。

1 2 3 多いな。データを抜き取ってっつと。

「さて、支援してたのはどこのどいつだ？」

データの最深部。そこに嚴重ロックが掛かってデータがあった。閲  
覧権限はこの責任者以外は無理。

相当お偉いさんだな。

「ヴィー！！ヴィーヴィー！！」

が、閲覧しようとしたその瞬間、警報が鳴り出し、システムが勝手に動き始める。

ポーンとしていると、画面の右下からデータが1つまた1つと消え始める。

「うげ！？データが片っ端から消えていく！？逆ハック！？」

慌ててデバイスとの接続を切り、ハッキングを防ぐ。データを確認したが　こりゃ、やられたな。結構情報持ってた。

無事だったのは数力所の研究所の情報だけか。幸い、個人情報は取られてないし　大丈夫　なのか？

「警告、警告。自爆システムの起動を確認しました。10分後に爆破します???」

「冗談じゃねーぞ！？て、撤収ー！！」

もたもたしている間に自爆システムとやらが起動し、研究所が揺れ始める。

ちよ、まじかよ！？

俺は慌てて少女を拾い上げ、研究員から魔力を吸い上げ、それを使って強制転移させる。魔力光と共にいなくなったのを確認すると、俺も脱出した。

外の廃ビルに転移し、暫くすると研究所から爆音がし始めて、地下にあったと思われる研究所が爆破された影響で、上にあった廃ビルが崩れ落ちる。

「あー 書かなきゃいけない書類が増えたか。」

ここの研究員達は、自分の部隊に送るつもりはまったくくないが、ここは自分の担当地区。

爆発が起きたとなれば、自然に書類が増えるしな。更に原因は不明。そのせいで書類はさらにややこしくなる。

自分で招いたこととはいえ 鬱になるな。

ハッキングの犯人め。いつか殺す。

そんなことを考えながら、背負っている少女と研究員をどうするか考えるのだった。

まあ今回のようなことは別に始めてじゃないし、やることは既に決まっているんだけどな。

場所は暗い部屋だった。

そこはいかなる権限を持ってしても、許可無き者は入れない、地上でも珍しいところだった。

そこにあるのは??? 脳みそだ。

「最近、我らの研究所を潰し回っている者がいると聞く。」

ゴポゴポと泡が漏れ、どこからともなく声が聞こえてきた。

「なに、別段大きな損害が出ているわけではない。放っておけ。」

「そつだ、我らの計画に何ら支障はない、研究所のことを言っても、誰も信じるまい。」

「だが、邪魔なものも事実。少し探りをいれてみるべきでは？」

「蟻が何匹集まろうとも、所詮蟻。気にすることはない。」

「我らは計画のみ気にしていればいい。邪魔な奴らはその過程で勝手に死んでいく。」

「そつだ、我らの全ては????？」

「『地上の平和の為に。』」

## 研究所に潜入とかしてみる（後書き）

主人公が研究所を潰しまわっているというお話。

運良くヴィヴィオに当たればいいなと思ってやっているが、成果ゼロ。

あと、主人公が人造魔導師とプロジェクトFを知っているという理由が欲しかった。

前書きで言った通り、似非シリアル終了。

ギャクとか書いてみたいけど、次は六課フラグを立てるため断念。

そろそろ原作注意報。

三人称視点 引き抜きとかされてみる(前書き)

今日分を投下。

アンケートについてですが、詳しくはあとがきで。

あと、ヒロインアンケートのみ、もう少し継続させたいと思います。終了はこちらで判断しますんで、まだ投票してない方は投票してくださいですよ。

それではぶっぞ。

### 三人称視点 引き抜きとかされてみる

時は流れ、ムシムシと暑かった時期は過ぎていき、いつもの気温に戻った今日の頃。

今は新暦75年一月。これが地球の日本ならば、あけましておめでとございますとか言い合った後なのだろうが、ここは異世界のミッドチルダであり、日本ではないのだ。

ここは四季というよりも、何か寒くなったなあ程度の変化しかない。雪なんて降らないので、北海道の人達程厚着をしている人はいないが、厚着をしている人はいる。

カツン

そんな時期のミッドチルダの一角に存在している隊舎に、1人の女性が進んでいた。その人の名を、八神はやてという。

カツン、カツンとまた一歩踏み出しながら、廊下を進んでいく。

「はあ」 もう寒い時期になってもうたなあ。書類の作業が辛くなるわ」

はやては一歩一歩着実に進みながら、そう愚痴を零した。ここ??

？陸士108部隊の隊舎の部屋は暖房が付いていないので、そこに行くと思うと、そう実感させられたのだ。

なんせ手を出して書類作業。彼女の親友である高町なのは居る教導隊なんかは、暖かいのだろうが、生憎彼女の隊舎にも暖房はついていない。魔法でどうかしようか、真剣に考えさせられる日々を送っていた。

しばらく歩くと彼女の近くに扉が見えてきて、はやては目の前で止まった。一瞬トイレノックで入ってやるうかと頭に考えが過ったが、この世界では通じないかと思い出し、するのをやめた。

はやては以前似たようなことをやったきとがあっただが、そのとき無反応なのが気になって聞いてみたところ、大笑いされたので、それ以来封印している。

コンとでる音を数回鳴らし、中から入ってこいという声が聞こえてきたのを確認して、中に入る。

中に居たのは男性？？？ゲンヤ・ナカジマだ。

ゲンヤははやてに目の前の椅子に座るように言って、はやては遠慮なく失礼しますと言いながら座った。

「それで、今回はどいしたんだ？まあたどっかに、けっ躓いたか？」

「ええと、まずはお礼を言いに。いつも助言には大助かりしてますんで、ありがとうございます。」

「なあに。気にすることはない。コッチも、多少借りがあったんでな。」

頭を下げたはやてにゲンヤはそう言った。

この2人の付き合いはそこそこ長いものである。幾分か???4・5年くらい前に起こった空港火災事件の時からだ。

???空港火災事件。

臨海空港で起きた、原因不明とされている大規模火災事件のことだ。

負傷者こそいたものの、死者がいないという規模の割には奇跡的な結果に終わった事件である。

真の原因は、原因・使用用途不明とされているロストログリア「レリック」の起こした干渉反応の結果であるが、それを知るものは極僅かである。

「それでも本当、ありがとうございます。近々部隊を立ち上げられるようになったのも、皆の協力があってこそだったんで。」

「いいから、要件さっさと言え。」

もう一度頭を下げるとゲンヤは恥ずかしそうに頬を掻き、軽く目を逸らす。

その様子を見たはやては、照れとるなあ、と内心ニヤニヤと笑い、話を続ける。

「今日の要件ですが、この子についてです。」

「この子　　？誰だ？」

渡した書類には、1人の少女のデータが書いてある。漏れても問題ない程度の個人情報と、戦闘スタイルだ。

書類に載っている少女の名は、キャロ・ル・ルシエ。

ピンク髪の元気そうな少女で、保護責任者はフェイト・T・ハラオウン。戦闘スタイルは補助特化の召喚師だ。

「保護責任者、フェイト・T・ハラオウン？お前さんの親友じゃないか。　　経歴が訳ありみたいだな。」

「そうなんです。召喚魔法がちょっと訳ありで。」

「　　暴走を繰り返しているな。」

資料を机の上に置いてはやてに返ししながらゲンヤはそう言った。受

「取るはやても、ちょっと厳しい顔だ。」

「普通の無機物召喚や生き物の召喚なんかは大丈夫なんですけど、彼女の最大の魔法である、竜召喚を行うと、すぐ暴走しまうんです。」

「で、なんで陸に来た？そういう用件なら、陸より海の範囲だろう。教える奴も、アドバイスする奴も。」

「それはそうなのですが、そっちも事情がありました。」

「ゲンヤのもっともな問いに、はやては苦笑いでかえす。」

「そもそも、召喚魔導師は珍しい。補助系魔導師すら、他より少ないのだ。補助魔導師は使い手を選ぶ。これが、近接戦闘や、遠距離戦闘なら、手段は違えど、いくつも方法はあるが、補助魔法はそうもいかない。いうなれば、補助魔法という一括りなのだ。」

「それ故、他の魔導師より数が少ない。ど派手に戦えない地味なイメージもあるのも、原因の一つである。」

「召喚魔導師にいたっては、ほとんどレアスキル扱いだ。使い手が少ないから。」

「部隊ごとに、保有できる魔導師のランクの総計が決まっていますよね。私の部隊に余裕があるのは残り絞ってもBランク。万が一に備えて、戦力が多い方がいいんですけど。」

「なるほど。そういうことか。確かに、AAAランク魔導師をBランクまで落としたり、使い物にならねえな。それで、陸うちにきたのか。」

「はい。そうなんです。できれば、召喚魔法が使えると、なおいいんですけど。」

はやての言葉にゲンヤは続けるように言った。それをはやては肯定する。

先ほど説明したように、補助魔導師は他より少ない。それ故、優秀な奴は限られるし、そんな奴らは皆本局が持つていく。陸に居る補助魔導師は、そこまで優秀じゃないと判断された奴らばかりだ。召喚魔導師なんて皆無に近い。

さて、ここで何故はやてが海で人材を募集しないかだが、海にいる補助魔導師は優秀である。故に、部隊に入れるためには魔導師ランクをリミッターで下げてもらわないといけない。そこで問題になるのが消費魔力量の違いだ。

補助魔法の魔力はAAAとBでは大分差がある。なので、AAAの魔法をBの魔力で使用すると、唯でさえ持続発動しないといけないのに、魔力消費が多すぎてあつというまに魔力枯渇してしまう。なので使用魔法を全体的にBランクの魔法までに下げる必要があるんだが、そんなの短期間で慣れるはずがない。なので、はやては優秀ではないが、魔法を使い慣れているであろう陸の補助魔導師を探しにきたのだ。

が、それと見つかるかは別である。

さて、どうしようかといったような雰囲気、二人の間を流れ始める。

そんなとき、失礼しますという声と共に、一人の女性が入ってきた。彼女の名前はギンガ・ナカジマ。ゲンヤの娘で、同じ部隊の人物だ。

「ギンガ！」

「八神二佐！お久しぶりです。」

「お久しぶりて、まだそんなに経ってないやん。」

「そうですか？あ、お茶をどうぞ。」

はやてはギンガを見ると大きな声を上げて驚いた。対するギンガも、まさかはやてに会えると思っていなかったのか、驚いた表情をする。ギンガはそのまま入ってきて、はやてとゲンヤに手に持つお茶を渡す。はやてはギンガの分がないのを見ると、少々受け取るのをためらったが、ギンガに押し付けられて、仕方なく受け取った。受け取ったはやては苦笑い。

そのまま、自分の父の隣にギンガは座り、はやてと話始める。

「ちょっと、いいか？八神、お前さんは用事があったて来たんじゃない

ないのか？」

「あ」

「えっと、お取り込み中でした？それなら」

「おっと、ギンガ。お前さんもここにいろ。丁度いい、話してもらうことがある。」

「え？」

ギンガとあったので話し込み始めるはやてだったが、ゲンヤの割って入ってきた一言で、現実に戻された。自分のやっていたことを考えると、はやては恥ずかしくなり、頬を軽く赤く染めた。

ゲンヤは知っている。女の人があのパターンで話し始めると、軽く30分は会話が続くことを。

ギンガも取り込み中ということを出し、お茶を持ってくるときに使っていたお盆を持ち上げて出て行こうとするが、ゲンヤに引き止められた。止められたギンガには身に覚えがなかったので、困惑する。

「で、だ。お前さんの探している人材は、魔力・魔導師ランクは低め、補助魔導師、出来れば召喚師。実力はそこそこある。でいいんだな？」

「そうです。でも、そんな都合の良い人材なんてなくて」

「いる。俺が知っているのは一人だけだがな。」

「ホンマですか!？」

「あ、そういうことですか。」

聞きに訪れたはやて自身、まさかそんな人材がいるとは思わなかったのか、大声を上げて驚く。

その問いを聞いて、ギンガはようやく自分が残された意味を理解した。

「じゃあ、ギンガ。説明してやってくれ。」

「はい。了解しました。」

「え?ギンガが?」

「私が、その人と知り合いで、何度も模擬戦をしたことがありますから。最近はやってませんけど。」

「なるほど。そういうことやったか。ほんなら、ギンガが適任やな。」

はやての理解も得たところで、ギンガは説明を始めた。

レンヤ・カワカミ三等陸士。

性別男、年齢18歳来年19歳。

魔力ランクA+、魔導師ランク陸戦魔導師Aランク。ランクはつい最近再取得。以前は剥奪、それ以前はCランク。

戦闘スタイルは、複数の形態を使い分ける近接戦闘可能な召喚師。近接戦闘の合間から拘束型召喚魔法により拘束。後に砲撃か収束砲撃を決めるのが主な戦い方。武器は剣で、補助魔法を使った高速戦闘も可能。ガンナーとしての適性も高く、遠・中・近どの距離での戦闘でも対応できる。本人曰く、召喚獣の召喚もできるらしいが、見たことはない。補助魔法も強力。本当の実力は不明、少なくともギンガ以上で、経歴を考えると、AA相当を倒せることになる。

経歴、前犯罪者更生部隊、現陸士203部隊担当は街の警備。

「  
以上です。」

説明を終えた後、沈黙が場を支配する。

最初に口を開いたのははやてだった。

「なんや？この突っ込み所満載の経歴と実力は？」

「あ、あははは。何か理由があるみたいで。詳しくはしりませんけど、良い人でしたよ？」

「犯罪者更生部隊に入れられとった人なのか？」

「はい、今でもたまに会いますよ。荷物持ちさせますし。」

「」

はやては衝撃を受けていた。こんな経歴の人間がほんまに存在してるのか、と。あとついでに荷物持ちをさせているギンガに。

まず経歴、犯罪者更生部隊。この時点で、お前はいったい何やったんだという話だ。この部隊は、よっぽどの異常者じゃないとまず入れられない。

次に、実力。Cランク剥奪ということは、犯罪者更生部隊でAAランク任務を受けていたことになる。Cランクで、AAランクを倒していることになる。本当に何やってるんだ。

最後に階級。魔力A+な上に、最近とはいえ魔導師ランクA。Cランク時点でAA並の実力はある。それなのにミッドの端の部隊で三等陸士。さらに海に引き抜かれていないという謎。お前本当に何なの？

あとついでに同じ年だ。

「と、うちは思うんやけど、ギンガはどう思うっ？」

「ええ！？私ですか!？」

何か語りだしたと思うと、急に自分に会話を振られて驚くギンガ。

まあ、確かに、お前なんなの？って経歴なのは確かなので、ギンガは否定できない。

「まあ、でも、貴重な情報、ありがとうございます。」

「なに、役に立てたならいいんだがな。」

「結局、どうするんですか？」

ギンガははやてにそう問い、はやては立ち上がりながら答えた。

「決めました。機動六課に勧誘します。」

オマケ

「さてと、さっそく勧誘に

」

「あ、八神二佐。」

「なんや？ギンガ。」

「勧誘じゃなくて、権力で引き抜いた方がいいですよ？」

「なんでや？」

「間違いなく逃げられます。間違いなく。」

「  
（知人にここまで言わせるとは どんな子や。）  
」

三人称視点 引き抜きとかされてみる(後書き)

はい、終了です。

現在主人公とはやてに直接的繋がりはありません。なので主人公は六課フラグを立ててないと思ってます(笑)

アンケート結果。

ヒロインアンケート途中経過

はやて 6票

キャラ 5票

ギンガ 4票

シグナム 3票

ヴィヴィオ・ルーテシア・リンディ 2票

スバル・ティアナ・ヴィータ 1票

3人娘強し。キャラ多いなwやっぱり、ギンガに頑張ってもらいたい。

え？リンディさんまさかの2票W？

まだまだ、ヒロイン票は募集しています。

ハーレム人数について。

1<2でした。

メールボックスが結構きてましたね。

1が予想以上に多かったので、上位2・3位のキャラにもフラグを立てます。

召喚獣について

カーバンクル 12

バハムート 7

トンベリ 2

他色々 1票ずつ。

というわけで、召喚獣はカーバンクルにします。いいですね。癒しキ

ヤラ。初期画像はあれでしたが、急に可愛くなりましたもんね。

書き直しはしないことにしました。意外にも気にしない人が多かった。よかった、よかった。ノリの良い人ばかりでw

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。ヒロインはまだ募集中です。そろそろ設定もあげようかと。

番外 休日とか過してみる。(前書き)

今日分投下。

はっ！原作に入ったと思ったか！ヴァカめ！！

ごめん。

いや、原作のどこ書いてみてるけど、進まない。

と、いつても、本当は原作突入直前を書いているんだけどね。

とりあえず、既にできていた分を投下。

それではぶっしょ。

## 番外 休日とか過してみる。

暑い、暑い季節になった。

ここミッドで季節や夏なんて概念はないが、元日本人としてはそう考えてしまう。

人事に襲撃され、今日は休日。

ワーカーホリックではないが 休日でもやることねえ

さて、どうしようか？

魔法少女リリカルなのは *striker*s 始まります。

新暦74年。ただいま真夏真っ盛り。

地球じゃあないので夏になったら聞こえてくる蝉の音が聞こえないのが寂しかったのは遙か昔。というか、そもそもここでは夏というのか？

ムシムシとするような熱気に当てられて、布団を取っ払うようにして目が覚める。

「あぢー」

なんとも締まらない声だな、と自分でも驚くような声を出しながら寝ていた体勢から立ち上がる。

立ち上がった俺は水を求めて、まるで地を這うゾンビのごとく、どこかのうっかり宝石魔術師の寝起きのごとく、台所へ向かう。

「ング　ング　ング　ぶっはー！生き返るわー！」

水分を補給した俺はなんとか正常な思考を取り戻し、先ほどまでの自分の痴態を思い出しながらため息をつく。

にしても

「なんで、エアコンつけてちゃいけないんだよっ！」

我が部隊は相変わらず金欠。節約のために夜は節電中。

真夏は苦痛との戦いの日々だった。

今日の俺は珍しく、普通に休暇の最中である。

いつもなら、どこかしらにレンタルよろしく貸し出されてるわけだが、月日が経って再び休暇は溜まり過ぎ。人事の局員に追い掛け回され、ようやく休みに入ったところだ。

だが、俺は仕事をしていなかった。だって、仕事場エアコン入っていて涼しいんだぞ！？あそこしかクーラー効いてないし！！

「かと言って、仕事場にいくと追いやられるわけだが。」

畜生、人事の奴らめ。嫌がらせメールを大量に送りつけてやる。嘘だけだ。

俺は休日にやるような趣味はない。

いや、ないわけじゃあないんだ。ただ今は品切れしてしまっているだけで。鍛練は早朝に起きて済ませてしまったし、寝ていたのは単なる二度寝だ。

かといって、これ以上寝ようとは思わない。寝すぎはよくないしな。

結局なにが言いたいかというところ

「暇だ。」

物凄く暇なのである。

仕方がないので街に行くことにした。

そこはミッドチルダ首都クラナガン。

お昼時に近いそこでは人で賑わっており、特に争い事もない平和な時間だ。

そんなある日のクラナガンの一角で、事件が起きていた。事件、というよりも、事故であるが。

周りは既に野次馬だらけで、固まってこそいないものの、結構な人数が広がっていた。

発生した事故は、落下事故。お店の二階でもめていた男性2人が、勢い余って柵を乗り越えて落っこちてしまったのだ。

ケガはそこそこ重症。まあ、二階から衝撃を耐える用意をせずに、不安定な体勢で落ちたらそうなるに決まっている。

「うっ

」

地面に落ちたのは2人だったが、1人は着地に成功し、足を痛める程度で済んでいた。だがもう一人は受身すらできず、衝撃をもろに受けて重傷になっている。

「おい、大丈夫なのか？」

「大丈夫だって、通報もしたし、病院につれていただけだって。」

ガヤガヤガヤガヤ

周り野次馬も、流石にうめき声を漏らした男を心配したようで、ざわつき出した。

と、そんな時、1人の少年　いや青年が割って入ってきた。

「はーい、すいません、ちょっと通してください！」

最初は疑問を感じた野次馬だったが、青年が着ている服が陸士部隊のものだったので、皆は素直に通した。

野次馬を掻き分けるようにし割って入ってきた青年は、落下した男の容態を確認する。

「うわあ、こりゃあ酷い。衝撃をモロに喰らってるな？骨折の仕方が酷すぎる。せっかくの休日なのに厄介ごとか。」

「（あれ？休日なのに部隊の服きてるの？）」「

軽く状態を確認した青年はそう呟いた。野次馬は制服に疑問を持たようだが、誰も突っ込まなかった。

「フィジカルヒールじゃ、気休めにもならないし　ウゲ、あれやんないといけないのか！？」

独り言をぶつぶつと呟き、何やら一人で勝手に驚愕した青年。

一人で勝手に納得して、なにやら作業を開始した。

「クポーー！　くるくるぴゅ　　モーグリ！」

「うおっ！デバイス展開するの忘れてた　　」

「（　　）　　何やってんだコイツ？（　　）」

どうやら何かの詠唱だったようだが、何も起こらない。その後青年はデバイスを展開してないことに気づき、落ち込みだす。

その様子を見た野次馬は大丈夫かコイツというような目で青年を見る。

「ちよ、お前ら。そんな痛い子を見るような目で見るな。」

「」

「あぁっ！無言やめて！恥ずかしくなる！」

「」

「う、うわぁーん！！」

無言の空気に堪えられなくなった青年は魔力光を放ち、デバイスを展開した。本当に大丈夫なのか？

「うう　　また詠唱をしなければ　　あれ結構恥ずかしいのに

」

青年はそういうと、両手のブースト型デバイスであろう手袋を軽くあわせた。

周りの野次馬は一步遠ざかる。

「くつ　　！クポー！　くるくるぴゅ〜…モーグリ！」

『Call Summon Moogle!』

青年の足元から召喚魔法陣が現れ、ナニカが飛び出してきた。

「く、クポー！ご主人様召喚が雑クポー！」

魔法陣から出てきた謎の生命体クポリスト（仮）はビュンと勢いよく飛び上がって、呼び出した本人の顔の目の前で抗議する。

ご主人様？

「ちょ、ちょっとタイムそんなことより　　」

「そんなこととは何クポ！モグ達　　」

「だあ！いいからさっさとしろ！モグのおまじない！」

「クポ〜〜！？」

呼び出したモグ（自称）を青年は怒鳴りつけ、抗議を無視して命令する。

命令されることになれているのか、モグ（自称）は広範囲に光を撒き散らした。

「よし、これで取りあえずは大丈夫だろう。 撤収！」

「クポ！？ご主人様待つてクポ〜！？」

光が収まると、青年は男の容態を軽く確認し、周りを確認し、何か言われる前に猛スピードで去っていった。置いていかれたモグ（自称）はご主人様を追いかけるために飛んでいった。

「（いったいなんだったんだ）」「」

残されたのは啞然とした野次馬と怪我人のみ。世にも奇妙なものを見てしまった。

「うわぁ〜！本当可愛いですね！これ、なんて言う生き物なんですか！？」

「 モーグリだ。」

「モグっていうクポ！よろしくクポ！」

「本当にかわいいなあー！」

俺は今、少女と会話していた。

あれからあの現場から逃げ出してきたわけだが。      いや、マジ勘弁。

で、猛スピードで逃げていたんだけど、送還し忘れたモーグリが後ろから引っ付いてくるわけで。たまたま用事でクラナガンに来ていた彼女に見つかったわけだ。

「あのですね！このモグって子、くれませんか？」

「いや、無理だから。」

召喚獣だし。ああ、彼女、つてのはスバルのことだ。ティアナは来てないらしい。

「ううー、ケチだなあ。泣いちゃいますよ？私。」

「それはマジ勘弁してくださいスバルさん。俺が社会的に死ぬ。」

どうしてこうなった。

「で、何かようか？街中で見かけた程度でくつついてくる程仲がよかつた覚えはないんだが。」

「いやだなあ、レンヤさんに無くても私にはありますよ！」

そう言つて俺はきりだした。場所は移動してどこかのカフェ。

最初は嫌がつていたけど、良く考えれば、スバル程の美少女と過ごせるのは、休日としては役得なのではないだろうか？

因みにモグは召喚したままだ。美少女のお願いは断れません。

モグが助けを求めるように見てくるけど、俺は知らない。知らないつたら知らないのだ。別にスバルの胸に頭を埋めているからではない。

「この間はあまりお礼をいえませんでしたから。あの時はありがとうございます！」

「そう思うなら、今すぐその食べているものを吐き出せ。」

「それとこれは別ですって。」

ちくしょう。人が奢りつて言った瞬間沢山注文しやがって。遠慮ねえのな、コイツ。

しかも、あれだぞ、あれ。コイツは俺より自分の階級が高いと知った瞬間遠慮がなくなっただぞ。

いや、まあ、そっちの方が俺としてはやりやすいんだけどね。姉妹でこつも違うものなのか？

「本当は、すぐにお礼が言いたかったんですけど、どこにいるか分かんなかったし、部隊も分かりませんでしたから。」

「何も言わなかったからな。」

「ええ！？気づいててやったんですか！？」

「ああ。」

身を乗り出しながら、ううー！と言ってコツチを睨んでくるスバル。いや、可愛いだけで怖くないんだけどね。

まあ、関わるつもりなかったし。スバルはギンガと関わってる時点でもう誤魔化せないけど。

「ほら、座れ。服に汚れがつくぞ？」

「あ、すいません。」

「まったく、気をつける？」

「えへへへ。」

可愛いなあ。一人寂しく街を回らないでよかったぜ。役得だ。

「なんか、レンヤさんって、厳しそうだけど、優しいですね。」

「そうか？」

「なんか、お兄ちゃんって感じですよ。」

「お兄ちゃんねえ。」

「はい！あ、お兄ちゃんとかレン兄とか呼んでいいですか？」

「レ、レン兄　！？」

思わず聞き返した俺は悪くはないはず。

スバル俺をお兄ちゃんと呼ぶ　ゲンヤさんがそれを知る　お話しよ  
うか？ルートが丸見えだわ！

「却下だ、却下！」

「ええー！。」

「ええーじゃない！ええーじゃ！主に俺の身の安全の為に却下！」

「じゃあ、レン兄で！」

「聞けよ！俺の話！」

「モグもそう思うよね？」

「も、モグに振らないでクポ！」

おい、主人が困ってるんだ。そこは擁護しろよ。

あとスバル、モグをそんなにギューツと抱きしめるな。モグが窒息する。

あ、抜け出してきた。

「ああ！モグどうしてそっちに行っちゃうの！？」

「いや、お前きつく抱きしめすぎだ。モグが死ぬ。」

「ご主人様苦しかったクポ！助けて欲しかったクポ！」

「はい、はい。後で聞いてやるから、一旦帰ってる。」

スバルの両腕から素早く抜け出してきたモグは、俺の顔の前までくる。その後再び抗議はしたが、魔力のラインを切り、送還の魔法陣を展開させ、モグを帰す。

これで、あとでモグのご機嫌取りをしないとイケなくなっただな。

「  
」

「ん？どうした？」

「も、も、もももモグが消えた！？」

「ああ、モグは俺の召喚獣だからな。」

「しよ、召喚獣？」

「そつだ。」

「えええええー！！？レン兄召喚師だったんですか！？」

うおー！？そんなに驚かなくても 召喚師はたしかに稀有だけど、  
そこまで驚くことか？

「も、モグが召喚獣  
」

「ああ、だから諦める。」

「は！？レン兄が召喚し続ければ全ての問題が解決するのでは！？」

「するか、馬鹿。あとレン兄言うな。」

「あう  
」

調子に乗り出したスバルの頭を小突く。

小突かれたスバルは少し仰け反って、元の体勢に戻ると最後の一口であるものを食べ、ニツコリと笑った。

「なんか、いいですね。こういうの。」

「まあ、たまには悪くないな。」

「あれ？レン兄照れちゃってます？」

「」

「うわー！照れてる！可愛いなあ！」

「ほっとけ。」

ちようど思っていたことをスバルに言われた。まあ、認めてやるのはシャクだから流したんだが、凶星を突かれて顔に出ってしまった。

スバルのクセに生意気な　　！

「はあ　　」

「あれ、どうしたんですか？」

「お前　　はあ、敬語。使うのやめろ。少なくともレン兄と呼ぶならな。」

「いいの？」

「言っても聞かなさそうだしな。」

「うん。じゃあ、そうするね。」

なんだか満足気な表情をするスバル。

「こんな子が戦いの最前線に行くのか。そういえば、そろそろ原作開始だな。無印とA・Sは関係なかったけど、strickersはそうもいかねえもんなあ。」

ふと時計を確認すると、かなり時間が過ぎていた。

「ほら、良い子は帰る時間だ。」

「ええ、もうちょっといいでしょ？」

「駄目だ。会計はしといてやるから、ホラ帰った帰った。」

「わあ！？わ、分かったから、押さないで！」

ぐいぐい俺が押してやると、分かった分かったと言って立ち上がり、ご馳走様でしたと言って帰っていった。今回は連絡先を聞かれてしまった。

ちっ、流石に二度目は無いか。

「うげ、高すぎだろ。はあく　スバルの奴め、遠慮ねえくな。」  
会計の値段を見て少し憂鬱になった。いや、ほんと洒落にならん。  
まあ、払えないわけじゃあ、ないけどさ。

少し節約するか。

「そろそろ原作開始か　」

原作まで一年と月日は残されていない。

と、いうことは、スバルはBランク試験を受けるんだろつな。あれ  
？アドバイスとかした方がよかったか？

「　まあ、関係ないか。」

そうそう、strickersも俺は介入するつもりはないし。三人  
娘は　なのはと関係あるけど、大丈夫だよな？うん、そんな仲  
になった覚えはない。

大丈夫、大丈夫。

たぶん。

番外 休日とか過してみる。(後書き)

終了です。

スバルとどうしても妹立ち位置にしたかった。ティアナはなりませ  
ん。

子犬っぽくていいですよね。

これで義妹ルートの可能性も      !まあ、票があったらですけど。

モーグリ召喚。いや、戦闘とかで出そうと思ったんですけど、日常  
の方があってるかなあ〜と。

これから度々出てきます。

誤字あれば、指摘してください。

では、また明日。

12/29 修正

スバス スバル

スバスって誰やねんって突っ込まれましたwいや、俺もそう思う。

異動とかしてみる(前書き)

やあ、皆さん今日もこんばんにちわ。

正月はもう、すぐそこに迫ってるよ。

宿題終わらねえ。

だが、しかし。休みの宿題は最終日に本気出す。だから問題ない。

原作シーンに入りそうで 入らない！

あと1話くらいあるかもw

それではどござ。



??部隊長室で、まさに阿修羅と化した人物と、蛇に睨まれた蛙状態の人物が話し合っていた。

いや、これは話し合っているとは言わないかもしれないが。

「ほ、本日から、カワカミ三等陸士には機動六課に???」「バキッ  
ッ!!!」「ひい!?!」

「もう一度言ってください。」

これは上司と部下の会話である。間違えないように言っておくが、  
ビビっている方が上官だ。

普段の立場は、完全に逆なのだが、今日の部下???レンヤは一味  
違った。玉砕前の特攻部隊ではないが、気迫がすごかった。

「か、カワカミ三等陸士には、本日をもって、機動六課に異動して  
もらいます!?!」



俺の部隊の異動の話が決まったのは、少し前のことだ。

突然部隊長から異動するときの経費と言ってお金を貰って、準備しておけと言われたのだ。どこに所属になるんですか？と聞いても軽くはぐらかされたので、仕方なく準備に取り掛かった。

俺は、思うことになる。なぜあの時もつと問い詰めなかったのかと。

経費、というには少しどころか普通に多かったのは気になったが、それはありがたいと思ひ、準備を開始した。

異動先に荷物を運びやすいように荷物はまとめておけといわれていたので、荷物をまとめて部屋の中央に固めておく。貰った経費はデバイスなり何なりに使用しておけと言われたので、いくつか新しいパーツに取り替えた。

「失礼します。レンヤ・カワカミです。」

「うん。入っていいよ。」

失礼しますと言いながら、もう既に見慣れた光景になっている部隊長室に入った。

部隊長は手元の資料を眺めており、俺が入ってくると、中断して顔を上げた。

「さて、部隊の異動について話そうか。」

「もったいぶらないで早くしてください。」

「まあ、そう慌てないでくれ。僕も時間はあるんだか

「なんか 変ですよ？緊張してます？」

「い、いやだなあ。緊張なんてするわけないじゃないか。」

「」

あれ？そういえばこう 似たようなセリフというか、口調を聞いた事があるような？

そう 確か、犯罪者更生部隊の異動の時に、あの隊長がこんな感じの焦った口調を ?

あれ？ってことはコイツ、なんかバレると都合の悪いことを隠してる？

「 さあ、キリキリ何を隠しているか吐きましようか。」

「か、隠していることが前提かい!？」

「大丈夫、今なら怒りませんから。」

「嘘だ!! デバイスに手をかけてるから!」

俺が詰め寄るたびに面白いほど焦っていく部隊長。なかなか良いものを見れたな。

にしても、隠し事　このタイミングだと、やっぱり異動先か？  
異動先で俺の機嫌が悪くなる場所　まさか

「　異動先が機動課、とか言いませんか？」

「え　　。い、いやあ、まさか。」

「　　おい、なんだその間は。」

「　　え？おい、おい。冗談だろ？俺はアレだけ嫌だと言いつけていたじゃないか。機動課なんて行ってもろくなことがないから、そこだけは断っておけと。」

俺はさらに一步詰め寄り、問いたです。部隊長は壁際に一步退き、俺からジリジリと離れた。あれ？可笑しいな？今の俺は笑顔のはずだけど。

「俺はあれだけ！嫌だと言いましたよね？機動課だけは絶対に！断って下さいと。」

「い、いや。流石の僕も、権力には逆らえ」

「そういうときの部隊長の行動は、どうすべきでしたっけ？まさか！部隊長たる人間が忘れていたとかいいませんか？」

「そ、それは」

さらいズイツと体を近づけて部隊長に聞く。

でも、まあ、喚いてもしょうがない。取りあえず、異動先でも聞いておくか。

「で？何課ですか？」

「六課。」

ブチイイッ

よりもよってそこかあああああああッ！！！！！

で、冒頭に戻ります。

「はあ 何故こうなったし。」

部隊長を取りあえずボコボコにして問いただし終えた俺は、仕方なく、ほんつつつとくに仕方なく、地図を受け取って機動六課の隊舎に向かっていた。

え？局を辞めればよかつただろうって？

ふ、フフフフフフ。それが、あの野郎！！既に俺の所属を六課に移してやがったんだ！！そうなってしまえば辞めるためには六課に申請する必要がある。

大体だ！なにが、もう六課の経費を君消費してるし、問題ないだろう？ だ！お前がくれたのが六課の経費だと知ってたら使つてないわ！

荷物も既に六課にあるし

鬱だ。

「はあ  
」

画面上についている×印のところまでついて、そこにあつたベンチに座り待機。これから起こるできごとに巻き込まれることを考えて  
ふう と溜息を吐いた。

いや、ちょっかいは出していたので、既に関係者なのかもしれないが、自分でちょっかひ出すのと巻き込まれるのでは話が違う。

「お前も、理不尽だと思わないか？カー君。」

「きゅい！」

「まあ、お前に理解できるはずないか。」

「きゅ！？」

心外な！？とでも言いたげな様子カー君。

ああ、カー君つてのは、額に真つ赤なルビーがあるのが特徴のFF  
お馴染みカーバンクルだ。

いや、こいつがもう可愛くて。え？魔力大丈夫なのかって？それな  
ら大丈夫だ。

これは最近気が付いた裏業で、召喚魔法を応用し、本来の力で召喚  
一時的に呼び出し、契約という形をとることで同意の上でその場に  
留めておくことに成功したんだ。普段は契約の影響で弱体化して  
るけどな。

戦闘になると契約のラインを通して本来の力を発揮させるんだ。

「すみません、待ちましたか？」

そんな風にカー君と戯れていると、後ろから声を掛けられる。多分



「え？何、なのはも聞いてなかったのか？」

「え？レンヤ君も聞いてなかったの？私ははやてちゃんが秘密裏に手を回していた子がいるってくらいかなあ。名前は教えられなかったよ。」

二人揃って大慌てして、ようやく落ち着いたところで移動を開始した。歩きでは時間が掛かるので、一旦公共交通機関に乗って、そこから隊舎まで歩きだ。

その道中で、俺はなのはと話す。一度会っただけだったけど、なんか俺ってば臭いセリフ言ってたし、向こうも時期が時期だったし、インパクトもあったから覚えていたんだろう。

今回のことは八神部隊長がやったのか。いつか仕返ししてやる。

「俺はどこかの誰かのせいで気が付いたら書類上、機動六課の所属になってた。」

「は、ははは。はやてちゃんらしいかも。」

「はやてちゃん？」

「あ、機動六課の部隊長のこと。八神はやて、私の親友だよ。」

「ああ、なるほど。つまり俺をこんな目に合わせている真犯人か。親友なら止めてくれ。」

「ごめんね。」

いや、なのはが謝る必要はないだろ。

なんていうか　　なのは、遠慮している感じだな？ 一歩引いてい  
るっていうか　　そんな感じ。まあ、大方罪悪感を感じてるだけだ  
ろうけど。多分。

「ところで、さっきからずっと気になってたんだけど、その生き物  
なんなの？」

「ああ、こいつか？」

俺はそう言いながら、カーバンクルをなのはに見えやすいように、  
肩からなのはの顔の前まで持ってくる。

あ、慌ててたからカー君紹介するの忘れてた。

「きゅー！きゅきゅー！」

「か、可愛い〜〜〜！！レンヤ君、この子なんて生き物なの？」

「カーバンクルだ。カー君って呼んでる。」

「へえ〜！可愛いなあ。よろしくね？カー君！」

「きゅー、きゅー…！」

「あ、ふふふ。くすぐつたいよ！」

カー君は俺の手から離れて、なのはの腕に飛び移り、肩まで登って頬擦りをしだした。

なのはは嫌がる様子を見せず、手で優しく受け止めて、撫で始めた。美人にカーバンクルって、絵になるなあ。

少しの間頬擦りをして、それが終わるとなのはの手から離れ、再び俺の方に飛び戻ってきたので、手で受け止めてカー君の第二ポジションである頭の上に乗つけた。

「着いたよ。ここが機動六課の隊舎。」

「そこそこ長い道のりだったな。交通面では少し不便かも。」

まあ、中央区画の湾岸地区だからな。六課は陸よりヘリでの移動が多いし、ピッタリの場合だな。

隊舎自体は古い建物らしいが、部隊設立にあたっていろいろやっているみたいだな。見た目が結構最近の建物に見える。機材は本局のお下がりらしいが 本局のお下がりはこちらの最新と大して変わるねえだろ。

「それじゃあ、案内。よろしく頼む。」

「あの 私、これでも上司なんだけど」

「いや、ソレがなのはの仕事だろ。何しに来たんだよ。」

「あう！ そうだったね。」

大丈夫か？と、一抹の不安を覚えつつ、俺はなのはと隊舎に入ってしまった。

「それでは、高町一等空尉。よろしくお願いします！」

「了解しました！」

「いや、なのはの方が上官なんだから、了解しました。は、ないだろ。」

「あうう またやっちゃった」

機動六課部隊長室。

そこで、若干後悔している部隊長がいた。八神はやてである。

「はあ　　ちと、早まってもうたか？」

手に持つ資料を見ながら溜息をつく。

手に持つ資料にはレンヤ・カワカミと書かれている。

「　　ホンマ、もうちつとよく確認した方が良かったわ。」

はやての手により、彼はもうこの部隊にくるのは確定しているのだが、経歴に少々問題があった。

「どこかで聞いたことあるような名前かと思つたら　　撃墜事件  
のときの人やつたか。」

彼は撃墜事件の時の人であることを、ちよつと前にはやては知つたのだ。なのはは勿論、はやての守護騎士であるヴィータも罪悪感をもっているだろう。

事件については詳細は隠蔽されていて、分からないのも当たり前だつただろう。実際、彼女自身、なのはとヴィータ達から聞くまでそう思い込んでいた。

犯罪者更生部隊に入った理由を調べたとき、偶然見つけて思い出し

ただ。

「 はあ。」

故に彼女は心配だった。せっかくなつくつた新しい部隊の人間関係がさっそくめちゃくちゃになってしまつのでは、と。

近づいてくる待ち合わせ時間。彼女は良い関係になることを祈るしかなかった。

そんな時だった。外の会話が聞こえてきたのは。一応、サーチャーを飛ばしておく。

「なあ、なのは。」

「なにかな？レンヤ君。部隊長室はもうすぐだよ。」

「なのはは美人だけどさ。」

「び、美人！？私が！？」

「おう。そうなんだけどさ なんて彼氏いないの？」

「そ、それは」

「気になってる人でもいんの？」



はぢては心でそつ叫はずにはいらなかったのだった。

異動とかしてみる（後書き）

今日分投下終了。

カー君の本来の鳴き声ってなんですかね？

どう表現すればいいかわからないから取りあえず「きゅー！」とかそれっぽいのにしましたけど。

知ってる人います？

誤字指摘お願いします。楽しんでいただけたら幸いです。

仕事の説明とかされてみる（前書き）

今日分投下です。

少し遅れました。すいません。

あまり、内容が進んでないなあ。

じ、次回こそは！原作シーンにたどり着きたい！

今回は自己解釈が混じってます。間違いがあったら、指摘してください。速効で修正します。

## 仕事の説明とかされてみる

部隊の異動の通達が来て、異動になることを知った俺。

いざ異動してみると、まさかの機動六課！？しかも所属していることになってるし！

ブツブツ文句をいいながらも、六課に到着し、部隊長室前。

結局なのははサツフィズム（レズビアン）なのか？

魔法少女リリカルなのは *striker*s 始まります。

「失礼します。高町なのはです。」

「入ってええよ。」

なのはが部隊長室にノックをして、声をかける。入っていいのとのことだったので、ドアを開けて入る。

「失礼します」

入っていったなのはに続くように後ろから中に入って、部隊長のいる机の前に並んで立つ。

うおい 部隊長室でかいな。流石新部隊。流石本局所属。陸とは比べ物にならねえ

「レンヤ・カワカミ三等陸士を連れてきました。」

「うん、ご苦労やった、なのはちゃん。ホンマご苦労やった。」

何故二回言ったし。

とりあえず、なのはの方に見ると俺と同じく困惑していた。いや、俺と同じというか、困惑の仕方がちがうな。俺の場合は何で二回言ったか分からず困惑。だけど、なのはの場合は二回言ったかではなく何ではやてがそうになっているか分からないから、といったところか。

「は、はやてちゃん怒ってる?」

「いや、ウチは別に怒ってへんよ?うん。」

「怒ってるよ、絶対。」

「何か言ったか?」

「な、なんでもないよ。」

「そうか。」

なのはの問いに少し怒ったように返事をする八神二佐。

あれは怒ってたのか。いや、流石にここまで分かりやすすくないと初対面の人の感情は読みづらいわ。

「じゃあ、はじめましてやな。ウチは八神はやて。ここ、古代遺物管理部機動六課の部隊長や。階級は二等陸佐。よろしくたのむわ。」

「は！自分はレンヤ・カワカミ三等陸士であります！自分を無理矢理異動させてくれやがった八神二佐！よろしくお願いします！」

「ちょ、レンヤ君！？ちゃんと

「いや、ええよ。なのはちゃん。ウチに非があるし。」

そつだ、そつだ。多少の暴言くらい許すのは当たり前だ！仕事くらい真面目にするけど、こっちは無理矢理連れてこられたんだからな！そこんとこ忘れるな！

「で、自分にはちょっとしてもらわないとあかんことがあるから、フォワード達より早く来てもらったわけやけど。」

「で、何をすれば？　そもそも、自分の仕事は何でしょうか？」

「それを含めて今から説明したる。」

八神二佐が軽く手を振ると、空間モニターがいくつか現れて、あらかじめ設定していたであろうデータを表示する。

「まず、自分にはリミッターを掛けてもらわんといかん。」

「リミッター？というと、部隊の保有制限ですか？」

「その通りや。ウチの部隊は優秀な人が集まってるから、ソレにひかかるんや。」

「自分で引つかかるのは、相当ですね。」

Aランクで制限に引つかかるとか、もうギリギリだろ。普通ならな  
いって。

俺の言葉を聞いた八神二佐は少し苦笑い。両肘を机にのせて顔の前  
で手を組む。

いや、やっぱり美人って、どんなポーズも絵になるね。

「リミットはBランクまでや。デバイスは 掛けんでもええわ。」

「Bランクですか。 流石にソレでデバイスにリミットついたら  
死にますよ?。」

「そら、そつや。」

「Bランクってことは、確かレンヤ君は魔導師ランクは陸戦Aだったから、1ランクダウンになるのかな？」

「魔力量的には1.5ランクダウンや。なのはちゃん。」

「あ、それ違います。最近魔力量はAAになったんですよ。ギリギリだけど、2ランクダウンです。」

「へえ、そうやったんか？」

「はい、そうです。話、進めませんか？」

「あ」

忘れてたんかいっ！どろり、段々話が逸れていてるかと思っただぜ。

俺の言葉に話の趣旨を思い出した八神二佐を軽く咳をして、再び話を始めた。

「ゴホン。で、自分の仕事やったな？」

「はい。」

「自分の仕事は、大してこここのフォワードと変わらん。」

「フォワード、ですか？」

「せやから、フォワードの　なのはちゃんが受け持つ予定のス

ターズ分隊で、フルバックをやってもらおうと思ってる。まあ、フルバック言っても前衛もしてもらうから、名前だけやけどな。」

「別にフルバックにする必要はないのでは？」

「もう一つに分隊　ライトニングにはフルバクの子があるねんけど、スターズにはおらへんのよ。フォワード全体で行動するときには問題あらへんのやけど、分隊別行動の時に困ると思うてな。」

「まあ、いいですけど。」

フルバック　ってことは、俺の前衛としての力より、補助魔導師としての力を必要としてるってことか？もしくは、遠距離射撃。補助は他人にあんまりかけれる機会が無かったから、そんなに得意ではないが　不得意でもないな。

補助魔導師

補助魔導師

キャラカ？

「それと、もう一つ。やってもらいたいことがあるんよ。」

「内容次第ですね。」

「実は　ウチの部隊に召喚師がくる予定でな。」

やっぱり、キャラカ。　ってことは、召喚魔法の教えかキャラカの暴走の二択、もしくは両方だな。

「それで、その子がどうかしましたか？」

「二つうちの資料を見てもろつたら、分かると思う。」

はやての目の前に大きめのディスプレイが現れ、次々とキャラのデータが表示されていく。

俺はそれを流し目で見ていき、キャラの経歴を確認する。

部隊はたらい回し。召喚魔法と補助魔法は優秀だな　ただ、やっぱり駄目なのは竜召喚か。制御は完璧、魔力量も問題なし。　つてことは、原作通り精神面の問題になるな。

「つか、この資料、本局の召喚師に見せたのか？見せれば原因くらい分かると思うんだが。そうすれば、別に解決するのは召喚師じゃなくてもできるし、万が一暴走してもこの部隊の奴らなら止められるだろ。」

「　　召喚魔法は優秀ですが、竜召喚が駄目駄目ですね。」

「せやから、自分には、召喚魔法　特に竜召喚をどうにかしてほしいんや。実際、どのへんがあかんのや？」

「あ、いえ。自分が言ったのは、召喚師として駄目駄目と言ったんです。」

「召喚魔法は優秀やで？」

「　　この資料。本局の　もしくは、他の召喚師に見せました？」

「制御が甘い　　言うてたけど。」

ええ！？　　本局の奴らはとことん駄目だな。これなら、制御面において陸の奴らの方がよさそうだ。

俺はそう思いながら、キャロの駄目なところを説明し始める。

「通常の生物召喚魔法もそうですが、特にこの子の竜召喚のような場合には、魔法生物と強い精神的なラインがあります。」

「精神的ライン？魔力のラインやのうて？」

「はい。魔導師で言えば、使い魔が近いですね。」

「へー。そうなんや。」

一般的にも、その事実は知られている。少し召喚魔法について調べれば出てくる事実だ。

一般的に知られている召喚魔法は、所謂転送魔法を応用した「呼び出す」タイプの魔法のことで、どちらかと言えば、こちらの魔法は精神的ラインは小さい。しかし、それは一般的な召喚魔法の場合だ。この子　　キャロの竜召喚はワケが違う。

彼女の竜召喚魔法の場合、その場にいる竜　　フリードリヒ

を召喚魔法の恩恵により、真の力を発揮させる魔法だ。この魔法の先の魔法との相違点は、その場に存在しているか、存在していないかの違い。そしてもっとも大きな点は、契約により従えているか従

えていないかだ。

前者の召喚魔法の場合、転送し協力してもらおう召喚魔法。相手の意思を曲げずに、簡易的な契約関係。召喚対象を召喚するための資質や召喚獣の意思が重要になる。

後者の召喚魔法の場合、強力な契約の下に真の力を発揮させる召喚魔法。互いの意思が合致していると結べる強力な契約関係。魔力ラインと精神ラインを結び、普段は弱体化させ、必要になれば召喚魔法により真の力を発揮させるタイプ。俺とカーバンクルの関係に近いな。

極端な例で例えれば、友達関係か主従関係かである。

「つまり、ですね。彼女の竜召喚の場合、魔法的な側面ではなく、精神面に問題があるんですよ。」

「せ、精神面？」

「例えるならば、彼女、魔法に対するトラウマとかありませんか？魔法で母を殺されたとか、自分の魔法で誰かを殺してしまったとか、はたまた　　竜召喚そのものにトラウマがあるとか。」

「　　」

俺の言葉に、八神二佐は考えるようにして黙り込んでしまった。隣のなのはも心当たりがあるのか考え込んでいる。

まあ、問題になっていることは分かってるしね。

しばらくの間、沈黙の時間が過ぎていく。

流石にこれ以上は耐えられねえわ。

「長々言っちゃいましたけど、あくまで憶測ですよ？」

「いや、憶測でええわ。ありがとうな。参考になった。」

「同じ召喚師として暴走ばかりでは、流石に召喚獣が可哀相です。彼女の年齢であの強力な力だと、周りが何か言ってるのを鵜呑みにして信じ込んでしまった。ってのが多いですからね。」

その結果魔法に対して不安になったり、恐怖を抱いたりして、最終的に暴走する。

まあ、若い召喚師の典型的な失敗例でもあるな。

「へえ〜召喚魔法って、そういうこともあるんだ。」

「まあ、高町一等空尉と八神二佐には無縁の世界でしょうからね。知らないのも当然ですよ。」

「それで結局、キャラの何が駄目駄目何や？」

はやては俺にそう質問した。

うん　　そうだなあ。何ていうか

「　　そうですね。召喚と補助魔法を同時発動出来て一流。召喚を完璧に出来て二流。ブーストに頼っての召喚は三流。ってのが、自分の考える召喚師です。召喚獣の暴走や自分の召喚獣を怖がるのは論外ですね。」

「　　ってことは、キャラは一流になれるかもってこと？」

「　　自分の言ってることやったら、そういう意味になるけど？」

「　　まあ、そういうことです。彼女は間違いなく一流の素質がありますよ。」

原作で　　とかではなく、鼻肩目なしで見ても、彼女は間違いなく一流の素質がある。

俺？俺は二流止りかな。俺の召喚魔法はやたらと魔力を消費するから。補助魔法と同時発動とか殺す気か！って話になる。

補助系も召喚獣で補えるし。まあ、問題はない　　のか？

「　　で、もう話は終わりですか？」

「　　ん。もう終わりや。あ、デバイス渡してもらってええか？自分のデバイスは特殊みたいやから、コッチで貸し出しが用意出来へんかったんよ。なのはちゃんの訓練に使えるように設定せなあかんし。」

「あ、そういうことでしたら、渡しますね。」

なのはの訓練というと　擬似AMFのことか？

そう考えながら、俺は自分のデバイスを投げ渡した。ゆっくりと軌道を描いたデバイスは八神二佐の手に収まる。

って、俺ってこのあと何すればいいの？

「自分はどうすれば？」

「もう、用事は終了したから自由にしておいて。リミットは、コッチで準備が出来たら連絡する。」

「それなら荷物の整理をしたいんですが」

「ああ、そりゃ。部屋の場合知らなかったな。すっかり忘れとったわ。　なのはちゃん。」

「えっと、それじゃあ、レンヤ君の部屋に案内すればいいのかな？」

「データはレイジングハートに送ったから、よろしくたのむわ。」

八神二佐はそう言ってディスプレイを軽く操作しだし、最後に大きくボタンを押すと、レイジングハートから受信音のような、簡素な音が流れた。

今度はなのはがディスプレイを表示し、軽く場所を確認するような動作をした。

「 うん。これなら大丈夫そう。」

なのははそう呟いた後、八神二佐に引き受けるように言った。

八神二佐は満足そうな顔をした後、手元の資料に視線を落とし、俺たちが来る直前までやっていたであろう書類作業を開始した。

「それじゃあ、レンヤ君。行くよ。」

「失礼しました。」

俺は部屋をでる直前に軽く敬礼し、先に出て行ったなのはの後を追うのだった。

「レンヤ君って、敬語とかちゃんとできるんだね。ちょっと意外かも。」

「お前、俺を馬鹿にしてるだろ!？」

## 仕事の説明とかされてみる（後書き）

終了です。

できれば0時投稿をやってみたかったけど、間に合いそうにないです。

アニメだとしても知識不足になりがち。

やっぱり、マンガとかも買うべきか？

そろそろ、デバイスのフラグを回収。

主人公は最初の訓練のとき混ざりそうですね。脳内では。

指摘あればよろしく願います。

遅刻とかしてみる（前書き）

どうも、明けましておめでとう。

画面の前の皆さん。

投稿に遅れてすみません……

いや、親が神社に行くって言い出してですね。現在進行形で神社に行ってます。

歩きながらの執筆は辛いww

それでは、どうぞ。

## 遅刻とかしてみる

仕事の説明が終わり、リミットも掛け終えて、眠りについた。

疲れていたのかグッスリ寝れて、気持ちのいい目覚めを迎えた。

…そう、そのはずだったんだ。

奴が来るまでは。

魔法少女リリカルなのは *striker*s 始まります。

そう、突然のことだった。奴がやってきたのは。

部屋の整理を終えて、リミットも掛け終えて、一日を終えて眠りについた。

翌日、朝の目覚ましが鳴って、制服に着替えたときのこと。

ガンツ！ガンガンガンツツ！！

「だ、誰だ？こんな朝っぱらから？」

俺はそう思いながらドアまで歩き、鍵を開けてドアを開く。

ガンツツ！

「痛てえええええ！？」

勢い良くドアが開いて、頭をぶつけてしまった。

誰だよ！！こんな乱暴にドアを開けたやつは！？

「誰だ！？ドアに頭をぶつ　　け　　」

「　　」

ドアを開けた人物を見て、俺は段々と声が尻すばみになってしまう。

開けた人は女性だった。メガネをかけている彼女は、まるでジブリ映画の怒りを表現しているキャラのように髪の毛を逆立たせているように見える。

なんかめっちゃ怒ってる？



「いいですか！デバイスってのは繊細なんですよ！！せんさいー！」

「は、はい」

「それを、なんですかッッ！！あの、メチャクチャな回路！！無駄が多いッ！変な干渉起こしてるしッ！！あれでよくデバイスとして起動できたなと逆に關心しましたよー！！」

「いやあ、それほどでm「褒めてません。」」

やあ、皆さん。説教されてます。説教。

あ、因みにこの人、原作にいたシャーリーさんですよ。昨日渡したデバイスの件で怒ってるみたいです。早くしないと集合時間に間に合わないんだけど。

「発想は良かったですけど、あれじゃあ意味ないじゃないですかッ！！性能が全然引き出されてない！！デバイスが可哀想ですよッ！！」

「あの、そろそろ集合時間」

「ああ！？何か言いましたか！？」

「いえ、何でもありません。」

間に合わねえわ。コレ。

新暦75年4月

時空管理局 遺失物対策部隊 機動六課隊舎 部隊長オフィス。

そこで八神はやてはある人物が来るのを待っていた。

「このお部屋も、やっと隊長室らしくなりましたですね？」

はやての隣の小さな机にいる、彼女のユニゾンデバイス  
リインフォース？、通称リインはご機嫌そうだ。よく間違われるが、  
「リインフォース」である。「リイン」ではない。

「ふふ、そやね。リインのデスクも、ちょうどええのが見つかった  
よかったなあ。」

「えへへ、リインにぴったりサイズですうー！」

そんな他愛の無い会話をしていると、誰かが来た合図である「ヴィー  
ー」という音が鳴った。

はやてが、「はい、どうぞ」と言うとドアが開き、「失礼します」と言って二人の女性が入ってきた。彼女達こそ、はやてが待っていた人物である。

「あ、お着替え終了やな？」

「お二人とも素敵です！」

はやては立ち上がり、リインは座ったまま二人  
高町なのはとフェイト・T・ハラオウンに制服が似合っていると賞賛を送った。

なのはは純粋な賞賛に少し照れて、笑い返す。

「三人で同じ制服は、中学校のとき以来やね？なんや、懐かしい。」  
二人に近づきながらはやてはそう言った。彼女の後ろからリインも飛んでついてくる。

「まあ、なのはちゃんは、飛んだり跳ねたりしやすい、教導隊制服でいる時間のほうが、多くなるかもしれへんけど。」

「まあ、事務仕事とか、公式の間ではコッチってことで。」

なのははそう言って、三人で笑い合う。

と、ここで、今まで黙っていたフェイトがきりだした。

「さて、それでは」

フェイトはなのはに目で合図をして、互いに頷き合う。このへんは、流石幼馴染というべきか。

「本日ただいまより、高町なのはは一等空尉」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官。」

「両名とも、機動六課へ出向となります。」

「どうぞ、よろしくお願いします。」

なのはとフェイトはそう言った。

二人の真面目な様子に、はやてとリインは黙って聞き、それが終わると

「はい、よろしくお願いします。」

二人は軽く敬礼した。言い終わると皆で笑い合う。

すると、再び「ヴィー」という音と共に、誰かがやってきた。

はやてが「どうぞ」と言うと、「失礼します」という声がしてドアが開き、一人の男性が入ってくる。

「あ、高町一等空尉！テストアロツサ・ハラオウン執務官！ご無沙汰しています！」

入ってきた男性は二人見ると、知り合いなのかそう言って、敬礼する。

「ん？」「」

「あ」

その男性に覚えがあるけど、はっきり分からないのか、二人はジッと彼を見つめる。その様子に、男性は少したじろいだ。

「ええーつと」

「もしかして、グリフィス君？」

「はい、グリフィス・ローランです。」

確信がないのか、疑問系で尋ねると、男性　　グリフィスは肯定した。

「うわあー久しぶり！っていうか凄い！凄い成長してる！」

「うん、前見たときはこんなにちっちゃかったのに」

「そ、そのせつは 色々お世話になりました。」

前見た時との変わりっぷりに、二人は大興奮。フェイトはこんなと言いながら、自分の胸あたりを手で示している。

「グリフィスも、ここの部隊員？」

「はい。」

「私の副官で、交替部隊の責任者や。」

「運営関係も、いろいろと手伝ってくれてるです!」

フェイトの問いに、グリフィスは肯定し、はやてとリインが説明をした。

交替部隊とは、24時間勤務であるフォワードや彼女達がオフィストのときに、彼女達の仕事を代わりにする部隊のことである。

「お母さん レティ提督はお元気?」

「はい おかげさまで。あっ!報告してもよろしいでしょうか?」

「どうぞ。」

話が段々逸れ始めたところで、報告があつたのを思い出したグリフィスが、話を戻した。

はやてが肯定したので、グリフィスは話し出す。

「フォワード4名をはじめ、機動六課員とスタッフ。全員 ではないですが、揃いました。今は、ロビーに集合 待機させてます。」

「そうか 結構早かったな。 って、フォワード4名？誰が足りひんのや？」

「確か カワカミ三等陸士とシャリオ・フィニーノ一等陸士です」「れ、レンヤ君とシャリー？」

「（あの人は何やとんや ）」「 たった今上がった名前になのはは困惑し、はやては始まって早々遅刻する隊員に頭を抱えた。

「あ、そう言えば、凄い怒った様子のシャリーが、そのカワカミ陸士の名前をブツブツ呟きながらどこかに行っていたようなデバイスがどうか。」

「「ああ」」

フェイトのその言葉に二人は納得した。いつもの病気が発症したの

かと。

「まあ、ほんなら仕方ないわ。なのはちゃん、フェイトちゃん。まずは部隊の皆に挨拶や。」

「「うん!」「」

ここは機動六課の訓練スペース。

湾岸地区の利点を活かして海上に拡張する形で広い訓練スペースを作った場所だ。

女性 高町なのはは、フォワード陣と、遅刻していまだに来ていないシャーリーを待っていた。

「な、なのはさ〜ん!」

そちらを向けば、目的の人物の一人 シャーリーが手を振りながらやってきた。

「シャーリー！」

「はあ　はあ　す、すいません。挨拶に出れなくて。」

「もう　あとで、はやてちゃんに怒られるくらい覚悟してよね？」

「うう」

慌ててやってきた様子のシャーリーは、息切れをしながら謝り、なのはの言葉に少し声を詰まらせた。

シャーリーの息が整ってきたところで、なのはが尋ねた。

「レンヤ君はどうしたの？」

「あ、カワカミ陸士ですか？えっと　まだ準備が終わってないとかで、もう少し遅れてくるとか。」

「デバイスで夢中になったり、怒ったりするのはいいけど、他人に迷惑かけちゃ駄目だよ？」

「　本当、すみません。」

そうなのはは注意して、シャーリーは少し俯いた。流石に今回は反省しているようだ。

そんなことをしていると、フォワード陣が走りながらやってきた。なのははその様子に少し笑みを見せ、訓練を開始することにした。

「完全に遅刻だ　あの野郎！あ、野郎じゃない。尼か。」

そんなことを言いながら、俺は結構な速さで走っていた。

この時間だと　もう挨拶は終わってるだろうから　海上訓  
練スペースかな。

この間受け取ったデータの地図を参考に、猛ダツシユ。

あ、因みにデバイスはとりあえず返ってきました。さすがのシャー  
リー（そう呼べと言われた）も、一日ではどうしようもなかったよ  
うだ。

とりあえず、訓練できるように設定されて返された。

「おっと　あそこか！セットアップ！」

『Stand by ready set up』

魔力光が一瞬俺を包み込み、バリアジャケットが展開される。その後訓練スペースであるシュミレータに一直線に向かうべく、魔力で足場を作り、空を駆けた。

うっへ〜 Bランクの魔力だと、思ったよりも総量から減って  
いくなあ あんまり長時間使用は避けた方がいいか。

そのまま勢い良くなのは達がいるビルに着地する。

「ごめん！遅れた！」

「もう、今回はシャーリーが悪かったって聞いているけど、次は遅れないでね？」

「分かってるって。」

なのはの真横に移動して声を掛けるとそう言われた。

つてか、やっぱり、なのはどこか距離を置いてる感じがするんだが。まあ、いいか。裂けられる 違った。避けられるよりは。

「で、今なにしてんの？」

「私達の仕事上ぶつかることになるガジェットとの戦闘。まずは8体から。」

ガジェット。そう言うなのはの顔が少し申し訳なさそうに見えた。まだ気にしてんのか？

「まだ気にしてるのか？」

「だって！私のせいで、レンヤ君が」

「ああ！自分で言い出してなんだが、この話お終い！俺も気にしてないし、それで終了！」

「」

「気まずい空気が流れる。気まずい、本当に気まずい。」

「え、えっと、お二人は知り合いなんですか？」

「あ、うん。そうだよ。随分前に、1回だけ。」

「見かねたシャーリーが助け舟を出してくれた。」

「さっき暴言吐いてすいません。あなたが女神か。」

「そういえば、なのはあの時お姫様だ」

「わああああ！？言っちゃ駄目！？」

「あ、それ知ってます。あの人カワカミ陸士だったんですね」

「何で知ってるの！？」

「レイジングハートさんの記録に残ってましたよ？」

「ええ！？今すぐ消して！」

「れ、レイジングハート!？」

気まずい雰囲気は一気に吹き飛び、わーわーと騒がしくなる。

レイジングハート 持ち主の意思を無視してまで残したいのか

「ん？あれはスバルと ランスターか？あいつらもここにいるのか？」

「え？レンヤ君はスバルとティアナを知ってるの？」

「ああ、スバルは結構会ってるな ランスターは1・2年くらい前に一度だけ。」

なのはの問いに、俺はそう答えた。

スバルは本当に結構会ってるな。あれからやたらと連絡してくるんだよ。そんなに、たかりたいのか。

「へえ」 カワカミ陸士って、意外に顔が広がったり？」

「まあ、あっちこっち飛び回ってたからな。あとレンヤでいいぞ。」

シャーリーが意外そうにそう言ってきた。　　なんだ？そんなに俺  
って社交性がないように見えるのか？

俺達がそう会話しているうちに、フォワードに動きがあった。

訓練所の一角で炎が上がり、続いてアルケミックチェーンが発動。  
ガジェットがあつという間に3体捕らえられた。　　ってことは、  
AMFを説明済みか？

「ほえ〜」　　召喚って、あんなこともできるんですね。」

「無機物操作と組み合わせてるね。なかなか器用だ。」

「無機物召喚魔法の有効的な使い方だな。単体じゃあ、落とす、投  
げるくらいしか使用用途がないしな。」

ルシエの魔法を見たシャーリーが賞賛の声をあげる。まあ、彼女は  
単純に、召喚魔法を全然見たことがないのだろう。リアクションが  
オーバーすぎる。確かに器用だけだ。

そうこうしていると、今度はランスターが動き出した。

カートリッジを2発消費し、魔力弾を展開する。

「魔力弾？AMFがあるのに？」

『いいえ、通用する方法がありません』

「うん。」

徐々に魔力弾が膜状バリアで包まれていき、多重弾殻射撃を放つ準備をしていく。

「フィールド系防御を突き抜ける、多重弾殻射撃　　AAランク魔導師のスキルなんだけどね。」

「AA!？」

「まあ、大抵のやつらは、そこまで辿り着けずに魔導師として終わるんだが。あの魔力量で、ソレをやるか。魔力制御はなかなかのものだな。」

放たれた魔力弾は、誘導性を持って攻撃し、最後の2体を破壊した。

多重弾殻射撃を成功させるには、結構魔力制御ができないと失敗する。なんせ、構成した魔力弾を膜状のバリアで包み込むからな。

対ガジェットは、コレよりも安易なものをデバイスで自動詠唱して展開するほうが効率的な上、消費魔力も少ないからそっちの法が良い訳だが。

《はい、お疲れ様。じゃあ、一旦集合しようか。》

なのはから念話が放たれ、ちびっ子達とスバル達が強化したであるう身体能力でジャンプしながらコッチのビルに向かってくる。キャロトかは、スバルのウイングロードを使って来てるけど。

「で、なのは。俺はどうすれば？」

「うん。そうだね、とりあえず自己紹介して、その後一回ガジエツトと戦ってもらおうかな。」

「げ！？一人でやんのかよ！？」

「当たり前でしょ。一応先輩なんだから、甘いこといわないの。」

「まあ、あの程度ならべつにいいか。」

「何いつてるの？もちろんレベルは上げるからね？」

帰っていいですか？

オマケ

「ん？誰か高町たちのところに飛んでいつてるな？」

「」

「あれが、最後のフォワードか？」

「」

「おい、ヴィータ。大丈夫か？顔色が悪いぞ。」

「いや、なんでもねえ。大丈夫だ。」

「まさか、昨日台所にあったシャマル特製のご飯を普通のご飯と間違  
つて」

「ちげえーよ！！いくらなんでも私がそんなミスするかっ！」

遅刻とかしてみる（後書き）

今日分投稿です

いや、本当に歩きながらは辛いです。ついでに手も寒い。

とりあえず、原作に突入させました。

デバイス詳細はもう少しかかりそう。

やっとまともに原作に絡めたぜ。

それでは、また明日。

今年もよろしくお願いします

実力とか見せてみる 前編（前書き）

今日分投下です。

すいません めっちゃ遅れました

親戚の家に行つて、パソコンにろくに触れなかったんですよ。

帰ってきて今頃執筆。本当、遅れてすいません。

長くなりそうなので、前編後編に分けることにしました。

## 実力とか見せてみる 前編

挨拶に遅刻して、デバイスで怒られた初日。

本当にやっていけるかと不安になってしまった。

訓練スペースに行くと、さっそくやっていた。

一旦中止して、集合をかけたなのは。

さっそくやってみてくれと言ってるが

ほんとに俺だけでやんの？

魔法少女リリカルなのは *s t r i k e r s* 始まります。

ビルを飛び移ったり、ウイングロードを使って近づいてくるフォワード陣。

段々と距離が近づいてきて、互いの顔がハッキリと確認できるようになった時、俺には見えた。

満面の笑みと共に、足のローラーの回転速度を上げる、スバルの姿が。

空気を切り裂くような音を出しながら、ウイングロードが一直線にこちらに伸びてきた。

まずい、このパターンは非常にマズイ。

「あれ、スバルどうしたのかな？」

なのはが横でなにか呟いたが、今はそれどころじゃない。

観戦のため、一度解除していたデバイスを再び展開させ、衝撃緩和の魔法の展開を指示する。いきなりデバイスを展開したのに驚いたのか、なのはの声がまた聞こえたが、これも無視。本当にそれどころじゃない。

スピードを全く緩める素振りもせず、更に加速して突き進んでくるスバル。

「レン兄~~~~ッ!!」

「させるかぁッ!」

あらかじめ展開していた衝撃緩和魔法がスバルを受け止め、停止さ

せた。そのとき多少慣性の力が働いただろうが、それは自業自得だ。俺とスバルの様子を見た他の奴らが多少唾然としている。

「うう〜。レン兄酷いよ。普通に抱きとめてくれてもいいでしょ!？」

「お、お前、酷いと言いたいのはコツチだ!!あんなに勢いつけやがって、殺す気か!？」

「そこで受け止めるのがお兄ちゃんの役目でしょ!!」

「そんなモノはドブにでも捨てなさい。」

周りの反応を無視して会話をしだす俺達。

少し遅れてフォワード達がやってきて、状況を把握できてないみたいだ。

シャーリーとなのはは未だに唾然としている。

「んだよ?そんな顔して。」

「ねえ、なんでレン兄がここにいるの!？」

「あなたは少し黙ってようか。」

久しぶり　と言っても、一週間程度だが、に会って若干興奮気味

のスバルを引き離し、軽くスルーする。

結構会っていたといっても、最近はあんまり会えなかったしな。

にしても、スバルは相変わらずスキンシップに遠慮がない。いろいろ理由があるのだろうが、スバルにとって駄目なスキンシップのハードルが高いせいだ。

「お  
」

「「「「お？」「」「」

シャーリーとなのはが僅かに声をだし、俺達スバル除く4人は、思わず聞き返した。

「「お兄ちゃん！？」

「「「ええ！？」「」

「あゝ　そのことか。」

なのは達のお兄ちゃん発言に驚いたフォワード陣は、こちらとスバルを交互に見て驚きの声をあげる。

なのは達の驚きように納得いった俺は、説明することにした。まあ、知り合いとしか言っていなかったからな。

「お兄ちゃんって、全然似てないよ!？」

「そりゃ、実際の兄妹じゃないからな。」

なのはの驚く声に、俺はそう答えた。ついでに、勝手にスバルがそう呼んでるだけだ。と付け加える。

なんでか知らないけど、めちゃくちゃ懐かれてるし。訂正するのも、あの時諦めたし。　　というかランスタ。お前は初対面の時会ってただろうが。ってことは、別のことに驚いたのか？

俺の言ったことで納得したような表情をしたなのは達。最初は事情を理解できてなかった、他のフォワードも、状況を理解したようだ。

「で、レン兄がなんでここにいるの?」

陸上警備隊には縁のない場所だけど、とスバルは続けた。

それを聞いて、逸れ始めていたやることを思い出し、なのはに視線を送った。

「あ、そうだね。自己紹介してもらおうか。」

俺の意思を汲み取ったなのはがそう言った。

それに続くように、俺も自己紹介を始める。

「レンヤ・カワカミ三等陸士だ。年齢は19歳だ。所属はスターズ分隊のフルバックになる。まあ、フルバックといっても、前衛もバリバリやってもらうから名前だけと部隊長に言われたが。階級はお前らの方が上だろうし、好きに呼んでくれ。よろしく頼む。」

「 という訳で、最後のフォワードだよ。皆、仲良くしてね? 」

俺が軽く自己紹介した後、なのはがそう言って、フォワードの皆が声を揃えて「はい」と言った。

何か質問ある? となのはが尋ねると、ランスターが手をあげた。指名されると、話だす。

「 えっと カワカミ陸士はフォワードなら、何で朝居なかったんですか? 」

当たり前前の質問である。 まあ、予想していたので問題はない。

ほとんどをシャーリーのせいにするだけだけど。 事実だしね。

「 朝居なかったのは、どっかの誰かが、時間を無視して理不尽な説教を俺にしていたからだ。あと、レンヤでいいぞ 」

そう言いながら、シャーリーをジト目で見ると、目を逸らされた。

その様子で少し察したらしい。 続けて質問はしなかった。

「さて、それじゃあレンヤ君にはさっそくやってもらおうか。」

本当にやんの？

なのはから指示を受けてビルから降りると、そこで待機と指示がきた。

《それじゃあ、始めようか。》

再び少し待つと、なのはから念話があった。準備ができたのだろう。

目の前に魔法陣が出現し、原作のようにガジェット？型が沸いて出てくる。数は少し多い10機だ。舐めてるのか？

あらかじめ展開していたデバイスの剣を構える。

その敵意に反応したように、ガジェットの目のようなセンサーが光った。

「うおっ！？マジかよ！？」

数を少し増やしただけだと思っていた俺は、まさか攻撃してくるとは思わなくて、少し反応が遅れて回避する。

「ちよつと、まてまて！？」

少々慌ててしまったが、体勢を整える。

1 2 3と、時間差で攻撃してくるガジェットの攻撃を回避しながら、どうやって倒すか思考する。

一気に倒してもいいんだが……あくまでこれは、俺にできることを確認するための戦闘だしな……下級の精霊を数呼び出して一撃ってわけにはいかねえだろ。

そんなことを考えている間も回避を続ける。ガジェット？型の攻撃は実に回避しやすい。

誘導性もあるわけじゃないし、何より発射前の予備動作が分かりやすい。攻撃方法も規則的で機械的。いくら数や速さがあるとしても、当たる訳がない。

それをガジェットは学習したのか、はたまたまなのはが攻撃パターンを変更したからなのか、5機が一斉に攻撃してきた。周囲を囲むようにしてからの包囲攻撃。

俺はその場で軽くジャンプして回避行動をとった。

「よっど。」

さらに空中にいることをいいことに、残りの5機が一気に攻撃をかけてきたので、一瞬足場を構築し、空中でもう一段ジャンプをする。

「せやあッ!」

『ブリツツラツシュ』

デバイスの機械音と共に、俺の武器が加速されAMFで魔法は解けるが、その速度を維持したままガジェットを叩き破壊する。

もう片方の隣にいたガジェットも同様の攻撃をして破壊。ねらって着地した地点にいた2機の破壊を成功すると、すぐに近くの敵に攻撃を繰り出していった。

私、ティアナ・ランスターは、今やっている男の戦闘に、素直に凄  
いと思った。

「やっぱり、ガジェット10機じゃ、すぐやられちゃうか?。」

「ええ!? レンヤさん(そう呼べと言われた)ってそんなに凄いな  
ですか?。」

なのはさんの言葉に、私は驚いた。

レンヤさんのデータを見せてもらったが、隊長達みたいに凄い魔力  
があるわけではなかった。魔導師ランクはA。魔力量はAA相当。  
しかも、今現在はBランクまで落としている。今現在の私達と、あ  
まり変わらない魔力量だ。

それなのに、なのはさんは10機がすぐ壊されると言う。

「うん、そうだね。レンヤ君は、魔力量を技術で補っているからね。」

「技術、ですか?。」

さっそく2機が破壊されるのを見ながら、なのはさんの言葉にも耳  
を傾ける。

「特に凄いのは、魔力制御と収束技術かな。多分六課で探しても、

レンヤ君以上に魔力制御ができる人はいないね。収束砲は、私の方が威力は高いだろうけど、収束量は負けちゃうかな。」

六課で一番。その事実には驚きながら、データを確認してみると、確かに事実だった。確かに、昔助けてもらった時の幻術は凄かった。あれだけの幻術は相当魔力が完璧に制御されてないといけない。同じ幻術を使う人として、それはよく理解できた。

そして疑問に思うことがある。それは

「あ、あの。戦闘スタイルのオールラウンドってどういうことですか？最高射程距離も500m以上って」

私の疑問を口にするように、キャロが言ってくれた。

見たところデバイスは剣だ。自己紹介のときも、戦闘中も全く喋ってなかったし、以前あったときも喋ってなかったたのでおそらくアームデバイス。ストレージ、という考えもあるけど、武器形状をしているのは大体アームだ。形態が変化するデバイスは高いし、三等陸士の給料では買えるような値段ではないのだ。

今日はメカニックデザイナーのシャリーさんにデバイス関係で怒られて遅刻したと言っていた。高度なデバイスを自分で組み立てたという線もないだろう。

つまり、形状は剣のみだと思われる。それなのに、あの魔力量で射程が500m以上？そんな魔法を使えるとは思えない。だからこそ、疑問だった。

「あ、それはデバイスがちょっと、特殊なんですよ。見てたら分かると思います。」

キャラの言葉に答えたのは意外にもシャーリーさんだった。何か思いあたるようなことがあったのだろうか。

『特殊』

その言葉が、私の耳に深く響いた。

あの人も特殊なのか。

意識をレンヤさんに向けると、凄まじい回避の能力を見せながらガジェットに近づくレンヤさんがいた。

空中に足場があるようにもう一度ジャンプしたりして、一気に距離を詰めてまた1機破壊した。これで残りは5機。目を離している間に破壊したのだろうか。

シャーリーさんがなにやらボードに打ち込むと、ガジェットは拡散して、離れた距離から攻撃しだした。

「モードチェンジ ブースト」

『Mode change boost』

サーチャーを通して、レンヤさんのそう言った声が聞こえてきた。魔力光が光って、先ほどまでの剣がどこかにいき、変わりに手袋型のデバイスに変わっていた。

「ええ！？どういうこと！？」

隣でスバルが大きな声を上げた。その気持ちは分かる。

さっきの変化は、ハッキリ言うと、ありえない。形態変化とはワケが違う。武器形状のアームもしくはインテリジェントが、全く別の形のブーストデバイスに変わったのだ。

たとえば、杖状の魔法補助から一撃必殺の砲撃形態や遠距離射撃形態に変わるデバイスはよくある話だ。だけど、剣状のアームから手袋のブーストに変わるのは全く違う。デバイスの種類がまるつきり変わっているのだ。

「これが、彼のデバイスが特殊な理由。複数のデバイスをリンクさせて1つのデバイスとしているの。名前をつけるなら、複数機能多同期型デバイス、マルチフォームリンクデバイスってところですかね。」

「そ、そんなことができるんですか？」

「理論上は可能だけど、それに必要なのは高等AIと本人の高いマルチタスク技術だね。AIは拾ってきたデバイスのを使ってるって言うってたよ。そんなAIごろごろ落ちてないと思うけどな。」

あ。」

高等AI（拾ってきた？）と、マルチタスク技術？

AIは分かるけど、マルチタスク技術も必要なの？

「マルチタスク技術も必要なんですか？」

私は疑問を抑えられなくてそう聞いた。

「デバイスって、バリアジャケットを展開するとき魔力を流す必要があるでしょ？」

それは当たり前だ。バリアジャケットはフィールド系の防御魔法。魔力が必要に決まっている。それがどう関係しているのだろうか。

「私達はリンクなんてしてないから関係ないけど、彼の場合は複数4つもリンクしているからね。それを1つのデバイスとして起動するために、少なくとも4つのデバイスコアに別々に、それでいて同時に魔力を流さなきゃ起動できないの。」

「それってつまりマルチタスクが最低でも4つあるってことですか！？」

「そういうことになるね。」

4つのマルチタスク。これはかなり優秀だ。2つは普通、3つはそ

「こそこ、4つになると優秀、5つは天才レベルだ。マルチタスクは別々に思考するということ。4つにもなると、かなり優秀なのである。」

「彼に再び意識を向けると、バリアで逃げつつ詠唱か何かをしていたのだらう。手から魔法陣が展開　　ってえ？」

「しよ、召喚魔法の魔法陣!？」

「あ、そういえばレン兄召喚魔導師だったね。」

「今度は召喚魔法。レアスキル。　　結局凡人は私だけか。」

「なにが召喚されるかと思って見ていると、展開されたのは炎だった炎?」

「へえ、召喚魔法って、炎も召喚できるんだ。」

「なにやらスバルがあんなことを言っているが、本当だろうか？」

「キャラ、召喚魔法ってああいうこともできるの?」

「えっと　　無機物とかは召喚できますけど、炎は現象なのでちょっと」

なのはさんの問いにキャラ口はそう答えた。

あの人

レンヤさんはおかしいことだらけだ。

いろいろな意味で。

## 実力とか見せてみる 前編（後書き）

遅れて投稿、申し訳ありませんでした。

明日も遅れるかも

主人公、なんか凄いいまいに書かれてますが、超強いつてわけじゃないです。魔力制御と収束技術は凄いですけど。

なのはと正面から打ち合ったら負けますし。ただし、経験と技術（一部）が凄いので、戦えばリミッターついてるなのはとかなら倒せます。リミットブレイクした状態だと、魔力吸収のレアスキルなしじゃ確実に負けます。召喚魔法も、普段は魔力が足りなくて強力な召喚はできないし。

確実に勝つ方法は、魔力吸収から限界突破でSランク以上の召喚獣召喚ですね。Sランク召喚獣は化け物ばかりなんで（笑）ただし主人公は反動があるんであまり使いません。

マルチタスクの設定ですが、完全に妄想設定です。striker s だけなら、あんな設定でも問題ないかなと思って。

因みに主人公のマルチタスクは7個です。ハッキリ言って異常。常に生死の境で、あっちもこっちもと複数同時思考を繰り返してたらそうになりました。成長期だったこともあり、それが可能だったとい

う設定。むしろ成長期だったからこそできた。

納得できない方はもう神様パワーに丸投げ（え

あ、そういえば、さっきテレビ欄見てたんですけど、BSテレビが  
しらないけど、リリカルなのは *striker* がアニメで始ま  
りますね。また。

若干興奮しながら録画予約をしました。テレビ変わってビデオテ  
ープ使っていないからねえ ありがとう。

実力とか見せてみる 後編（前書き）

どうも、今日分投下です。

予想通り、遅くなりました。

アンケートは終了とさせていただきます。

今回メツチャggdggdかも

読む方は注意してください。

原作に入った途端、話があまり進まなくなった

これが国語力の 文章力の差なのか

まあ、この物語は取り敢えず完結！を目標に作られたやつなんで、あまり期待しないでくださいね。

## 実力とか見せてみる 後編

「いけっ！」

俺のその合図とともに、精霊魔法によって顕現した炎の攻撃は、一直線にガジェットに突き進む。

が、所詮は誘導性のない火炎弾。2機を破壊した後、残りの奴らには避けられた。

「モードチェンジ ガンモード。」

『Mode change Gun』

魔力光が一瞬光り、ブーストは異空間に収納され、代わりにワンハンドの銃が展開される。

飛んでくる攻撃を魔力弾で相殺しながら軽く離れて、魔法を展開する。多重弾殻射撃をやるつもりだ。カートリッジの補助はいらさない。完璧に魔力弾と膜状バリアを制御できてれば、理論上は必要ないのだ。原作のアレは、確実に余分な魔力を使っていると考えていい。

魔力弾を構成し、その上をさらに膜状バリアで包み込む。魔力制御が得意は俺にはこの作業は造作もないことだ。数瞬の後、構成に成功した。

ためらいもなく一気に引き金を引き、誘導性をつけた上で射撃して2機を破壊。残りは1機だが、まあ遠距離射撃を見せるだけなら1機でも大丈夫だろう。

《シャリー、最後の1機を俺から引き離して。遠距離射撃をする。》

《は〜い。分かりました〜。》

シャリーから念話ですぐに返事が返ってきて、じっと待つ。

プログラムが書き換えられたせいで、残りの1機はかなりの速度で逃走を開始する。

「ライフル モード」

『Mode change rifle』

手短に指示を出し、ワンハンドの銃を異空間に収納し、ライフルを取りだす。

空中に足場を作ってもいいが 幸い、ここには足場となるビルがいくつもある。それを使わない手はないだろう。

ターン、ターン、ターンと滞空時間の長いジャンプを繰り返して、すぐにビルの上に着地する。射撃のタイミングは まあ、見晴らしのいいところに出たらいいか。他の奴らが見えなかつたら意味

ないしな。

ここ訓練シュミレータの広さは広いが、俺の射程範囲だろう。

あらかじめつけておいたマーカーを確認して、ガジェットの現在地を確認する。結構離れたな。

え？マーカー卑怯？何を言う これも戦略のうちだ！

スコープを調整して、ガジェットの位置を確認する。確実に当たるように速度系の方がいいか。

「魔力圧縮開始。」

俺の声と共に魔法陣が展開されて、狙いを定める。カートリッジは別にいいか。今回重要なのは、圧縮した魔力にさらに膜状バリアを展開すること。圧縮しているから大丈夫だと思うが まあ、念には念をいれて。

動局的に必ず当たるようにライフルを調整し、発射直前まで魔力弾を構成し、術式を書き加えていく。

「ショット」

『Sonic shooter』

術式によって超加速された魔力弾は、魔力の残像を残しながら吸い込まれるようにガジェットを射撃して爆破させる。

10機全部撃破完了っと。

さて、どうしようか

《レンヤ君？ちょっと、聞きたいことがあるから、一旦集合しようか。》

ポーツと立っていると、なのはからそう念話が届いてきて、なのは達のいるであろう方向を向く。

あんなに手を振って、スバルは元気だなあ

了解と念話で返して、足場を作りジャンプを繰り返してなのはたちのいるところに向かった。

さて、突然ですが皆さん。

先ほどまで訓練スペースにいた俺ですが、今は椅子に座ってデスクとその上の紙と向き合ってます。なんででしょうか？

まあ、理由は単純なんだけどね。

他のフォワードと一緒に訓練するレベルを俺が超えているだけだつて。フォワードが一定レベルを超えたら連携の訓練に入るってなのはが言ってた。

というわけで、さっそく何もすることがなくなってしまった俺は、事務仕事行きになったのさ。そこ、はぶられたとか言うんじゃないッ！

あ、そうそう。あの後召喚魔法について色々聞かれた。

できるだけ分かりやすく伝えたのだが　この世界には精霊という概念がないからなあ。いや、次元世界にはあるんだ。だけど、ミッドにはないから、理解されたかどうか怪しい　。

正直な話、精霊の召喚は感覚的にやっている。次元世界のどこかにいるのかもしれないが、特定はハッキリ言って不可能だ。次元世界多すぎるし。

だから、キャラに教えられるか？と聞かれたとき、無理と答えた。代わりに、電子精霊の使役なら教えられると言っただけ。お前、あの歳の女の子に事務仕事で苦労させるとか鬼だろ。

で、話を戻すけど、さつきも説明したが、今現在俺は事務仕事 중이다。他のフォワード達は、とうぶんの間訓練漬けになるみたいだから、事務仕事には参加できない。

まあ、なにが言いたいかというと、何で俺ってば皆の分の事務仕事までやらなきゃいけないの？

いや、前の部隊にいたときほど量が多くないから別にいいんだ。いいんだけど

俺、フォワード所属だからね？事務員じゃないからな？

軽く愚痴りたいような気分になんか落ちながらも、俺は黙々と作業を続けていく。

ここって、居辛いなだよ。

朝の挨拶に顔を出してなかったから、お前誰？みたいな感じだし、俺がフォワードと知ってる人も他のフォワードは訓練してる時間帯だから、何してんの？って目で見られるから。

さっさと終わらせて、部屋で留守番しているカー君と戯れたい

あ、なのはに報告しなきゃいけないから、どのみち遅くなる

後々知ったのだが、最初は訓練漬けになることが分かっていたので、フォワードの分の事務仕事はないのだが、最初は俺は訓練に混ざらないことを予想していた部隊長様様が、事務仕事を用意してくれやがったらしい。余計な事をッ！

「レンヤ君どう？終わり

って、キヤア!？」

「あ  
」

事務仕事を終わらせて、流石に時間が有り余りすぎたので一旦部屋に戻ってカー君を連れてきて待っていると、なのはがやってきた。

今まで俺と戯れていたカー君は、見知ったのはを見たからなのか、俺の腕を通っていき、肩からピョンとジャンプしてなのはに飛び移った。

いきなりでてきたカー君に驚いて軽い悲鳴をあげたのはだったが、倒れるまではせず、バランスを整えるとカー君と会話しただした。といっても、一方的に話しかけてるだけだが。

「な、なのは。大丈夫だった？」

「うん。大丈夫だよ。」

「ん？」

俺の耳が捉えたのは心配するような声だった。  
かで聞いたことあるような？ないような

はて、どこ

そちらを振り向くと、金髪の女性が立っていた。かなり美人である。  
美人である。大事なことなので2回言いました。

「どちらさまでしょうか？」

目が合って10秒くらいジーンと見つめあった後、耐えられなくな  
った俺がそう言った。

「えーっと カワカミ君 でいいのかな？」

「そうですけど」

何を思ったのか、金髪美人は俺の名前を聞いてきた。

いや、自分はあなたの名前を聞いたんだが。 まあ、だいたい  
予想はついてるけどね。

「えっと、この人はフェイトちゃん。本名はフェイト・T・ハラオウンで、この部隊のエリオヤキャロがいるライトニング隊の隊長だよ。本職は執務官。」

それを見かねたのか、なのはが代わりに紹介してくれた。

「私のことは、フェイトでいいよ。できれば、敬語もなしでいいかな。」

「それじゃあ、遠慮なく。俺のこともレンヤでいい。」

「レンヤは随分簡単に敬語をやめるんだね？他の人たちは中々やめてくれないのに。」

「最近学んできたんだよ。俺に拒否権が無いってことをね。」

俺はそう言った後、なのは達の関係者は大抵敬語で話されるのを嫌ってるみたいだ、と付け加えた。その言葉にフェイトは少し苦笑いをした。

「で、なのは。なんの用だ？」

「事務仕事終わりそうかな、って思って。もう夜遅いし。」

「ん？事務仕事なら大分前に全部終わったけど」

「ぜ、全部？ひょっとして、ここに置いてあったのと、そのオーダーの中身全部のこと？」

「そうだけど」

俺がそう返答すると、なのはが若干頬を引きつらせた。

え？なに？なんかまずった？

「あれ、5日分のフォワードの事務仕事なんだけど」

「え？」

俺とフェイトが同時に声を発した。

つまり、なんだ？ちょっと多いんじゃないかな？と思いながらやっていたアレは、5日で終わらせればよかったと？

「書類の上に、5日分って書置き見なかったの？」

「いや、そんなのなかったけど」

「え？そんなはずないんだけどなあ」

なのははそう言って、最初書類の山が置いてあったあたりのところを探し始める。

そんなことをしていると、フェイトがなにか思い出したように話し出した。

「なのは、それって今日の朝書いてたやつでしょ？」

「そうだけど、フェイトちゃんどうして知ってるの？」

「それ、机に置いたままだったけど」

「つまりだ、俺が間違って5日分をやっていたのは、なのはのせいだ。」

「い、いめんなさいっ！」

「いや、まあいいんだけどね。」

別にそこまで苦労しなかったから、謝られるほどじゃないんだが。

「で、事務仕事のことは置いて、俺って明日からなにすればいいんだ？」

「」

おい、目を逸らすな。二人とも。なんか、訓練のことも合わせたら、邪魔者だからはぶられたみたいで悲しくなる

まあ、自己鍛練でもすればいいか。

「あ、そういえば、デバイスのことでシャーリーが呼んでたよ？」

今思い出したといった様子でなのはが言った。

そういえば、デバイスのことはまだ解決してなかったな。じゃあ、明日はデバイス渡しにいかないとな。

「レンヤはご飯食べたの？食べてないなら、これから食堂に行こうとしてただけだ。一緒にどう？」

「フェイト。お前って、よく初対面の異性を食事に誘えるな。」

「え、名前で呼び合ったら友達ってなのはが言ってたよ。友達って、

そういうものだよね？」

「　　そうだけど。」

純粹な笑みを俺に向けてくるフェイト。　　現代でここまで純粹に育ってこれたやつは、フェイト以外にいるのだろうか。

それに比べて

《なのは　　お前はなにをフェイトに吹き込んだんだ　　。あの笑みの犠牲者になった男性局員が何人いると思ってる　　》

《　　》

おい、目を逸らすな。こうなるとは思わなかったみたいなお表情をするんじゃない。

「ま、それは置いといて、さっさと飯食いに行こうか。」

そう言いながら立ち上がって、なのは達の隣に立つ。

「食堂への行き方ってしってるか？俺はまだ把握できてないから、案内して欲しいんだが。」

「あ、それなら大丈夫。大体把握してるから。」

そう言って進みだす彼女達に俺はついて行くのだった。

オマケ

「ねえ、さっきから気になってたんだけど、なのはの肩にいる生き物って　なに？」

「「あ」「

オマケ2

「なあ、フエイトの名前にハラウンってあるけど、やっぱりリンディ提督と関係あんの？」

「え、レンヤ君って、リンディさんと知り合いなの？」

「私の母さんだよ。義理の　って頭につくけど。」

「1回だけ会ったことがある。　で、だ。前々から思ってたんだけど、あの人が何歳なの？見た目がアレだから全然予想がつかないん

だが。」

「」

「」

オマケ3

「うわっ！なんや、この確認する書類の数！」

「は、ハンコを押すものばかりですう　はやてちゃん。頑張ってください！」

「む、無理無理！だ、誰かー！　あ、シグナムちようどええとこに！手伝って！」

「（　　来なければよかったか。）」

実力とか見せてみる 後編（後書き）

終了です。

やっぱり、知識が乏しいって厄介ですね。物語を書く上で。

超展開です。あいかわらず。

フェイトを主人公と知り合わせたかった。その結果がこれだよ！

あの展開は大丈夫なのだろうか。まあ、駄目でも、よっぽどな理由じゃない限り、二次創作だからで終わりそうだが、それは違う気がする。

アニメの知識だと、やっぱり駄目ですね。

違っているとこがあれば、指摘してください。

あ、それとですね。前書きで書いたように、アンケートは終了とさせていただきます。

集計してますので、結果をお待ちください。

訓練とかしてみる(前書き)

どうも、完成したので投下です。

完璧に遅れました。すいません。

いや、投稿したと思ってたんですよ。確認したらしそこな  
てました。

1/5日の投稿はこれともう一つになります。  
すいません。

## 訓練とかしてみる

機動六課での初日は無事(?)に終わった。

訓練をはぶかれたり、書類も全部終わらせてしまったり

さっそくやることがなくなってしまった。

そこ！ニートとか言つな！働いてるよ！働いてないけど！

魔法少女リリカルなのは s t r i k e r s 始まります。

あれから数日が経った。

いつものように朝起きて、制服に着替えてから外にでる。

機動六課に男性はいるのだが、自分の所属しているフォワード及びその関係者は殆ど女性である。

そこ、今羨ましいとか思っただろう。冗談抜きでこれは死ぬ。同じ数少ない男として、エリオとは結構仲良くやっている。年齢差はあるけどな。

俺の起床時間は早い。

何故早いかというと、食堂で朝食を食べるとき、周りが女性だらけになりたくないからだ。

だが、食事も機械が作っているわけではないので、必然的に始まる時間というものがある。その時間に合わせて俺は行っているのだが、勿論そんなことを考えているのは俺だけではないわけで。

「あ、レンヤ。随分早いんだね？」

「はあ」

「ええ！？私何かした!？」

食堂の前で開始を待っていると、後ろから話しかけられた。

振り向くとそこに居たのは、予想通りフェイト。昨日なのはから聞いたばかりなのだが、フェイトはあっちこっちに仕事で行って回る人が多いので、早く起きて朝食だけ食べて出て行くことがあるという。

つまり、だ。この誰も居ない食堂でフェイトと二人きりになるかもしれない。ということだ。

おい、なのは。たまにじゃなかったのか。たまに、じゃ。

「まあ、いいか。で、仕事か？フェイト。」

「うん。今日はちょっと遠くまで行かないといけないから。」

「そっか。それで朝早いのか。」

そう言っていると食堂が開いたので、中に入っていく。別々に食べてもいいのだが、フェイトは遠慮という文字を知らないようで、ピッタリ隣を着いてくる。

少々早歩きで粘っていたが、フェイトがピッタリ着いてくるので諦め、ペースを落とす。

「そう言うレンヤはなんでこんなに早いのか？特に用事はなかったと思うけど。」

「ああ〜　ここって、女が多いだろ？食事を女だらけの中で食べたくないだけだ。」

適当な食事を選び、受け取っていく。食堂の人たちも、朝早く俺が来ることを理解しているようで、あらかじめ用意されていた。フェイトは昨日のうちに頼んでおいたのだろう。すぐに受け取っている。受け取った食べ物をこぼさないようにしながら慎重に運んで近くの席に座った。

向かいの席に座るフェイトを見ながら、箸を手に取り食事に手をつける。

黙々と食べ進めていると、なにやらフェイトが言いたそうにソワソワとした。

ソワソワソワソワ

ソワソワソワソワ

ソワソワソワソワ

「　　　だぁーッ！何か言いたいことがあるなら言えッ！」

「ひゃうッ！」

箸を机にたたきつけ、立ち上がりながら俺がそう言つと、フェイトは可愛らしい声を上げてビクッと驚く。

フェイトも動かしていた箸を止めて、恥ずかしそうに俯きながら話し出した。

「レンヤはさ、エリオと仲が良いけど　　何か仲良くなるコツでも

あるの？」

「 ああ。なるほど、そういうことか。」

フエイトが恥ずかしそうに話す内容を聞きながら、俺は何で恥ずかしそうにするか納得した。

そういう話を他人にするのが恥ずかしいんだな。見た目も、性格もだけど、そんな風な感じだからな。完璧なお姉さん というか、真面目な感じ。

「 って言われても、特にコツとかは無いな。そもそも、エリオと仲が良いのは似たような境遇だったからだ。」

周りが女だらけで、そのなかに一人男。そこに新しい男がきたら、仲良くなるに決まってるだろ

「 そっか。」

「 んなことしなくても、大丈夫だと思うぞ？」

「 でも、私お母さんなのに、エリオもキャロも全然頼ってくれないし。やっぱり嫌われてるんじゃない？」

「 はあ。」

「 た、溜息吐かなくてもいいんじゃない!？」

「子も子だが、親も親だな」

子は親に迷惑や心配とか、苦勞をさせたくなくて良い子になり、親は頼って欲しいけど自分から言うのは恥ずかしい。嫌われてると思う。

どんな悪循環だ。それ。

勝手に落ち込むフェイトを見ながら俺はそう考えた。

なんか、見てらんねえわ。

「あのな、フェイト。お前は俺に、今みたいな相談をするとき、どんな気持ちだった？」

「どんなって　　恥ずかしいかな？」

「そう！ソレだよ、それ！！」

「ど、どういうこと？」

「つまりだ！エリオやキャラも恥ずかしいんだよ！遠慮してるの！大好きなフェイトさんに迷惑かけたくないとか！」

な、なるほど　　と一人納得しているフェイト。

それを目で見ながら手で食べ終わった食器を食堂の人たちに渡し、皆がやってくる前に俺はさっさと食堂をでた。

後ろで、じゃあどうすれば、とか聞こえてくる声は無視の方向で。

今、俺のやれることは少ない。

暇、と言い換えてもいい。自己鍛練も、いつものデバイスをシャリーに渡しているため、できることは少ないのだ。今は変わりに、剣型のアームデバイスを貸し出してもらっている。

ああ、そうそう。デバイスの中に入っているヤバイデータとかは、痕跡を消して携帯用端末に入れるようにしているから大丈夫だ。

事務作業はこの間終わらせてしまったから、今は無い。訓練も参加できないから、本当に暇なのだ。

え？じゃあ、早起きするな？　女だらけの環境に放り込まれるくらいなら、暇な方がマシだ。昼食は訓練の時間に合わせているのか大丈夫だが、夕食だけは避けられないからな。

待機状態はネックレスみたいにして首に掛けているデバイスを起動させ、動きやすい服装のバリアジャケットを展開する。

このデバイスは戦闘目的のデバイスではないので、戦闘魔法も登録されていない。

展開した剣を振って、感覚を確かめる。

1 2 3とテンポよく振っていき、連撃を止めないように、流れるような動きで振る。いつもの剣より少し大きな剣なので、少し重く感じるが誤差範囲内だ。

俺の剣は、誰かに習ったというわけではない。我武者羅に振って、戦う中でいかに無駄をなくせるか。そう考えながら振ってる剣だ。

別に剣が俺の本領、というわけではないので、そこまで中心に鍛えているわけではない。まあ、よく使う状況だから、コッチばかり戦闘では使ってるな。

ここでハッキリさせておくと、俺が一番鍛えているのは素手や脚を使った、どちらかといえばシューティングアーツ寄りの攻撃だ。

何でかという、魔力吸収の能力は、対象に触れないといけないからだ。いくら剣技を鍛えても、直接触れないので、意味はない。

空気中に存在する僅かな魔素を吸収するのは問題ないが、魔導師戦になると、剣だと問題になる。布越し服越し程度なら大丈夫だけど、剣を伝って吸収は無理だ。まあ、剣は魔力吸収を使わない戦闘の時に使ってるって感じだな。

ヒュオツ

「ッ！」

物体が風を斬る独特の音が聞こえ、反射的に振っていた剣の軌道を無理やり変える。

真横から迫ってくる物体を目の端で捉えて、剣の腹を物体に添え、俺の腹を攻撃するように向かってくる物体を、無理やり受け止めようとはせず、俺の剣に沿った形で上向きに受け流す。

立ったままそれをやると上体が仰け反ってしまうので、しゃがんでしまった。

そのままとまずいので、曲げた脚をバネにして、後ろにジャンプする。

「今のを受け流すか。お前、誰かから剣を習ったことは？」

「なにをするんですか。シグナム副隊長。」

先ほど体勢のためよく確認できなかった攻撃してきた人物はシグナム副隊長だった。攻撃してきた彼女は、戦闘体勢ではないが、バリアジャケットを展開して剣を持っている。

そこまで親しくなかったはずなのだが、一体どういうことだ。肝心の攻撃してきた副隊長は、さも当然かのような様子だし。

「もう一度聞く。誰かから剣を習ったことは？」

「まあ、ないですけど。それがなにか？」

「道理で 型がないわけだ。」

言い終えた彼女は足を踏み込み、一気に距離を詰めてきた。

「ちよ！？」

ガキンツと音が何度も鳴り、剣が何度も振られる。不意打ちだったが、なんとか体勢を立て直し攻撃を受け流していく。

筋力がとても女とは思えない。 ということは魔力によるブーストをしてるってことか。

俺は気づいたその事実には舌打ちする。魔力によるブーストをされると、魔力で劣る俺が対抗できるわけがない。

経験を頼りに受け流し、次の動作が早くできるように最小限で受け流す。

このままじゃあ、魔力が尽きる。 だったら ツ！

一撃を受け流して直後に思い切り踏み込み、魔力を瞬間的に爆発さ

せたように高める。

一瞬爆発的な加速をして踏み込んだ俺の剣は彼女を捉え

ガツンッ！！

真横から腹に殴られたような強い衝撃が走る。

「ガハッ  
」

無理やり空気が肺から吐き出される。

加速した勢いのまま、すれ違うようにシグナム副隊長の横を通り過ぎ、地面に叩きつけられる。

「お前は技術的な面ではよくできてる。」

受け身を取ったので直ぐに顔を上げれ、彼女を見るとそう言われた。

戸惑う俺を置いて、彼女は話していく。

「経験もいい。だがお前は剣を誰かから習ってない。」

「それがどうしましたか？」

「型がない。それ故に攻撃による対応が遅れていることがある。」

「さっきの攻撃もそうだ。と副隊長は言った。」

「言い返せない事実だ。それは俺も剣で戦う中で感じていたこともある。」

「吹き飛ばされたときにされた攻撃は単純だった。」

「振り切った体勢の剣を引き戻すようにして繰り出した柄による一撃。それを腹に受けたのだ。」

「こういった状況になったときには、こうすればいい。そういった決められた型があるのとないのでは、対応速度が圧倒的に違う。経験と技術では学べないことだ。」

「さて、私が何しに来たか説明しようか。」

「大体予想がついたが、遠慮します。と言いたかったが、言えなかった。」

「無反応の俺を無視して、彼女は言葉を続ける。」

「最近のお前は随分と暇らしいな。事務作業も直ぐ終わり、剣を振っているだけ。」

「それしかすることがないもので。」

「それを知った主はやてに頼まれてな。同じ剣を使うんだし、鍛えてやれ。だそうだ。訓練にも参加してないみたいだし、丁度いいだろう。」

彼女は再び剣を構える。

それを見た俺は慌てて立ち上がり、剣を構えた。

「私は教えるのが苦手だな。近づいて斬れ、ぐらいしか言えん。」

「  
模擬戦から学べ、と?。」

「そうだ。一応、注意くらいはしてやる。そこから盗み取れ。」

「ルールはどうするんですか?。」

「お前はデバイスが貸し出しらしいからな。魔法は自己ブーストだけだ。いいな?。」

言い終えた彼女から魔力が滾るのを感じ、俺も魔力で強化する。

無駄に消費はできない。強化部位は最低限、動体視力と手足でいいか。

「始めるぞ。」

やっぱり、拒否権とかないのか？

近づいてくる彼女を見ながら、そんなことを考える俺だった。

オマケ

「はやて。聞いたよ？書類、大変だったってね？」

「そうそう！ホンマ山のように書類がきてな。シグナムがこんかつたらどうなってたかと思うたで！」

「そ、そんなに 大変だったね？」

「まあ、犯人は今頃苦しんでるやろうけどな！」

「だ、大丈夫？顔色悪いよ、なのは？」

「（ ） 言えない。本当は私のミスだって、はやてちゃんには言えない。」

## 訓練とかしてみる（後書き）

終了です。

前書きでもいいましたけど、1/5日の投稿はもう一つあります。

アンケートですけど、まだ集計終わってません。もう少しまっけてください。

感想でもいいましたけど、この小説は取りあえず完結！を目標にできてます。

矛盾とかここおかしい！とかあるかも知れませんが、ストーリーに支障とか相当な矛盾じゃない限り、修正しません。

そのところを頭に入れて読んでください。これからそういつとくるがあるかもしれません。

ある日のお話とかしてみる(前書き)

どうも、今日分投下です。

昨日投稿を2回すると言いましたが、シヨボイミスをしてしまった断念。

明日あたりに2回投稿すると思います。すいません。

え？ミスって何だっつて？ 5話より先に6話を書いてしまった  
って感じだよ。

わ、笑うなら笑ってしまえっ

注意) ヴィータがおかしなことになってますが、フラグ立ちません。  
そのところ頭に入れておいてください。

## ある日のお話とかしてみる

訓練が始まって約1週間。

訓練時々事務作業を繰り返してる日々。

ようやく少しこの日常に慣れてきた。

慣れてって恐ろしいよね

魔法少女リリカルなのはstriker's 始まります。

「シ、シグナム副隊長は手加減を知らないのか」

ちよっとフラフラになりながら俺は目的地に向かって歩いていく。

目的地は食堂だ。

おっと、すまない。レンヤ・カワカミだ。

何をしているかというと、つい先ほどまでシグナム副隊長に調きよ

違った。訓練されて、それが終わったので朝食を食べに行っているところだ。

残念なことに、副隊長との訓練が始まってから、朝早くに食堂に行くことがほとんどなくなってしまった。早朝訓練もやりだしたからな。

まあ、なにが残念かというと、朝食で女に囲まれないといけな  
いことだ。副隊長は先に行っている。

「やっと着いた」

足がフラフラだったから、距離をやけに遠く感じた。とりあえず食事を受け取って、こぼさないようにしながらこの席に着くか見渡す。

「レンヤさ〜ん!!」

「ん?」

名前を呼ばれたのでそちらを向くと、元気良く手を振っているエリオがいた。フォワードの面々などと食事を囲んで、ちょっと居辛そうにしている。

なるほど 助けて、ということか。見捨てたら流石に可哀想だから、行ってやるか。

「おはよー」

「だ、大丈夫ですか？」

いまだに若干フラフラとした足取りで向かうと、着いたテーブルでキヤロが心配してくれた。ええ子や。

そんなキヤロに大丈夫、大丈夫といいながら席に着き、箸を使って食事を開始する。

「ねえ、レン兄。」

「どうした？」

箸を動かして食事をしていたのを一時中断し、話しかけてきたスバルの方を見る。

あまりまだ食べてないから、はやく食べたいんだが

「いつも思うんだけど、そんなのでよく食べられるね？フォークとかスプーンとか使わないの？」

「そんな　？ああ　箸のことか？」

そう言えばそうだったな。ここは日本じゃないから、箸がないのは当たり前か

え？お前はなんで持ってるのかって？特注だよ、特注。作れそうな人に頼んで作ってもらったのさ。特注っていうのか？

まあ、ここの食堂も、地球の日本出身がいるからな。食堂の人に頼めば普通に借りれるけどな。使ってるの隊長達だけだけだ。

「まあ、使い慣れると意外と簡単だぞ。隊長達も、たまに使ってるしな。」

「へえ〜　そういうものなの？」

「そういうものだ。ようは慣れればどうってことはないんだよ。」

そう言った後、再び食事を開始する。

周りを見れば、時間帯が時間帯なので、既に結構な人数の人が食事に来ている。　　やっぱり、女ばかりだと居辛いんだが。

居辛さを紛らわすように、俺はエリオ達に話しかけた。

「訓練の方の調子はどうだ？うまくいってるか？」

「うまくいってるかは分からないけど　　なんとか、ついて行ける感じ。」

「アタシの方は、ちょっとコツを掴んできたかも　　？」

あいかわらず凄い量の食事をしながら、エリオとスバルはそう答え

た。

それとスバル。何故に疑問系？

「そう言えば、レンヤさんは召喚師なんですよね？」

「まあ、そうだが」

「それじゃあ、キャロのフリードみたいな召喚獣はいるんですか？」

フォークで食事を頬張りながら、ティアアナが話しかけてきた。ティアアナも、どこか一線引いているような感じがする。

感じがするだけであって、ただ単にツンデレのツンかもしれない。デレないだろうが。

363

「ちょっと召喚師について勘違いしているかもしれないから言っとくが」

「何がですか？」

「召喚師がキャロのフリードみたいな召喚獣を連れてくることは少ない。」

俺の説明を聞いて、エリオがへえ〜といった表情になる。

が、スバルは納得出来ないようで、質問してきた。

「へ？何で？持ってた方がいいじゃん！強そうだし！」

「あの子　召喚獣だって生き物なんだぞ。例えば　そうだなあ。じゃあ、スバル！お前は見知らずの人に忠誠を尽くす奴隷になれ！と言われてなれるか？」

「な、なななな！なれるわけないよ！そんなの！」

お、真つ赤になっちゃって。可愛いやつだな　はっ！？いかに  
いかに！思考がそちら寄りに！？

真つ赤になるスバルを見ながら、俺は説明を続ける。

「つまり、そういうことだよ。召喚獣が、そういう契約をするということは、その主が死ぬまで一緒にいる忠誠を誓うということ。契約破棄とかはあるが、大雑把に人間で例えると大体そういう意味だ。」

「ということは、レンヤさんは持ってないってことですか？」

「いや、普通にいるけど。」

「じゃあ今までの説明は何だったんだよ！という皆の視線はスルーの方向で。」

「えっと、レンヤさんは、シグナム副隊長と訓練をしてるんですよね？大丈夫ですか？」

召喚師ということもあり理解できていたのか、はたまた天然さんなのか。空気を無視してキャラコが食事の手を一旦止め、俺にそう質問してきた。

さっきもフラフラでしたし。と彼女は付け加える。

「あれは、訓練中に軽く10回は死ぬる。」

「そ、そんなに酷いんですか!？」

「いや、言葉通りの意味ではなく。それくらいキツイってこと。」

キャラコが、そんなに!?!となにやらショックを受けている様子だったので、慌てて訂正する。

冗談もオチオチ言えねえ 純粹なのは大事だが、純粹すぎるのも考えものだな。フェイトとか、フェイトとか、フェイトとか。

「シグナム副隊長は見かけ通りに愛情表現が激し?????」「ほおう?」「」

「愛情表現が激し なんだ?」

あれ?おかしいな?すぐ隣にピンク色の髪が見えるんだけど キ  
ノセイダヨネ?

最後まで言い切る前に聞こえてきた声に、俺は冷や汗をダラダラと洪水のようにかく。

まで、までまで。早まるな、俺！選択肢を間違えるな！ここで間違えば嫌な方のフラグが立つぞ　！

「あ、愛情表現が　」

「愛情表現が？」

「激し????かったらいいのになあ」

「今日は事務処理があるそうだからな。明日は覚悟しておけ。どつやらもつと激しいのが好みらしい。」

神は死んだ。

食事の終わった俺は、オフィスで突っ伏していた。

「終わった　　グッバイ俺。」

絶賛テンションガタ落ちの俺は、事務作業のデータ処理をいつも通り魔力を供給したフィーにやってもらい、処理していく。

何もしなくても結構な量が減るのだが、流石に俺も確認作業をしなといけないし、書類の処理だってある。

「　　いつまで、こんな風にしても仕方ないか。」

ゆっくりと動き始め、確実に処理していく。

まあ、書類といっても、目を通して簡単にまとめたり、データを打ち込んだりするだけなんだけどな。

そんなことをしていると、近くで物凄い音がした。

ガシャンツツツツ！！

何かが机と大きく衝突したような音だ。

音につられてそちらを見ると、顔を青くしてこちらを見る人物がいた。

その人　　ヴィータ副隊長は、ふと我に返ったようにハツとなり、ズンズンとこちらに近づいてくる。

「あの時は、すまねえ!!!アタシが」

「ちょ、ストップ!!!ストップ!!!」

オフィスの　それもまだ人のいる中でいきなり頭をさげだしたヴィータ副隊長。

流石に注目を集めたので、中止させ辺りを見渡す。　　うえ、めっちゃ見られてる。

「　とりあえず、場所を移しましょうか。」

「　そうだな。」

流石にこの視線には耐えられなかったのか、ヴィータ副隊長も納得したように移動を開始した。

「アタシがあの時ボーっとしてたせいで 本当にすまねえ!!」

移動先についたときのヴィータ副隊長の最初の言葉だ。

場所は隊舎の外。

オフィスで目立つようにやってしまったので、誰かが興味本位でついてくるかと思ったが、誰もついてきてないようだ。

「別に もうあのときのことはいいですよ。」

これは俺の本心だ。

あの時のことは、別にもういい。大分前のことだし、それにあれは俺が自分で望んでやったことだ。感謝されるのはいいが、謝られると逆に迷惑だ。

その後のことだって、なのはやヴィータのせいではない。上層部がかってにやっただけだ。

「だ、だけだよ!」

「じゃあ、副隊長は自分になんて言って欲しいんですか?」

罵ってほしいんですか？それとも優しく声をかけてほしいんですか？と続ける。

俺の言葉に、ヴィータ副隊長は喋るのをやめ、押し黙る。

今の副隊長は、どうも謝ることで自分の精神を保とうとしている。そういう風に見える。

「自己満足のために謝ってるんならやめてください。」

「ち、違っッ！」

大きな声を張り上げて、俺の言葉を否定するヴィータ副隊長。

ああ　目の端に涙が溜まっている　やりすぎたか？

「はあ　」

自分でやってしまったとはいえ、この状況に居辛さを感じ、ため息を吐く。

このままにはいけないだろうから、元に戻すために頑張るとするか。

「もう一度言いますが、あのときのことはもう大丈夫です。許します。」

「 「

「でも、ですね。あなたはまだ言っていないことがあります。」

「す、すま 「

「だあ！！違いますよ！謝ることじゃないです！」

また謝りそうになったヴィータの言葉を遮り謝らせない。

なんで、ここの世界の登場人物の人たちは、そんなに謝りたがるんだ？

「ありがとう っって言って欲しかったんですよ。」

「あ、ありがとう ？」

「そうです。」

おい。なんで意外そうな顔をする。無理を言いつけるような鬼畜にでも見えたのかゴリア。

まあ、愛があればそういうのも ゲフンゲフン！！今の無しで。

「友達を庇ってくれてでもなんでもいいです。ありがとうございます。それでこの話は終了です。」

「それで、それでお前はいいのか？」

「ええ、それでかまいません。寧ろ頑張ったのに、お礼もなしとか報われなさすぎです。」

大怪我負ってまで庇ったのに、本人からもお礼がないんだぞ。

せめてヴィータ副隊長だけでもいいんで俺にお礼くらい言ってほしかった。何で皆謝ってくるんだ。

「

「

「

「早く言ってく下さいよ。」

「わ、分かってる！そんなこと！」

「じゃあ、早く言ってください。」

恥らうように顔を真っ赤にして反論するヴィータ副隊長。

お、これはもしかしなくても、いいものを俺は見ているのかもしれない。

「あ

「あ?」

「ありがとう!」

言づが早いか、言い終えると走ってこの場を去っていった。

い。  
そんなに顔を真っ赤にして走ってたら、誤解されるぞ。お

オマケ

「ねえねえ、フェイトちゃん。」

「なに?なのは?」

「さっきヴィータちゃんが顔を真っ赤にして走っていったけど、何か知らない?」

「うん。ちょっと思い当たらないかな?」

「はっ!なのはちゃん!それは恋や!間違いなく恋しとる!...!」

「「うわ!?!はやて)ちゃん(?!?」「」

「それで、誰か走ってきた方向におらんかったか？」

「あ、そういえば複雑そうな顔でレンヤ君が歩いてきたような」

「間違いない！ヴィータは告白した後や！」

「聞こえてるからな！！？違うに決まってるだろ！！！」

「（ あーあ。言わんこつちやない。 ）」

オマケ2

「ニヤニヤ。」

「

「ニヤニヤ。」

「 なんですか、部隊長。そんなにニヤニヤして。」

「 いや、別になんでもあらへんよ。うん。」

「 言いたいことがあるなら言ってください。」

「 いやー、ヴィータにも守ってくれるような人ができるかもしれへ



ある日のお話とかしてみる（後書き）

箸云々って、書いてもよかったですかね？

アニメで何もなかったから、とりあえず書いたんですけど。

書いた後に不安になってきた

今回はヴィータのアレを書きたかっただけです。

いや、原作の戦闘前にアレやっておかないと、ヴィータとロクに話せないどころかストーリーすら進めれないことに気がついた。

あんな感じでしたけど、フラグ立ちません。

フラグで思い出しました。アンケート結果です。

はやて 16票

ギンガ 13票

キャロ 12票

ティアナ 5票

ヴィヴィオ・シグナム 3票

ルーテシアなどその他 2票

きゃ、キャラ多いな

ほとんど3人で競い合ってるw

というわけで、人気のある上から3人にもフラグを立てます。

キャラ 自分で言うのはアレだが、フラグを立てるのは少し難しいな

まあ、焦らずフラグは立てますが。

エリオとルーテシアをくっつけちゃいましょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0919z/>

---

魔法少女の世界に転生とかしてみる

2012年1月6日19時50分発行